

kinokopress.com

www.kinokopress.com

地球温暖化の果てに 第三部

# 狂風雨震列島

生野 以久男



## プロローグ

日本列島は依然として高温の海水域に取り囲まれ、地球上のホットスポットとなっていた。ホットスポット「ヒートアイランド日本列島」が熱エネルギー配分の不均衡により生じた現象であるとすれば、いずれ均衡（不均衡の是正）へ向って大攪乱が起こることが予測されるのだ。

地球表面の熱エネルギー分布不均衡状態を是正するために、気候システムはどのような手段を講ずるだろうか。長い時間かけて徐々に是正を図るのか。それともホットスポットを一気に解消しようとするのか。

地球温暖化とともに、異常気象がますます頻発するようになった。気象現象が以前に比べ、荒々しいものへと変貌した。ホットスポット「日本列島ヒートアイランド」の出現によって、さらに気候変動に激しさを加えようとしていた。

この夏、日本列島を襲った熱波は、まさに極限のような気象現象であった。つぎに襲う熱波はさらに高温になるにちがいない。

日本列島はヒートアイランド化を繰り返し、そのたびに日本列島ヒートアイランドに熱エネルギーが蓄熱され、そして熱エネルギーの激しい放射放散が繰り返されようとしていた。

熱波に襲われたヒートアイランド日本列島が台風シーズンを迎えていた。

台風は高温の海水域で発達する。日本近海の高海水温域で、台風はさらに超大型化するのか。竜巻や突風はどうか。ゲリラ豪雨が頻発し、いたる

ところを襲うのか。

いずれにせよ、日本列島ヒートアイランドに集中集積した熱エネルギーを一刻も早く効率よく運搬し、地球の隅々まで分配する必要があるのだ。日本列島はいま、その日を迎えようとしていた。

ホットスポット「日本列島ヒートアイランド」をもたらした気候変動は、また地震列島日本列島に新たな問題を生み出していた。

地球表面での熱エネルギー配分の不均衡によって大気圏における大気大循環も大きく変わりつつあった。大気大循環の変動は地球の自転速度に影響をおよぼす。自転速度の変化はマントルの動きに影響を与え、巨大地震を誘発する恐れがあったのだ。

# 第一章

1

「どうした、怖い顔をして」

佐々木教授がにこやかな顔をして研究室に入ってきた。

「あ、先生……」

九鬼はいつものようにディスプレイを覗き、いかつい顔を顰めて地球探査衛星から送られてくる画像をチェックしていた。

九月に入り、日本列島に酷暑をもたらした熱波が急速に衰え出した。だが彼はつぎにヒートアイランド日本列島になにが起こるか心配だった。

熱エネルギーをしっかりと貯め込んだ日本列島に周りの高温海域から湿った暖かい空気が大量に流れ込めばどうなるだろうか。

西太平洋赤道付近の海水温がまだまだ著しく高く、広い範囲に高水温の海域が広がっていた。世界各地に異常気象をもたらすラニーニャ現象がいまだに成長をつづけているのか。

この夏、熱帯域ですでに数個の熱帯低気圧が発生していた。いずれも日本列島上空に張りだした太平洋高気圧に阻まれ、その縁に沿って西へ向かった。そのまま西へ進み、中国大陸に上陸した。日本列島には影響をおよぼすことはなかった。

だが日本列島を覆っていた太平洋高気圧が衰えはじめ、東へ移動していた。いま熱帯低気圧が発生すれば、巨大に発達して日本列島めがけて北上するにちがいない。

日本列島周辺海域にはいまだに高温海水が広がっている。これでは日本列島に上陸するまで、台風は発達しつづけ、巨大化することだろう。

彼は熱帯低気圧発生兆しの兆しがないか探した。

「九鬼くん……」

佐々木はまだディスプレイに目を向けている彼にふたたび声をかける。

「はい……」

佐々木はいつもなら彼の机まで寄ってきて、一緒にディスプレイを覗くのに、なぜか応接セットのところに立ったままだった。彼はしぶしぶ椅子から腰を上げ、教授の方に顔を向けた。

教授の横に三〇才前後の落ち着いた感じの、背丈は高くないがすらりとした感じの細身の女性が立っている。いままで一度も会ったことのない女性だった。

「……あ、どうも……」

彼は突然現れたショートヘアの女性に驚きの声を発した。教授のかけに隠れて机に座っている彼から見えなかったらしい。

近づくと、丸い顔の女性は笑みを浮かべた黒目がちの大きな目を向けたまま、ぴよこんと頭を幾分斜めに下げた。

「佐橋裕子さんだよ」

佐々木が紹介すると、彼女が名刺を差し出した。彼は机に自分の名刺を取りに戻り、ついでにこれまで見ていたディスプレイに目を走らせる。熱帯域に小さな白い雲が浮いている。

彼の脳裏で小さな白い積雲が見る間に厚い大きな雲となっていく。積乱雲か。気になってディスプレイに目を近づけようとしたとき、彼は佐々木と彼女の視線を感じて素早く身を翻した。

「九鬼陽一郎先生でしたか。まえにどこかでお見かけしたような気がしておりましたが……」

夕刊の記事や週刊誌で何度か彼の写真を見たようだという。あるいはテレビだったかもしれない。

そう言われて、彼は手に持ったままになっている彼女の名刺に目をやる。

T建築事務所一級建築士佐橋祐子とあった。

「建築士ですか……、建築士というビル設計……」

彼は名刺から目を離し、彼女をしげしげと見る。含羞んでいるような光を帯びた大きな目はどこか亡妻亜耶子を思わせた。その瞬間、脳裏に上空いつぱいに発達した巨大な積乱雲が浮かんだ。

「いいえ、わたしは構造計算のほうを……」

「あるとき、この方に救われたのだよ」

教授が口を挟み、ぼつりと言った。

「え？ あるとき……」

彼は教授の顔をじつと見る。

教授が高架橋で立ち往生した新幹線の列車のデッキから飛び降りて足を挫いたとき、彼女が病院へ連れていってくれたのだという。

「いいえ、それは違います。先生のお陰で、息子は命拾いましたのです。ヒロシの命の大恩人ですわ」

「そんなことはありませんよ」

「ヒロシは熱中症になりかけていたのです。あるとき、お水を分けていただけなかったら、どうなっていたことか……」

佐橋祐子は一瞬目を潤ませる。

彼は片手で名刺を弄くりながら、ソファで身体を幾分よじって互いに目

を見てやり取りしているふたりをぼんやりと眺めていた。

「ところで、台風時の最大風速はどのくらいになるかな。これまでの二倍にはなるかな。台風は巨大化の傾向にあるが……」

彼の視線に気付いたのか、佐々木は慌てて身体の向きを戻しながら、突然数から棒に言う。

「いま、新しい超高層ビルの構造計算を担当しているのですが、台風時の風速が最大でどの程度でなるのか、それがどのくらい持続するものか、お教えいただこうかと、お訪ねしたところでしたが……」

彼女は笑みを浮かべた目を教授に、そして九鬼に向けた。

日本では超高層ビルの建設が本格化してから日が浅い。消防法では「高さ三一メートルを超える建築物」を高層ビルといい、これに対して、基準法では「六〇メートル以上の建築物」を超高層ビルというが、一般に、超高層ビルといえば一〇〇メートル以上の建築物を指すことが多い。いまでは日本でも三〇〇メートルを超えるものも建てられている。

「さあ、温暖化で台風が巨大化の傾向にあります。最高で二倍になることもあると思いますが、平均的にいって、従来の一・五倍ぐらいじゃないですか、最大風速は。持続時間はそのときの状況によりますね」

九鬼は素っ気無く応える。それにしても大学の研究室までなんでこんなことをわざわざ聞きに来たのか。

佐々木が困ったような顔をしている。九鬼はふと教授が彼女を紹介するために、わざわざ彼の研究室に連れてきたのかもしれないと思った。

「九鬼くん、一・五倍というと、これまでの最大級で秒速約七〇メートルだから、一〇〇メートルを超すものもあるということかね、今後は」

「瞬間ではなく、長時間その程度の風が吹きつづくということですか」

「そう、いま話している値は一〇分間の平均値のことだから、巨大台風ではその程度の風が連続して吹くということ……」

彼は佐橋祐子を見た。

「ホントですか。一〇〇メートルもの風が一〇分間もつづいたらどうなるかしら。瞬間風速ですと……」

彼女は心配そうな顔で呟く。

「瞬間風速では八五メートル強の記録がありますから、一二〇メートルを超えるかもしれません」

彼は事務的に応える。

「まあ……」

「九鬼くん、佐橋さんは超高層マンションの最上階の上に住んでいる」

「え？ そんなところに……」

彼は目を大きくしてまじまじと彼女を見た。

最近の都市は上へ上へと延び、超高層ビルが林立するようになった。高層建築物の構造も剛構造から柔構造へと変わってきている。ことに日本では、地震対策もあって、超高層建築物では地震動とともに揺れて振動を吸収する柔構造が支配的だった。

柔構造の超高層マンションは地震には強いが、最上階はかなり揺れるのだ。それを防ぐ免震構造や制震構造が開発され、これらも取入れられるようになってきている。

「実は、長周期地震動のデータを取ろうと思いましたが……。住んでいるわけではないのですが、寝泊まりできる実験室かしら」

これまでの地震対策は通常の地震動に対して考えられたものに過ぎなかった。最近になって、地震発生時に通常の短い周期の地震動のほかに、長周

期の地震動が生じることが指摘され、問題視されるようになっていたのだ。

地震発生時には通常の小刻みの振動のほかに、数秒から十数秒の長い周期で揺れる長周期地震動が発生する。この振動は周期が長い分遠くまで届く。たとえば東海地方の大地震によって、遠く離れた東京の超高層建築物を大きく揺らすということだ。遠方の地震で都会の超高層建築物が思わぬ地震被害を被ることになるのだ。

とくに問題なのは、このような長周期地震動が超高層建築物と共振する可能性があることだった。共振とは建物などがもつ固有振動と同じ振動が外部から加わると、極端に大きな振幅が生ずる現象だ。大きな振幅は当然破壊力も大きい。窓ガラスや外壁が壊れる。場合によっては構造本体に損傷が生じる。

東海地震などの大地震発生時に生じる長周期地震動が遠く離れた都市の超高層建築物群の固有振動の周期と重なり、共振しないか心配されているのだ。

地震発生時の通常の短い振動に対しては、すでにいろいろな対策が開発され、最近の超高層建築物には取入れられてきている。だがこれらの制震構造や免震構造といった対策は長周期地震動には効かない。むしろ、これらの対策が長周期地震動の被害を増幅する場合もあるらしい。

困ったことに、長周期地震動については十分なデータがなかった。設計段階で対策を施すことも全然なかったのだ。

長周期地震動のような長い周期の振動は、実は、超高層建築物の固有振動数と一致しやすいのだ。だが超高層建築物を手掛けるようになってから日の浅い日本では、長周期地震動のデータも殆どなく、対策を考えるシミュレーションも不十分なものだった。

「データをとるため？ まるで人体実験じゃないんですか」

彼は目を丸くした。

「そのとおりですわ」

彼女は屈託なく笑った。

人体実験でもデータがないんだからしょうがないと彼女は言う。長周期地震動のメカニズムはある程度シミュレーションで説明することは可能だ。

これに対して、風の影響は見当がつかないというのだ。計器類で測定できないデータは人体実験でとるほかないのだと笑う。

確かに、柔構造の超高層ビルは、剛構造と違い、揺れやすい。ビルのような建造物に大風が吹けば、ビルの形状や配置によっては強烈なダウンウォッシュやダウンバーストのようなビル風や乱流を起すが、猛烈な強風ともなれば、ビル自体も揺れる。制震構造や免震構造でも最上階の揺れを小さく抑えることができても、全く揺れをなくすることはできない。

ビルに対する風の影響は殆ど身体に感じるか感じないかといった微妙なものだが、柔構造の超高層ビルにはこのようなデータは全然なかった。自動計測器で測っても、微妙な人体の感じ方まで観測することはできないのだ。

温暖化で台風が巨大化してきている。それに最近では竜巻も方々でたびたび発生する。強力な竜巻が襲ってきたら、柔構造の超高層ビルはどのように対応するのか。

「なるほど、そこまですて快適なマンションを追求しようというわけですか」

彼は半ば感心し、半ば呆れる。

こうしてでき上がった快適マンションに住む住人でさえ、停電でエレベーターが止まれば何十階もの階段を息を切らして上り下りすることになる。

なにごとにも限度というものがあるのではないか。限度を超えてムリしても傍から見れば滑稽なだけだ。だが現代文明は限度を知らない。つねに限度を超えて発展してきたのだ。限度ができればそれがつぎの飛び越えるべき目標となる。だとすれば、限度を超えた社会にはこれまでとは別の原理が働くということか。

佐橋祐子はちらつと腕時計に目を走らせると、佐々木教授に顔を向ける。

「それじゃ、九鬼くん。今日はこのくらいで」

佐々木が口の中でもぐもぐと言ひ、腰を上げる。

「なにか分からないことがあったら、いつでもいらして下さい」

彼は礼を言う彼女にちらつと視線を走らせ、ふたりを見送った。

## 2

「あ、これは……」

九鬼は佐々木と佐橋祐子を送り出すと、急いで机に戻り、ディスプレイを覗く。熱帯域に浮かんでいた雲が渦を巻きだしていた。発生して間もない熱帯低気圧が台風へ変身したらしい。

日本列島周辺に焦点を合わせる。いつの間にか、日本海に長径二、三〇〇キロメートルもある黒い厚い雲が東西に広がり、ゆっくり東へ移動している。

「台風並の大暴風雨か……」

彼は不吉な予感がした。

日本列島周辺の海域の表面水温はまだ三〇度を超している。海面から大量の水蒸気が立ち上っているにちがいない。それに日本列島の上空にはまだヒートアイランド名残りの乾燥した大気が勢力を張っているだろう。

低気圧にともない、水蒸気を大量に含んだ厚い黒い積雲が日本列島に接近しつつあった。やがてゲリラ豪雨をもたらす巨大な積乱雲へと発達していくのだ。

日本海側で集中豪雨を降らせた積乱雲は中央部の山岳地帯ですっかり水蒸気を吐きだしてエネルギーを使い果たすと、乾燥した大気となって関東平野に吹き込むのだ。フェーン現象で気温が上昇したところに、今度は南からたつぷり水蒸気を含んだ湿潤な空気塊が流れ込み、つぎつぎと積乱雲を急成長させるにちがいない。そして、太平洋側の広い範囲にも集中豪雨を降らすだろう。

電話のベルが鳴った。

「地球温暖化で地震が頻発するようになるそうですが、ホントですか」

M新聞の佐藤だった。

「海面上昇が進むとその可能性がある」

「いや、気候変動が巨大地震や大噴火の引金となるといいますが……」

「ああ、そういう説もあるようだが……」

「デタラメですか」

「考えられないこともないが……」

彼は黒い積雲が気になっていい加減に伝えてしまう。佐藤はどう感違えたのか、もっと詳しく聞きたいといって電話を切ってしまった。

日本海に広がっていた黒い積雲は日本列島に近づくにつれて発達し、つぎつぎに巨大な積乱雲となり、広い範囲に激しい雨を降らせていた。

能登半島、富山や新潟の沿岸地方から山岳地帯にかけ一時間百数十ミリの集中豪雨が降った。山崩れが起き、人家を押し流し、道路が寸断した。河川の水量が急激に増す。山間部に造られたダムから瞬く間に水が溢れ

出た。危険水位を超えた都市河川で堤防が決壊した。洪水が広い範囲に広がっていく。

「いやに暑いなあ。熱波がぶり返したのかな」

佐藤がソファで小作りな顔中に噴きだしている汗をタオルのハンカチで拭きながら、まだ机から動こうとしない九鬼にも聞こえるようにか、小柄な身体に似付かわしくない大声で言う。

それでも彼はディスプレイのまえから動こうとしない。

「やあ、佐藤くん、来ていたのか」

佐々木教授がドアから顔を出した。佐藤の声を聞きつけたらしい。

「気候変動が巨大地震を誘発すると聞いたので、本当かどうか教えていたかどうかと思ひまして……」

佐藤はまだ机にいる九鬼の方に目を向ける。

彼は教授の声に顔を上げた。教授が佐藤の前の椅子の腰を下ろすところだった。彼もようやくやく腰を浮かす。

「気候変動が巨大地震を誘発する……」

「ホントですかね」

教授と佐藤が話している。

彼は教授の隣の椅子の身体を滑り込ませ、ふたりのやり取りを見守る。彼の頭のなかでは黒い積雲が渦を巻きだしていた。

「地球の気候変動を決める要因にもいろいろあるが……」

佐々木は九鬼の顔を見る。

「気候変動によってもたらされる大気大循環や海流の変化が地球の自転軸の位置や自転速度を微妙に変化させることが考えられる。もし気候変動が巨大地震を誘発することがあるとすれば、これらが地球内部のマントルの流れに影響をおよぼし、地殻構造になんらかのストレスを与えるからかもしれない」

地球における気候変動は地表へ降り注ぐ太陽エネルギーの変動のほかに、さまざまな要因によって起こる。たとえば、地表に降り注ぐ太陽エネルギーの量は太陽の公転軌道の変化や太陽活動の消長により変化するが、大気中における二酸化炭素などの温室効果ガスの増減や宇宙における太陽系の位置変化などによっても地球気候は影響を受ける。また、宇宙から地球に降り注ぐ放射線の増減によって雲の量が変わり、これによって地表へ降り注ぐ太陽エネルギーの量も変動し、気候変動がもたらされることもある。

とにかく、地球における気候変動はさまざまな要因に基づくが、いま問題になっているのは人間活動によって大気中の二酸化炭素が急激に増えているために生じる地球温暖化による気候変動である。

地球の大気圏においては、地球大気に固有の動きがある。これが大気大循環である。この大気大循環が気候変動によって乱れだしているのだ。

大気大循環は対流圏における大気の地球規模の循環現象であって、これは地球の自転と赤道熱帯域極域間の温度差とにより生じる二種類の地球大気の固有の流れ（風系）からなっている。

ひとつは、地球の自転効果として生じるもので、これは地球規模で東西方向に卓越した大きな風の流れだ。熱帯（低緯度）では偏東風（貿易風）で、中緯度では偏西風となる。これが日本列島上空を西から東へ吹くジェット気流だ。極域（高緯度）になるとふたたび偏東風となる。

これに対して、もう一方は、赤道付近の熱帯域と極域との温度差によって生じる南北方向の地球規模の大気の流れだ。大まかに言えば、低緯度付近で太陽放射によって加熱されて軽くなった大気が上昇気流となって高緯度へ流れ、次第に冷えて極域で下降気流となる大気の流れである。

だが実際にはこの流れは低中高の緯度別に南北半球それぞれに三つの小循環を形成する。すなわち、低緯度では自転軸に対して軸対称的な循環（ハドレー循環）となり、北半球では南から北へ、南半球では北から南だ。中高緯度になると、地球の自転効果によって非軸対称的な波動が卓越して逆周りの循環（フェレル循環）となる。極循環はもとに戻るといってわけである。

このような固有の大気大循環はさまざまな要因で変動してさまざまな現象を引き起す。たとえば、熱帯を吹く東風の貿易風は強まったり弱まったりすれば、世界各地に異常気象を引き起すエルニーニョ現象やラニーニャ現象を起す。中緯度を吹く偏西風はときどきコースを変えて蛇行したり、二つに分かれたりしている。また地球温暖化の影響を受けやすい高緯度の気温が急上昇するようになると、熱帯から極域への気流が弱まり、大気大循環に大きな影響をおよぼすことになるだろう。

「実際に気候変動が地球の自転速度に影響をおよぼすというのですか」

佐藤は信じられないといった顔付きで、九鬼を見た。

「地球上には自転の影響を受けて生じている大気の大きな流れがある。偏西風や貿易風などだ。海流にもある」

「大気大循環が変化すると、自転が影響を受ける。自転速度が変われば、さらに大気の流れに影響がでる。エンドレスにつづく」

「そうだ。地球上の出来事はすべて相互に影響しあって全体システムを構

成している。だから地球上の個々の現象を個々の見ているは見間違っている。全体的に見ることが不可欠なのだ。地球上ではすべてが相互に関係しあっていて、全体でシステムを構成維持しているのだから」

「かといって、日本列島ヒートアイランドが東海地震や南海地震といった巨大地震を誘発するなんて考えられますか。たとえ、気候変動が気候大循環に影響をおよぼし、それが地球の自転速度を変えとしても、これによって巨大地震が引き起こされるなんてどうしても考えられません……」

佐藤にはどうにも腑に落ちないらしい。

地球は超スピードで回転している球体だが、大まかに言えば、表面は固い地殻で覆われているものの、内部には高温の柔らかい物質が詰まっているのだ。中心の核（コア）は比較的固いが、その周りのマントルという物質は高温で流動する状態にある。比喩的に言えば、地球は芯（コア）の周りにマントルと呼ばれるクリームが詰まっているクリームのパンのようなものだ。パンを軸中心に超高速で回転させるとパンの中味のクリームが水平に移動して扁平になる。なかのどろどろのクリームが回転方向へ移動し、軸から一番離れたところへ溜まるからだ。これに対して、回転スピードが落ちれば、パンは回転軸方向へ膨らむ。中味のクリームが逆に回転軸の先端方向へと移動するのだ。

地球の表面を覆う固い地殻は何枚かのプレートで覆われている。プレートは年一〇センチ程度のスピードで成長する。プレートとプレートの境界が海溝で、プレートがぶつかり合うところだ。そこで一方のプレートが他方のプレートの下へ無理やり潜り込むこともある。逆にすることもある。そのときプレートとプレートとの接触面にストレスが溜まり、歪みが生じる。歪みが解放されるとき、地震動が生じる。これが海溝性巨大地震であ

る。このほか、直下型地震のように陸地や海底のプレート内部で発生する地震もある。

もし地球の自転速度が変化すればどうなるか。プレートの下にある大量のマントルの動きが変化すればどうなるか。クリームパンのクリームのように、マントルが自転速度の変化に応じて動き出すのだろうか。

「気象の世界には『バタフライ効果』と言われている現象がある。あるときあるところできこった些細な出来事が遠く離れたところで思わぬ出来事を招くようなことをいうんだが、これは『ブラシルで一羽のチョウが羽ばたけば、テキサスで竜巻が起こる?』といった言葉から名付けられたらしいけど」

彼はふと、これまで二酸化炭素などの温室効果ガス増加による地球温暖化のみにとらわれすぎていたような気がした。地球温暖化による気候変動から地球の自転速度に影響がおよび、これによってマントルの流れが変わり、これがプレートに影響をおよぼすというのか。

「先生、複合現象を考えておかないといけませんね」

「え?」

突然、話を向けられ、佐々木は驚いた表情になった。

「超高層ビルはいくつかの現象の複合化によつてかなりのダメージを受けることがあるかもしれませんね」

「複合現象? それは……」

佐藤が目を見詰めてふたりのやり取りを眺めているが、九鬼はかまわずつつける。

「台風時に地震が発生するといったケースですね」

「風による振動と地震の長周期地震動との複合振動か。これらと共振する

と……」

「それはなんのことですか。異常気象が巨大地震を誘発するんですよね」

佐藤がたまりかねて口を挟む。

「いや、もし、気候変動が巨大地震を誘発するというのであれば、気候変動によって生じる大気循環の変動が地球の自転速度に影響をおよぼし、これによって地殻プレートの動きに影響が出、それが巨大地震を引き起す引金になることもあると考えられるということだろうね」

九鬼は佐藤の知らないことを話題にしたことを打ち消すように、慎重な言い回しで丁寧に応える。

地球はカチンカチンの固い塊ではない。中心が固体金属のコアで、これには内核と外核がある。そのまわりを分厚いマントルが覆う。その上に大陸地殻と海洋地殻といった固い地殻が一〇数枚のプレートに分かれてが浮いているのだ。

地球表面を覆っているプレートという岩盤はマントルが地表に上昇して固まってできたものだが、マントルが冷えて新たに生成されたり、マントルのなかに沈み込んで溶けて消滅したりしている。こうしてプレートはつねに変化しており、プレートがぶつかり合う境界部分付近には歪みが溜まりやすいのだ。これが地殻変動や海溝性巨大地震を引き起す原因となっている。

プレートとプレートの境界部分で陸のプレートの下へ海のプレートが潜り込むが、歪みが溜まりやすい箇所はプレートとプレートの接触面だ。プレートの上層部では圧縮の力が働き、下層部には引っ張りの力が働いているらしい。

マントルの動きが変われば、プレートの上層部や下層部にもこれまでと

ちがったさまざまな力がおよび、プレートにもなんらかの影響を与えるにちがいない。

かといって、気候変動が地球の自転速度をどの程度変化させ、それがプレートの境界部分に溜まりに溜まった歪みを爆発（解放）させる引金となるような力となつて、本当に地殻変動や巨大地震を引き起すというのか。

とくに問題なのは、巨大な太平洋プレートとユーラシアプレートの挟まれている日本列島周辺には大小のプレートが集中し、これらの境界部分がいくつもあつて、すでに歪みが溜まりに溜まっていることだった。現在、日本列島の東海地方や東南海、南海地方では明日にも海溝性巨大地震が起こるのではないかと懸念されているのだ。

「ヒートアイランド日本列島に溜まった熱エネルギーを再分配して、熱の集中集積を解消するのはなんですか。やはり、台風ですか」

佐藤が方向を変えて攻めてくる。

「まあ、水蒸気をたっぷり含んだ大気……」

「すると、日本列島は今度は暴風雨に翻弄されることになるのですか」

「まあね……」

「でもそれで済まないですよ。地球温暖化によって、日本列島は焦熱地獄から台風の強風にさらされ、大雨の水責めにあい、そのうえ、巨大地震や大噴火まで見舞われることになるんですよ、全く……」

佐藤は大きな声を出す。

「その可能性は否定できない。そして……」

佐々木が呟く。

九鬼は教授の顔色が次第に青ざめていくように感じながら、頭のなかで黒い雲が広がり、やがて渦を巻き、巨大な竜巻へと変貌していくのをじつ

と見ていた。

3

「蒸すなあ……」

九鬼はデイスプレーを見ながら、口の中で呟き、首筋を流れ落ちる汗を手の甲で何度も拭く。

関東地方には南から大量の暖湿な空気が流れ込んでいた。そこへジェット気流である上空の偏西風に引き摺られ、西から乾燥した空気塊が吹き込む。日本海沿岸から山岳地帯にかけて集中豪雨をもたらした積乱雲群が勢力を失い、代わりに乾燥した空気塊が中央の山脈を越えて関東平野に流れ込んでいるのだ。

フェーン現象が起きているのか、気温が急上昇した。

彼は机から離れ、窓辺に佇み、窓を大きく開ける。生暖かいベトベトした風が吹き込んできた。

空を見た。デイスプレーでは見えなかった薄暗い雲が広がっている。

彼は窓を半開きに閉じ、机に戻る。

デイスプレーには地平から湧くように黒い雲が広がらだしていた。

フェーン現象が衰えたのか、黒い雲が次第に勢力を増していく。

「さっきの話だが……」

佐々木教授が入ってきた。

デイスプレーを覗いている彼が机から立ち上がろうとするのを制しながら、近づいてくる。

「富山、新潟、長野の三県に集中豪雨で大きな被害がでているらしいな」  
佐々木もデイスプレーを覗き込む。

「そうですか。関東地方もおかしくなりだしています……」

「ふむ……。ところで、きみ、大気大循環の乱れが巨大地震の引金になるようなことが実際あるだろうか」

「はあ……」

彼は教授に顔を向け、じつと見た。

「日本列島のヒートアイランド化が進むとすれば、大気大循環もそれに応じて大きく変化することになるだろう」

「ええ、でも、大気大循環がどれほど変化すれば、巨大地震の引金となるかは分かりません。プレートになんらかの歪みをおよぼすことがあるかもしれませんが、それが直ちに巨大地震を引き起こすことになるのかどうか……」

専門でない地震のことは、彼にはよく分からない。彼なりに考えるが、どのようなメカニズムで大気大循環の乱れが巨大地震の引金になるのかも明確でなく、推測の域をでなかった。

「うん、地殻には潮汐や台風時の低気圧でもその程度の影響をおよぼしているだろうが、それらがすべて巨大地震の引金となっているわけではないだろうからな」

佐々木は自分で頷きながら言う。

「そうですね。ただそれらが複合したら……」

彼は言いかけて、急いで口を塞ぐ。

教授の青ざめた顔が浮かんだ。佐橋祐子が超高層マンションの屋上塔屋に実験室を構えていると言っていたことを思い出した。

「……………」

佐々木はじつと彼の顔を見ている。

「先生、もしかしたら、竜巻が……」

「なんだって……」

「積雲が急に上空一杯に広がりだして、関東地方に迫ってきています」

佐々木はデイスプレーを覗き込む。東京湾が雲に覆われていく。ついに海面が見えなくなった。

雲海が一面に広がる。雲の頂がもくもくと湧くように伸びて、つぎつぎに積乱雲に生まれ変わって横へ伸びていく。時折、雲間に雷光が走る。雲の下でなにかが起こっているにちがいない。雨が降りだしているのか。突風が吹いているのか。激しいダウンバーストか。

秒速数十メートルの強風が東京湾の海面を滑るように近づき、超高層マンションを激しく揺らすことはないか。

急に、暗くなった。空に黒い雲が一面に広がりだした。

デイスプレーを覗き込んで二人には気が付かない。

突然、半開きの窓からひやりとした風が吹き込んできた。つぎの瞬間、雷光が走った。雹まじりの大粒の雨が叩き付けるように降りだした。

佐々木は振り返り、急いで九鬼の背後の窓を閉じる。そのまま窓辺に佇み、しばらくガラス越しに空を見上げ、落ちてくる大きな雨粒を見ていた。

4

佐橋祐子は暗い空を見上げる。

雷光が走った。大粒の雨が降りだした。

彼女は駆け出し、近くのビルに逃げ込む。

携帯が鳴った。

「いま、どこですか。竜巻が発生するかもしれません。突然襲いますから気をつけて下さい」

「東京湾ですね」

携帯を切ると、彼女は一刻も早く実験室に戻りたいと思った。

実験室のある超高層マンションは東京湾に注ぐ主要河川の河口に広がる埋立地にあった。

彼女は階段を下り、地下鉄の駅に通じる地下道に出た。地下道はラッシュアワーでもないのに、通勤人で込み合っていた。彼女は人込みを縫って地下鉄の入口へ急ぐ。

ホームに降りた。入ってきた電車に飛び乗る。

地下鉄に乗っている間、耳の奥で佐々木の声がこだましていた。彼女は地下鉄の騒々しい走行音のなかで、一言も聞き漏らすまいと耳を澄ましてじつと佐々木の声を聴いていた。

地下鉄を何度か乗り換え、最寄り駅に着く。

黒い雲が空一面を覆っていたが、雨は止んでいた。彼女は小走りでマンションへ向う。

実験室は最上階の屋上塔屋の片隅にある。彼女は小さな窓から河川の河口の先に広がる東京湾を見た。

黒い雲が東京湾を蓋するように垂れ込めていた。風があるのか、海面から時折飛沫が飛ぶ。雷光が走った。黒い雲からすると黒い長い帯が垂

「来るかしら……」

れ下がるように漏斗状の雲が伸びたかと思うと、渦を巻き走り出す。

竜巻だ。

小さな漁船が一斉に散る。波に煽られ、転覆した漁船が飛ばされた。係留してある小舟が吸い上げられ、空中を舞った。河口に向ってくるだろうか。超高層マンションを襲うだろうか。

竜巻はよろめくように左右に振れながら、羽田沖を北上している。

羽田空港の東方で、北東へ若干向きを変えたように見えた。やはり、竜巻もディズニールランドに行きたいのか。だが手前で、ふたたび向きを変えた。飛沫を上げて埋立地と埋立地の間を縫うように海面を進む。

ゴミの埋立地だ。ビニールの買い物袋など無数の小物体が舞い上がり、上空高く吸い上げられ、四方八方へ飛ぶ。

方向を転じて河口を北上しはじめた。コンテナヤードに接近。コンテナが宙に浮き、積んであったコンテナが崩れ散る。巨大な倉庫の屋根が破れ、飛んだ。

更地の埋立地に上陸した。土煙が立った。駐車している自動車が吹き飛ばされた。トタンが飛んだ。屋根が飛んで、小屋が飛んだ。

レンボープリッジが揺れた。路上の自動車が飛び、転がる。駐車場に並んでいる乗用車が瓦を剥がすように裏返されていった。並木の樹木が根こそぎにされ、宙を飛ぶ。

竜巻は一直線に超高層マンションを目指して近づいてくる。

彼女は窓枠に手を掛け、身構える。つむじ風の轟音が分厚い窓ガラス越しに微かに響く。ビニール袋やアスファルト小片などさまざまなものが窓ガラスに張り付いては飛ばされていった。

超高層マンションに向って竜巻が突然急接近した。マンション駐車場に

駐車してある車がまるでお玉玉のように宙を舞った。

竜巻が二つに分かれ、左右に離れた。つぎの瞬間、超高層マンションは竜巻の渦のなかにあった。

超高層マンションが妙な揺れかたをした。小さな揺れが徐々に大きくなってまた小さくなつていくような感じがした。

彼女は振り向いて室内を窺う。

超高層マンションは二〇〇メートルほどある。実験室は振動を一番感知しやすい屋上の塔屋にあった。水タンクや機械類が設置してある倉庫で、その一角を実験室に改造したものだ。

実験用機材を置く空間のほかに、実生活における振動の影響を調べるために、中央にはリビングルームを想定した空間が設けられていた。そこには応接セット、テーブルセット、食器棚、サイドテーブルなど実験のための家具が置いてあり、カメラがチェックできるように配置してある。

食器棚が小刻みに揺れている。テーブルの上のコーヒー碗がカタカタと鳴った。

彼女はマンションの振動とともに撮影を開始する監視用カメラが作動していることを確かめると、ふたたび窓の外へ目を向ける。

竜巻は去っていた。

竜巻の名残か、突然大粒の雨が窓ガラスを叩く。超高層マンションはまだ微かに揺れている。中心の定まらない渦を巻くような妙な揺れ方だった。

動いた家具類はないか、移動していればどの程度移動したか。食器棚がどんなふう揺れたか、ガラスのコップや陶磁器の食器に破損がないか、コップや食器が棚でどんなの程度動いたか。彼女はひとつひとつ綿密に調べていく。

携帯が鳴った。

「大丈夫でしたか……」

佐々木だった。

「ええ、少し揺れましたが……」

「ヒロシちゃんは……」

「あ、大丈夫だと思います。これから保育園へ迎えにいけます」

彼女は一瞬狼狽えた。はじめて体験する竜巻に気を取られ、佐々木に訊ねられるまでわが子のことを忘れていたのだ。

やはり男のひとは同時にいくつものことを考えているのかと思った。それに比べ、女である自分はひとつのことを考え出すと極限まで集中するのか、ほかのことは一切目に入らなくなるらしい。

彼女は複眼的思考ができるひとがそばにいればいいのにと思いつつながら、急いで実験室を出た。

5

「浸水だ。至急、最寄り駅で乗客を降車させ、地上へ誘導、待避……」

頭上のスピーカーから車掌の声が洩れてきた。運転手への緊急連絡らしい。

佐々木は車輻の走行音のなかで耳をそばだてる。だがスピーカーからはそれ以上にも洩れてこなかった。

彼は地下鉄で土砂降りのなかを彼女の実験室のある超高層マンションをめざしていたのだ。

竜巻が雨雲を引き連れてきたのか、竜巻が去った後、大雨になった。

海水温が高い海域で発達した積乱雲がつきつぎにやってきた。大量の水蒸気を含んだ上昇気流に乾燥した冷たい空気が吹き込み、水蒸気塊が積乱雲へと変身していくらしい。積乱雲はやがて大都市東京に巣造る巨大なヒートアイランドの熱を受けてますます巨大な積乱雲の集団へと発達していくのだ。

佐々木は佐橋祐子のことが気掛りだった。ヒロシを迎えに行くといったのが最後で、何度電話しても彼女と連絡がつかないのだ。

一時間四、五〇ミリ以上の降雨が続いた。ところによっては、一〇〇ミリを超えた。数時間つづけば、一挙に一月分の雨を降らせてしまうのだ。

大都市は水はけが悪い。少量の排水なら処理できるが、一時間四、五〇ミリを超える雨水となるとお手上げだった。処理しきれない雨水は逆にマンホールから噴き出し、道路に雨水が溢れるのだ。溢れた行き所のない水はところかまわず低地を求めて浸入していく。浸水はやがて溢れ、洪水となる。

都市洪水は地下に多く設けられているさまざまな地下構造物を襲う。ビルの地階や地下街あるいは地下鉄等へと流れ込んだ水は奔流となって最下層の地下空間をめざす。

佐々木が乗っていた地下鉄は都市東京の地下の最下層部を走る路線だった。

数本ある地下鉄路線が交差する連絡箇所では立体交差構造で、古い順から浅く、最新の路線では地下数一〇メートルにも達する。ことに海底や川底を横切る路線となるときさらに深く潜ることがある。

都市地下には地下鉄や地下街のほかに、様々なものが埋められている。

ガス管や水道管、送電線、電話やインターネット用のケーブルなどの共同溝、下水道、地下河川、遊水用施設など、さまざまだ。

「一部で構内への浸水があつた模様です。みなさま、待避のため、つぎの駅で降車願います。下車しましたら、係員の誘導に従い、地上へ待避願います」

車掌の声が流れた。

一瞬、乗客が騒めく。車輛はラッシュアワーでもないのに、大雨に備えて早めに帰宅するのか、学校帰りの高校生や大学生のほかに、サラリーマンやOL風の若い男女で込み合っていた。

速度が落ちた。駅構内の灯が見えた。ホームに係員が立っている。

佐々木は乗客の流れに身を置き、係員の誘導に従い、地上へ通じるエスカレーターへ進む。

幸い、駅構内にはまだ浸水はなく、エスカレーターも正常に動いている。

彼は降車した人びとの群れに混じって、地上へ向う。

直接道路へ通じる出口は封鎖されていた。

長い通路を通り抜け、階段を上ると、一階が商店街となっている雑居ビルのみかだった。中央廊下の通路には人が溢れている。

佐々木は出口を探す。目的地のかなり手前で降車させられた彼には方向が全然分からなかった。とにかく外へ出たかった。外へ出て、まわりの様子を確かめたかった。

まだ雨が降っているのか、出入口付近は雨宿りしている人で込み合っている。

佐々木は人をかき分け、前へ進む。

土砂降りがつづいていた。道路は一〇数センチほど冠水しており、出入

口には浸水防止の土のうが積んであった。

彼は携帯を取りだし、メールを見る。佐橋祐子からの返事はなかった。

雨はまだ激しく降っている。冠水した道路を歩くことはできない。電車は運休したままだし、タクシーも見かけなかった。

待つ以外ないのか。彼は苛立ちを抑え、出入口近くに立ちつくしていた。

佐橋祐子は保育園に預けているヒロシを迎えに行っているのだろうか。

保育園は直ぐ近くにあると言っていたが、大雨の降るなかを出掛けていたのだろうか。超高層マンションを襲った竜巻に保育園も直撃されていまは……。もし保育園が竜巻に直撃されていれば、園児たちは、そしてヒロシは……。

佐々木は居ても立ってもいられなかった。彼は道路に飛び出し、タクシーを探す。

雨は幾分おさまりかけていた。冠水も減りだしていた。

水に濡れた靴が脱げそうになる。彼はゆっくり近づいてくるタクシーを見付け、手を上げた。

6

エレベーターがガクンと音を立て、突然停った。佐橋祐子は一瞬不吉な予感に襲われ、息を詰めて扉を見つめた。

扉がゆっくり開いた。停止すべきフロアを通り過ぎたのか、扉の向こうに数十センチの段差が口を開いている。

彼女は咄嗟に段差をよじ登り、フロアに立った。後ろで扉が閉じる音が

した。

雨水が吹き込んだのか、エントランスは一面濡れていた。

エントランス正面横のガラス壁に大きな亀裂が走っている。そばに腹を見せてひっくり返っている自動車が転がっていた。竜巻に舞い上げられた自動車がガラスの壁面めがけて飛び込んだのだろうか。

佐橋祐子は胸の高鳴りを抑えながら、急ぎ足でフロアの水を吐きだしている従業員たちの間を縫って、保育園「キンダーガルテン」のある隣接の低層棟への連絡通路に入っていく。

三階に上ると、慌ただしく人びとが往き来している。

「佐橋さん……」

振り返ると、ヒロシが懐いている顔見知りの若い保育さんだった。

「あ、柿崎さん、なにかあったのですか、皆さんが……」

彼女は一瞬、若い保育士が涙ぐんだように見えた。

「ヒロシちゃんが……」と言いながら、若い保育士は小柄な身体を翻し、ドアの中へ姿を消した。

「佐橋さん、なんども連絡したのですが、ヒロシちゃんが飛んできたガラスで怪我をして……」

保育園の伊藤という主任だった。中年の大柄な伊藤の後ろから若い保育士が覗いている。

園児たちが遊技しているとき、突然窓ガラスが割れてガラス片が飛び散り、園児を襲ったという。窓ガラスはペアの強化ガラスだったので、まさか風で割れて飛散するようなことはないと思っていたが、飛んできた乗用車の衝撃で、一瞬のうちにガラスが粉々に割れて飛び散ったという。ほんの一瞬の出来事だった。

「ヒロシはどこに……」

「Hクリニックで治療してもらっています。参りましょうか」

佐橋祐子は伊藤のあとを小走りで付いていく。

Hクリニックは同じ棟のすぐ上の四階にあった。

伊藤は何度も往復しているらしく、階段をぐんぐん上って先に行く。クリニックのドアを押し、治療室へ入っていった。

数人の園児が看護師に足や腕に包帯してもらっていた。中には頭に包帯ネットをかぶった子供もいた。

「飛んできたガラスの破片で手足が怪我した子が多かったのですが、頭や顔を怪我した子もおりまして、一時はパニック状態でした。でも先生のお話では、幸い怪我は思った程のことはなかったようです……」

「あの……、ヒロシはどこでしょうか」

佐橋祐子は伊藤の話を遮る。

「あ、ヒロシくんはどこ？」

伊藤はそばの園児に尋ねる。

「ヒロシくんはおしっこ」

女の子がぼつんと言う。

「ママだ」

若い看護師に手をひかれ、左足のふくらはぎに包帯を巻いたヒロシが戻ってきた。

無精髭の担当医師は心配そうにしている。佐橋祐子の顔をろくに見もせず、カルテに目を向けたまま、後ろからガラスの破片が飛んできてふくらはぎを擦ったらしく、浅い切り傷や擦り傷ができてきているが、二、三日もすれば元通りになると言った。

取りつく島もない医師の態度に、彼女は殆ど言葉を交わすこともなく診察室を出てしまった。

母親らしい女の人がつぎつぎと訪れてきていた。顔見知りの好奇の視線もあつたが、軽く会釈を交わし、佐橋祐子はヒロシをだっこして足早にクリニックを出た。

「痛い？」

「ううん」

「お腹は……空いた」

「うん」

「なに食べようか」

「うん」

ヒロシには不意にガラスのつぶてを受けたことがショックだったらしい。いつもなら迎えに来た母親に保育園での出来事を話して聞かせるのに、今日は黙ったままだ。なんとか話させようとしても生返事が返ってくるだけだった。

ヒロシがこんなに重いとはいままで気付かなかった。もうすぐ四歳になるのだから重くて当然だった。

歩き出すようになってから、久しくだっこしたことがなかった。ヒロシもだっこしてもらおうより歩きたがった。それが首にしがみついたままだ。

連絡通路を出て、マンションのエントランスへ入る。

ロビーでひと休みしなかった。

「おじちゃんだ」

ヒロシはしがみついている手を離し、母親の腕をすり抜け、ずるずるとフロアに下りた。ロビーめがけて走り出した。

ロビーには壁を背にひじ掛け椅子が並べて置いてある。

ヒロシは新聞を広げている男に近付いていく。男はヒロシに気付いたらしく、顔を上げる。一言二言交わし、男は母親の方を振り向くヒロシの視線を追って顔の向きを変え、立ち上がった。

佐々木教授だった。

「先生、どうしてこちらに……」

佐橋祐子が小走りに近付く。

「一寸、心配だったので……、それよりもヒロシちゃんはどうかしたのですか。足の包帯は……」

佐々木は彼女の説明に頷きながら、ヒロシへ視線を走らす。

夏の間、一緒に遊んでくれた男のことを懐かしがっているのか、ヒロシはずつとそばで彼の手の指をいじっていた。

「ヒロシちゃん、大変だったね。痛かった？」

佐々木はしゃがんでヒロシの目線になって両手を取る。

「ううん、大したことないよ」

「でも、ビックリしたでしょ」

「うん、ちよつと……」

黒めがちのくりくりした大きな目玉が動く。

「早く、怪我が治るといいね。そしたら一緒に遊べるもね」

「うん」

ヒロシは真面目な顔をして、大きく頷く。

「ご無事で安心しました。実験室を見せてもらおうかと立ち寄らせていただきましたが、つぎの楽しみにしておきましょう。ヒロシちゃんも疲れているでしょうから、早くお休みください」

佐々木は引き留めるふたりを残して、背を見せた。

7

「先生、どこへいらしていたのですか。久遠課長からなんども電話がありました」

研究室へぶらりと入ってきた佐々木を見て、九鬼は机から立って近づく。

「久遠課長？ なんの用か」

「とにかく、すぐ電話してみてください」

「用があればまた掛けてくるだろう」

久遠はK省の課長で、佐々木が座長をしている委員会の事務局担当課でもあった。佐々木が「日本列島ヒートアイランド研究計画」の説明のときに、熱波来襲を予告し、緊急対策をとるように進言したにもかかわらず、前例がないといって一切無視しつづけたエリート官僚だった。

「竜巻の被害状況を調べてきた」

「それでどうでした」

九鬼は頭から信じていなかった。竜巻の最中に現場へ出かけるなんて正気の沙汰じゃない。

「すごかった」

「どんなふうには……ですか」

「自動車は何メートルも飛んだ。きみ、見たことがあるか」

竜巻は大気不安定になったところで起きる。台風や発達した低気圧の周辺にできる高い塔のような積乱雲の下で起きやすい。巨大な竜巻は回転

する超巨大な積乱雲の下でできる。超高速の大きな渦を巻く漏斗状の雲が垂れ下がり、周りを巻き込み、巻き上げていく。渦の中心の気圧が低いので、上昇気流とともに周りのものが吸い上げられていくのだ。

竜巻の大きさは風速と被害の程度から導き出されたスケールF（藤田スケール）で表わされる。煙突やテレビのアンテナが壊れるF0（風速秒速一七〜三二メートル）から、住家が跡形もなく吹き飛ばされたり、列車など数トンの物体が長距離飛ぶF5（同一一七〜一四二）まである。自動車が何十メートルも飛ばされるのはF4（同九三〜一二六）だ。

「日本ではこれまではF3程度じゃなかったでしたか、最大は。確か、茂原のケースですが……」

F3は風速が秒速七〇から九二メートルで、被害は住家が倒壊、自動車は持ち上げられて飛ばされ、汽車が転覆する程度だ。自動車が飛ばされたとすると東京湾で発生した竜巻は、F4クラス程度だったのか。

日本のような平地が狭く地形が複雑なところでは、竜巻は発達しにくい。それゆえ、日本では広大な平地が広がる米国で見られるような巨大な竜巻にはなりにくいと考えられていたのだ。

「条件が揃えば、そうとはかぎらない。今回のように、比較的静穏な広い海面で海水温が高いと、上空の条件次第で、竜巻は結構発達するんじゃないのかな。風速と被害状況をちゃんと調べればFの値がどの程度か明らかになるだろうな」

電話が鳴った。

「久遠課長じゃないかな」

九鬼は眩きながら机に戻り、受話器をとる。佐々木は椅子に腰をおろしたまま、しきりに手を横に振っている。

「佐々木先生はまだ見つかりませんか」

やはり、久遠課長だった。

「ええ、そんなにお急ぎなのですか……。多分、明日には研究室に見えると思いますけど……」

「実は、明日、衆院の予算委員会がありますので、そのまえに伺っておきたいことがあります……」

「そうでしたか」

「……………」

久遠課長は受話器を持ったまま、迷っているふうだった。

「なにか伝言があれば……」

「いや、佐々木教授のご意見を伺っておきたいのです」

「はあ……」

「熱波は今後もわが国を毎年襲ってくるのですかね。教授の『日本列島ヒトアイランド』論によると……」

「毎年のように襲ってくるかと考えていたほうがいいのじゃないでしょうか。」

「行政や国としては……」

「巨大竜巻も……」

「もちろん、台風は巨大化の傾向にあります。当分の間、こんな気候大異変がつづくことでしょうか……」

「当分の間といいますと……」

「数十年か数百年です」

九鬼はもう何回も言っているのにも思い、うんざりしていた。だがひとは一度や二度聞いたぐらいで納得することはない。土台、聞く耳がなければ何度言っても聞いてさえいないのだ。

国の中枢にいるエリート官僚が国の行く末を思うこともなく、ただただ省益や自分の立身のみを思うことは国にとつても国民にとつて不幸なことである。そのような官僚をコントロールできずに蔓延らせ、自己のためのみ利用しようとする政治家や財界人などが威張っている国には未来はない。

いつの間に関僚がこんなふうになったのか。官僚だけにかぎらないが、権力の中枢にいる者がこうではたまらない。

とにかく、この国には国としての理念もなければ、長期的な確固としたビジョンもないのだ。このため、今後数十年数百年つづく気候大変動に直面しているにもかかわらず、これについての政策のあり方や考え方が確立していないし、政策実現のための長期的戦略もない。これはそもそも難しいことが嫌いで、わいわいと集まってその日暮らし的なんきさが大好きな国民性のなのか。

それにしても、官僚が国の将来を考えず、省益や自分の立身のみを考える無責任さはなんだ。官僚の無誤謬性を盾とする独りよがりには目に余る。

「ホントですかね。そんなにつづくのなら、なにをやってもしょうがない……………」

久遠課長は佐々木教授でないので気を許したのか、本音を洩らす。

「国や行政はなにもしないから、国民はじつと耐え忍べというわけですかね」

九鬼は皮肉ぽく言う。

「日本列島から逃げ出す以外これを避けられないとなれば、そのような状況に慣れるほかない。それができなければ、日本列島で生きていけない」

「対策は必要ないというのですか」

九鬼は偉そうに言う久遠課長にあきれ返る。

「対策？ 一体、どんな対策があるのですか」

「……………」

九鬼にはもうなにも話す気がしなかった。早々に電話を切ってしまう。

「なんだって……………」

佐々木がにやにやして、九鬼を見ていた。

「話にならない。このままではこの国の存続さえ危ういというのに、全く、現実認識がなっていない。彼らは国民を見殺しにしても平気なんだ。先生、何とかしなければ……………」久遠課長に電話して下さい」

彼はぶつきらぼうに言う。

8

「ママ、眠った？」

佐橋祐子はヒロシの横で、竜巻に襲われたとき感じた妙な揺れを思い出していた。目を閉じると、あのとときの振動が蘇り、身体の芯を揺らすのだ。

「ヒロシちゃん、お目を瞑って……………」

「どうしてガラスが飛んできたの？」

もう直ぐ四歳になるが、ヒロシにはまだなぜガラス片が飛んできたのか、理解できないらしい。

「竜巻に自動車が舞い上げられてガラス窓にぶつかったのよ。それで窓のガラスが割れて粉々になって飛んできたのよ」

「たつまぎ？」

「そう、ぐるぐる渦を巻いている風ね。なんでも空中に吸い上げてしまう、怖い怖い風よ」

「ふうん……………」

微かな寝息が聞こえて来た。

ヒロシが眠ったことを確かめると、彼女はベッドから離れ、リビングのテーブルに戻った。竜巻についての報告書をまとめようとノートパソコンを開く。

ふいに、妙な揺れが戻ってきた。データを見れば正体を確かめられるかもしれない。彼女はデータをいまずぐ見たかった。だが怪我でショックを受けたヒロシをひとり残してデータを取りに屋上の実験室へいく気がしなかった。

この超高層マンションでは屋上の実験室はもちろん、要所要所に振動計を取り付けている。彼女の住居である六階の部屋にも振動計は置いてあった。

だが部屋の振動計を調べてみると、なにも記録してなかった。振動計はあの振動を感知していなかったのだ。もしかしたら、ほかの地震計などにも振動記録がないかもしれない。

あの振動は錯覚だったのだろうか。

だか単なる錯覚だったのなら、なんとも思いつくことはないだろう。度々思いつくところを見ると、やはり、あのととき振動を身体が感じていたにちがいない。

もしかしたら、あの振動は超高層マンションが竜巻に巻き込まれたときの揺れだったのかもしれない。でも竜巻が去っていったあとでも揺れが残っていたのはなぜか。柔構造超高層建造物特有のものだったのか。それとも

この超高層マンションだけのものだろうか。

それにしても振動が長い間つづいたものだ。ふいに、彼女にあのとき感じた妙な揺れが甦ってきた。振動の波に時折不均等な増幅が混じるのだ。揺れが収まりかけたと思っていると、突然また揺れだしたりするのだった。

一瞬、身体が熱くなつた。重量計算の間違えか。彼女は自分の担当した超高層マンションの構造計算に誤りがあったのではないかと思つたのだ。

そんなことがありうるだろうか。コンピュータプログラムに誤りがあったのだろうか。それともデータ入力ミスか。

彼女は超高層マンションの構造を思い浮かべた。地盤は埋立地にしては比較的安定しており、直接基礎構造を採用していた。地下一六メートルのところに、厚さ四メートルで約一〇〇メートル四方のマットスラブを敷いてある。

この基礎の上に、約二〇〇メートルの超高層マンションが聳えているのだ。

「あ、そうだわ……、あれに違いないわ」

突然、彼女の口から大きな声が洩れた。

「ママ、おしっこ」

ヒロシがリビングの入口のところに立って、あたりを見回している。

「さあ、いつてらしゃい。ひとりでできるでしょ」

「だれとおはなししていたの」

「うん？ 誰もいないわよ。ママだけよ」

「……………」

ヒロシはもう一度リビングを見回してから、トイレのある廊下に姿を消した。彼女の独り言を話声と勘違いしたらしい。

彼女はもう一度奇妙な揺れを思い出した。

竜巻の動きによつてさまざまな方向から超高層マンションに風圧がかつたのだ。奇妙な揺れが生じたのは、それによつて生じたさまざまな方向の振動に対して制振装置が十分対応できなかったからにちがいない。

ふと、彼女はもしかしたら、超高層マンションの制振構造が竜巻によつて生じる振動に対して対応できないというより、部分的に逆に増幅作用をおよぼしたのではないかと思つた。そう考えなければ、収まりかけた振動がふたたび急に揺れだすことを説明できないのだ。

あの制振構造は地震動のためのものであつたのだ、と彼女は結論した。その瞬間、彼女の脳裏に佐々木の面影が浮かんた。

佐々木は超高層マンションが竜巻に対して無防備であることを知っていたにちがいない。だから、心配になって大雨のなかを様子見にやってきたのだ。

彼女は佐々木の控えめな態度のなかに優しさを感じていた。

## 9

「九鬼さん、困ったことが起きた」

受話器の奥から、ピーターソンの沈んだ声がする。ピーターソンは軍の研究機関からACARに派遣されている若い研究員で、「日本列島ヒートアイランド」プロジェクトに参加したいと押し掛けてきた精悍な感じの男だった。

「やあ、どうかしたの」

「実は……」

ピーターソンは気候変動に関する研究のすべてを米国独自で進めようとする動きが出ているという。

米国には世界戦略上気候に関する情報を独占しておきたいという考えはまえからあった。だが世界各国で気候変動に関する研究が進み、米国の独占はとつくに崩れてしまった。それにもかかわらず、軍部や多国籍資本を中心に気候情報独占の野望が熾りつづけ、以前から多額の資金がその筋から気候変動の研究者や研究機関へ流れていた。

地球温暖化が進み、異常気象が多発するようになって、世界の水資源や食糧事情が逼迫化してきた。国際紛争へ発展するケースも少なくないのだ。

ことに、グローバル化した世界経済にとつて、人間の生命維持に関わる水や食糧の逼迫化とともに、いつ発生するかわからない大災害をもたらす極限的異常気象は極めて厄介なことだった。それゆえ、水資源の確保や食糧生産に関わる極限的異常気象を予測することは、世界各国の大関心事となった。これはまた米国や多国籍資本の世界戦略に欠かせない情報だったのだ。

九鬼たちは極限的異常気象の予測をめざす「日本列島ヒートアイランドプロジェクト」を国際共同研究として進めることにしていた。これを快く思わぬ勢力があるらしい。

「それはどうということ？ いまさらなにを言っているんだ。気候変動研究を独占しようなんてできやしない。なんでわれわれが開発しようとしている極限異常気象予測気候変動モデルがやり玉に上がるんだ」

「気候変動に起因して生じるさまざまな大災害の頻発が避けられないものであることに漸く気付いたということかな。もし予測情報を独占できれば

大儲けできるからな。たとえ独占できなければ、せめて、誰よりも早く予

測情報を知りたいのだ。そうできればそれに越したことはないんだ。とにかく、彼らはなんとか事前に手を打ちたいと思っっているのかもしれない」

「大儲けか。そのまえに生命を失うかもしれないのに」  
「彼らは、わが身は不死身だと思っっている」

ピーターソンの乾いた笑い声が出た。

「そうか……」

九鬼はやりきれなかった。彼は情報があつたらまた知らせてくれるように頼んで、受話器を置いた。

彼は自分がなにをやっているのか、分からなくなった。極限異常気象の予測を通して社会への貢献を果たしていると自負していたのに、一方でそれが金儲けや世界支配の具に利用されているかと思うとやりきれなかった。

単に、情報を提供するだけでは、それを利用できるものだけの利益になつてしまう。極論すれば、彼は情報を利用できる者のために、極限異常気象の予測をしていることになるのだ。これでは、資金の提供を受けていなくとも、意図せずに、彼は戦争屋やハエナワ資本のために行動していることになりやしないか。

それは全く不本意なことだった。彼は迷った。

机から立ち上がり、彼は窓辺に佇む。

目前の並木道を学生たちが通り抜けていく。その向こうに堂々と枝を張った数十年を超える大木の木立が広がる。

樹木は熱波のストレスを受け、大雨のなかで強風に葉が千切られても、苛酷な自然の試練を耐え忍ぶほかないのか。それとも、どうにかこうにか漸く実らせた種子を風に飛ばし、あるいは小鳥に運ばせ、適地を探して未

来へ向かつて生き抜くのか。

彼はぼんやりと窓辺に立ち尽くしていた。

「いまさら……、なんでだ……」

ふいに、口を突いた。

風が通り抜けていったのか、木々の葉が微かに揺れた。

そのとき、インスピレーションが沸いた。霧に包まれた微かな陰影が徐々に輪郭を現わしてくる。彼は霧が晴れるのをじっと待った。

「そうか。なにか新しいことを掴んだにちがいない」

彼は「日本列島ヒートアイランド」からはじまった一連の動きを思い返した。三次元の地球規模の大海流である熱塩大循環の減退と熱エネルギー分配の不均衡から生じた地表ホットスポットの出現、北極海における海水の激減、寒流親潮の衰退、暖流黒潮の勢力拡大……。だがこんな作業からなにも生まれてこなかった。

彼は机に戻り、目を閉じた。

米国は気候変動研究をつぎの新段階へステップアップしようとしているのではないか。それはなにか。

気候には大気、海洋、陸地（大きさ、位置や地形など）が深く関わっている。それに生物生態系はもちろん、人間活動までが関わり出しているのだ。

そこで、これらを考慮した気候シミュレーションモデルを構築し、人間活動に起因する二酸化炭素などの温室効果ガスの変量をインプットして気候変動による極限異常気象を予測しようとした。

だが地球温暖化がもたらすものは気候変動だけではないのだ。すでに地球温暖化がかなりの段階まで急激に進行しているならば、つぎは地球温暖

化が地球にいかなる変動をもたらすかが人類にとって重大事となるはずだ。

極限の異常気象を予測することも重大事だ。だが地球における変動は気候変動にかぎらない。大気大循環の変化による自転速度の変化によって、巨大地震が誘発されるのではないか。すると、彼らが密かに試みようとしているのは気候変動を超えたものか。

彼は漸く極限異常気象のみにとらわれてすぎていたことに気付いた。彼は納得したように、大きく息を吐いた。

## 第二章

10

「先生、地球温暖化の先にはなにがあるのでしょうか」

九鬼は窪んだ小さな目を丸くしている佐々木を見て迷った。

「……温暖化がピークに達したあとに寒冷化がはじまると考えておりましたが、そう単純ではなさそうなので……」

「どうしてそう考えるのかね」

佐々木は椅子に座ったまま、机のまえに立っている彼を見上げている。

一瞬、彼の脳裏を輪郭のぼやけた映像が横切った。

「実は、米国で変な動きがあるとか……」

「……………」

佐々木はじつと彼を見ている。

「それがどんな動きか判然としないのですが、米国は研究戦略を大転換するようだ」とピーターソンが言ってきたのです」

彼は教授の目を覗き込む。

「……………」

佐々木は黙って、さきを促す。

「なぜ研究戦略をかえるのかはつきりした理由は分かりませんが、なにか新しいことを掴んだのか、それともとんでもないことを新しく企てているのか、どちらかだと思っただけです。そこでいろいろ考えたのですが……」

「それで……」

佐々木の小さな目が光っている。

「米国の動きをいろいろ詮索するよりも自分たちのやっていることをもう一度洗って見たのですが……、これまで極限異常気象にとらわれすぎていたのではないか、そんなふうに思われたのです……」

彼はこんなことをつづけた。

地球温暖化による気候変動で異常気象が多発する傾向にある。そこで、極限異常気象の予測をめざしたが、それで十分なのだろうか。地球温暖化の果てに、われわれ人類が直面するのは極限異常気象だけではないかもしれない。こんな思いがありながら、それなのに極限異常気象のみを取り上げてきた。

さらに、地球温暖化のような複雑な事象は全体的にとらえなければならぬと言いつつながら、地球温暖化による極限異常気象を大気と海洋をカップリングした単純な気候モデルを用いて予測しようとした。極限異常気象だけなら、大気と海洋をカップリングした気候モデルに地形や生態系などを考慮すれば十分だという思いがあったのだ。

だが本当に極限異常気象だけでいいのだろうか。またこのような単純なモデルで予測していいのだろうか。

彼は気候変動による巨大地震の誘発という指摘を受けて以来、自分が専門以外なにも知らないことに気付かされていたのだ。

地球温暖化の果てに生ずる地球気候変動は極限異常気象や気候変動だけではなくではないか。また地球温暖化によって、地球には気候変動以外にもさまざまな気候変動が生じるのではないのか。

もしそうであれば、気候変動だけをとりだして、極限異常気象が頻発すると騒ぎ立ててもどれほどの意味があるのだろうか。

「きみは気候変動のほかに、地震や地殻変動、あるいはポールシフト（極移動、地軸変動）といったことまで取り込もうと考えているのか」

「宇宙まで広げようとは思いませんけど、宇宙から降り注ぐ放射線や太陽風とそのバリアーである地球磁場との関係など、太陽系のなかの地球であること踏まえ、気候モデルからトータル地球モデルへ広げるべきでないかと思うのです。大気モデルと海洋モデルを結合したように、プレートのみならず、マントルやコアを含む地球内部のモデルとの結合も図り、全体的にわばトータルな地球全球モデルを構築し、気候変動のみならず、これを含めた地球変動を予測できたらと思っっているのです」

九鬼は補足する。

気候モデルでは森林や陸棲水棲の生物生態系といった生物圏はもちろん、人間活動圏をも考慮し、これらをモデルに取り込んできた。たとえば、北極海や南極海に大量に発生する植物性プランクトンは大気中の二酸化炭素を大量に吸収するし、これによって大気の組成も変る。また、エネルギーを大量消費する大都市は人工のヒートアイランドを形成して積乱雲を発生するし、都市に林立する超高層建築物は巨大な壁となつて気流の流れを阻害してビル風やダウンウォッシュを発生させているからだ。

これと同様に、トータル地球全球モデルには、地球の内部や外部のさまざまな諸現象をモデル化して取り込む必要がある。

「地球全体モデルか。壮大なモデルだね。方法論にも難問があるだろうし、現在の科学の水準ではメカニズムの未解明部分やデータ不足も多い。だが、方向としては面白いんじゃないか」

佐々木の小さな目が「やれるなら、やってみろ」と悪戯っぽく笑っている。「風車に立ち向かうドン・キホーテかもしれません……。もし、大気大

循環の変化で地球の自転速度が変化し、巨大地震が誘発されると考えられるならば、これをほつとくことができせんからね。でも、まだまだ広言できるものではありませんが……」

彼はふと、米国の密かな企ても「ドン・キホーテ的なもの」かもしれない、だから世界の嘲笑を避けるためにも秘密裏に事を運ばなければならぬと考えているにちがいないのだと思つた。

11

「一寸、こつちに来てくれないか。きみの意見を聞きたい」

佐々木教授の声だった。九鬼は受話器を返し、直ぐ立ち上がる。教授が彼を呼び出すことは殆どなかった。いつも電話を掛けるまえに彼の研究室に入つて来る。それがどうしたわけか、電話してきたのだ。

彼は急ぎ足で隣の教授室へ向かった。「九鬼くん、こつちだ」

教授は彼を認めると、深々とした応接セットの椅子から手招きした。ソファに背を向けた人影があつた。

佐橋祐子だった。このまえの礼を言い、笑みを浮かべた彼女に会釈を返しながら、彼は教授の隣に腰をおろした。

「竜巻に襲われたとき、奇妙な揺れを感じたそうだ……」  
「どこで感じたのですか」

彼は佐橋祐子に目を向けた。「超高層マンションの最上階にある実験室でしたね」

教授が代わって応える。

「ええ……」

彼女は九鬼に目を向ける。

「どんな揺れですか」

「それは……」

彼女は竜巻が急接近し、超高層マンションが渦のなかに取り込まれたときの様子を詳しく説明した。そしてそのとき感じた強まったり弱まったりする方向が定かでない奇妙な揺れについて丹念に話した。

さらに、彼女が検討したさまざまなケースのシミュレーションについて紹介した。それは超高層マンションが採用している柔構造、制震構造、基礎構造などに関するものであった。だがどのケースでも奇妙な揺れを再現することはできなかったという。

九鬼は彼女の顔をじつと見た。佐々木も沈黙したまま、彼女の顔を見ている。

「その柔構造、制震構造、基礎構造のモデルに対してシミュレーションではどんな力を想定してインプットしたのですか……」

彼女は用意してきた超高層マンションの柔構造、制震構造、基礎構造の詳細な設計図面とインプットデータのプリントアウトを取り出した。

「シミュレーションはそれぞれの構造のケースで単独におこなったのですね」

「ええ……。インプットデータもいろいろ変えてみたのですが、共振らしい現象はみられなかったし……」

彼女は九鬼の疑問を先取りするように応える。だが彼は別のことを考えていた。

「奇妙な揺れを感じたとき、思い当たる原因は全然なかったのですか。直感的になにか感じませんでしたか」

彼は超高層マンションの構造担当者として、他言できない問題を抱えていないか気になっていた。なにしろ、二〇〇メートルもの超高層マンションは日本の建築界でもこれまであまり経験していない構造物なのだ。

「コスト削減の要請にも応えなければならぬのですが、とにかく超高層マンション建設は未経験ではなくとも、経験データの少ないことは否めません。それだけに安全性第一で設計しています。もちろん、構造計算でもそうです。でも正直なところ、地震動対策として開発され、多くで採用されている制震構造や免震構造が地震に際して果たして十分機能するか分かりません……」

佐橋祐子は率直に言う。彼はつづきを待った。

「……そのときは妙な揺れがすると感じただけでした。竜巻を体験したのははじめてでしたのですが……、最初は共振現象かと思いましたが、それで一応シミュレーションをやってみたのです。あれこれ考えているうちに、採用している制震構造のせいかと思ったことがあります。そのときはそれにちがいないと思ったほどでしたが、シミュレーションの結果をみて分からなくなってしまうました」

「制震の構造は……」

「簡単に言いますと、地震波の進行方向に対して逆の方向へ作用する錘りをつけたようなものですよ」

「ひとつの錘りですか」

「いいえ、分散して何百もの錘りをつけています」

「それらが同時に同じ方向、地震波と反対の方向へ移動して震動を抑制す

る仕掛けですか……」

「振動方向が一定であれば……。あ、そうか、竜巻による超高層マンションの振動方向が一定でなかったからということですね」

「……………」

「でも、揺れが大きくなったり、小さくなったりしたのはなぜかしら」

「それは錘りの配置と関係があるのかな」

佐々木が口を挟んだ。

九鬼は設計図を広げ、錘りの配置を確かめる。主要なところにほぼ万遍なく均等に配置されてあった。

「竜巻は渦を巻いているといっても回転している風速はまちまちで、渦のなかの超高層建造物の各壁面部分におよぼす風圧も均等というよりむしろ不均等と考えていいんじゃないでしょうか。ですから、その奇妙な揺れは竜巻の突風の特性と制震構造の特性との相乗効果と相殺効果によって引き起されたものといえるかもしれませんね」

「竜巻による振動と錘りの動きが一致したときに大きく揺れ、錘りが逆に動いたときには揺れが抑えられたというわけだね」

佐々木が言い換える。

「その中間では妙な動きをするかもしれません。それを計測できるかな。今回の竜巻での奇妙な揺れのデータは取れたのですか」

「振動計の記録データには殆ど差異が見られませんでしたが。でもそのとき窓際に立っていたわたしには妙な振動を確かに感じたのです。データがないので、誰にも真に受けてもらえませんでした……」

佐橋祐子はあの子を思い出そうとするかのような遠くを見る目をして、ぽつんと呟くように言う。

「制震構造の機能は万全ではなく、限定されているということでしょう。

これはいいとして、逆作用の可能性がないといえないことが問題なわけですね。今回はそのことが分かったただけでも収穫があったというべきでしょう」

彼女は悄気ているような彼女を幾分でも慰めたかった。だが逆効果だった。

「実は制震構造の効果を加味して構造計算をしているのです。もし、制震構造に問題があると分かれば……」

彼女は遠くを見たまま、しばらく口を開こうとしなかった。

誰も口を開こうとしなかった。長い沈黙が支配した。

ようやく落ち着いたのか、彼女は「……地震と同時に、巨大台風が来たら、どうなるかしら……」とぽつんと言った。

「台風で地震による振動が増幅されるとはかぎらない。逆の場合だって大いにありうるよ」

佐々木が慰めるように静かに言う。

九鬼は佐橋祐子をじつと見た。彼女の脳裏で超高層マンションが大きく揺れているのだろうか。だがまさか倒壊するとは思ってはいまい。

「この世には二種類の人間がいて、一方は自然界のことしか気にしない人で、もう一方は人間社会のことだけが気になる人だ。前者に属する人は天空が落ちてこないかとか、地球が太陽から離れて暗黒の宇宙の彼方へ飛んでいかないかといったことが気になってしかたがないのに、後者に属する人はそんなことには一切頓着せず、ひたすら人と人の関係や社会がどう変わるか、景気がよくなるのかといったことだけを考えているんだ。ところで、佐橋さんはどちらのタイプですかね」

彼女は目を丸くして九鬼を見た。

「両方が気になる人もいれば、両方とも眼中にない人もいるんじゃないの」  
 佐々木も彼を覗き込んでいたが、困った顔をしている彼女の代わりに口を挟む。

「でもその類はいわば別種の生き物ですね」

「そうか。そういうことね」

佐々木は納得したのか、もう口を挟まなかったが、しきりに頭を傾げている。

「もし、佐橋さんが自然界のほうに気になるなら、くよくよ考えることは止めて、運を天に任せればいい。そうでなければ、地震と巨大台風が同時に襲うなんていうことを考えないことです」

「なぜですか……」

「考え出したらきりがありませんよ」

彼は曖昧に応える。彼には海岸辺の埋立地に建てた超高層建造物は砂上の楼閣のように見えるのだ。

彼女が「同時に、巨大台風が来たら」といったとき、彼は彼女とは全然別のことを考えていたのだ。そのとき、彼は洪水のなかに取り残されている超高層マンションを見ていたのだ。

地球温暖化によって海面上昇が進めば、地下水位も上がるのだ。これはいわば地中の洪水現象だった。物が水面に浮くように、地下水位が上がれば地中の基礎部分を押し上げ、建造物を持ち上げる。また地下水位上昇によって、地震の際の「液化化現象」が激化する。

現代文明が目指した巨大化高度化大量化はまたリスクの巨大化高度化大量化であった。超高層建造物も例外ではないのだ。

「人間が自然の力に立ち向かおうとしても知れたものです。先生、そうで

すね」

九鬼は佐橋祐子をじつと見た。目の奥が光っている。その光はなにを意味するのだろうか。

リスクを洗い出し、それらをカバーするように安全側に立って耐震性を確保しようとも、リスク自体が巨大化高度化大量化してしまっている現在、すべてのリスクを完全に網羅することは至難のことである。たとえそれができたとしてもそれらをカバーするには計り知れない膨大なコストを要することだろう。

それに問題は、洗い出したリスクはあくまで人間が考えたリスクであり、それを前提にしているにすぎない。人間が考えているより、自然は遙かに複雑であり、多様である。超高層マンションにどのような力をおよぼすか完全に予測することは土台不可能なことなのだ。

彼は超高層マンションの構造計算を任された彼女には、巨大なリスクを背負い、ただ呻吟するほかないのではないかと思った。

12

「久遠課長が来るといってきた」

佐々木が九鬼の研究室に入ってくるなり、ぶつきらばうに言う。

「佐橋祐子さんは帰られたのですか」

彼は机に座ったまま、教授に顔を向ける。

「うん……。彼女は迷っていた」

佐々木は佐橋祐子を送って帰ってきたところらしい。

「言い過ぎましたか」

彼は机から立ち上がり、教授が座っているソファのまえの椅子に移る。

「うん、でも仕方がない。超高層マンションの制震構造は地震波を対象としたものだろうから、竜巻や台風の対策にはならないだろうな」

教授は自分に言い聞かせるように、呟く。

「埋立地の超高層建物には海面上昇や洪水のほうに潜在的に危険なように思います。でもこんなことを言い出せば、さらに彼女を悩ませることになるかもしれないと思い、控えておりました。それで、リスク計算のときに考えたリスク以外のことを考えることは止したほうがいいと言ったのです」

彼は教授の目を覗く。教授は表情のない小さな目を何度かしばたかせたが、口を開こうとしない。

ふたりは沈黙したまま、身動きひとつせずじつと座っていた。

「超高層マンションが倒壊するようになったら、構造計算担当者の責任となるのだろうか」

しばらくして、教授がぼつんと言う。

「非難されることはあっても、全責任を負わされることはないでしょう。構造計算担当者が全権をもって無制約で構造計算をできる状態でしたら全責任を負うべきでしょうが、もろもろの制約条件のもとでなされた場合にはそうならないんじゃないですか」

彼は「佐橋祐子の場合はどうだ」と言いたかった。だが彼女のことはなにも知らなかった。彼女がどんな立場で担当したのか、またその構造計算の内容すら知らなかった。彼はただ、しょんぼりとしている教授をなんとか慰めたかった。

なんとも皮肉なことだった。佐橋祐子が必死になって住み心地よい超高層マンションの構造計算をやったのに、自然に仕返しされようとしているのだ。

人間はこれまで自らの生存基盤である自然（地球環境）に対して搾取の限りを尽くし、荒し放題荒しておきながら、それとは別に、自分たちは都市を造り、快適な生活空間を確保しようとした。エネルギーや水を湯水のように使うライフラインを完備し、交通通信システムを高度化して全世界にわたる都市のネットワークを築き上げた。だが人間のこんな仕打ちに甘んじていた自然が突如として反撃に転じたのだ。熱波、狂暴竜巻、巨大台風、大干ばつ、大雨、洪水、寒波、大雪、巨大雹、海面上昇……。それに巨大地震、大噴火、ポールシフト……。

「……………」

教授は口を閉ざしたまま、力ない目で彼を見ている。

「久遠課長本人が来るのですか。いつですか。何の用ですかね」

一瞬、思いがけないアイデアが閃いて、彼は話題を変えた。

教授の小さな目が光る。

「そうだ。もう直ぐ見えるかもしれない。きみにも是非同席してほしい。連絡するからね」

教授は腰を上げると、こう言い残して踵を返した。

彼は椅子に腰を下ろしたまま教授の後姿を見送ると、そのまましばらくじつとしていた。身体を動かさそうとしても、なぜか身体が硬直したかのよう動かすことができなかつたのだ。

九鬼が教授の部屋に入っていくと、白い顔の久遠課長がソファにただ一人座っていて、目をきよろきよろ動かし周囲を見回し、「天井が高くて、気持ちがいいですね」とお世辞笑いを浮かべた。

まもなく、教授が九鬼を同席させると言っていたのか、彼が黙礼すると、久遠課長は黙って会釈を返してよこした。

「課長さんがわざわざいらっしゃるとはなにか特別のご用でもあるのですかね」

九鬼は近づいてくる教授を待つ隣りの椅子に腰を下ろすと、教授は笑みを浮かべ、とぼけたように言う。

佐々木が久遠課長に会うのは「日本列島ヒートアイランドプロジェクト」の説明のあとにつづいて開かれた委員会以来だった。

「そろそろつぎの委員会のこともあって……」

久遠課長は言葉を濁した。

佐々木はじつと久遠課長を見た。委員会のことなら、事務局担当の課長補佐が仕切っているはずだ。担当の課長補佐が同席していないのはなぜか。

一瞬、不審の念が頭を過った。

佐々木は黙って、久遠課長が口を開くのを待った。

「……実は先生から熱波来襲の電話をいただいた……」

佐々木は熱波来襲を告げ、緊急対策を依頼した電話を思い出した。あのとき、政府はどんな対策を講じたのだろうか。

「……関係省庁に連絡したのですが、縦割り行政で横の連絡が不十分だったのか、結局事前の予防がうまく機能しなかったようで、熱中症の犠牲者

が予想以上に相次ぐ結果を招いたようで……」

久遠課長はエリート官僚らしく責任回避することだけは忘れずに、またついた口調でつづける。

佐々木は幾分苛々しながら、久遠課長の顔をまじまじと見る。わざわざこんなことを言うために、本省の課長が訪ねてくるはずがない。早く本題に入って欲しかった。

「……今回の熱波であんなに犠牲者が出るとは思いもよらないことでした。先生の警告に対して国の対応が不十分だったようで……」

「そうですか。わたしは国が最善を尽くしたものと思っていましたかね」

九鬼は一瞬、教授の小さな目に皮肉な光が走るのを見た。

久遠課長は口を詰まらせ、しばらく目を伏せていた。

佐々木が熱波来襲を告げ、緊急対策を要請したのに対して、久遠課長やK省がとくに行動を起こした気配はなかった。表立って現れた変化とさえ、テレビやマスコミの流す天気予報のなかで熱波来襲の予報がなされ、熱中症予防の注意が日に何度も流された程度だった。

「実は、つぎの委員会で、たとえば、『異常気象警報』について検討していただき、その発令基準を纏めていただきたいと思っただけですが……、もちろん、熱波にかぎらず、すべての異常気象を含めてお願いしたいのです」

久遠課長は大きく息を吐き、肩を落とす。そんな課長の様子を九鬼は不思議そうに眺めている。

佐々木は久遠課長が言い出したことの真意を掴みかねていた。すでに天気予報で台風や急速に発達する低気圧、豪雨、豪雪など、各種の異常気象についての予報がなされ、その都度、注意が喚起されていたし、注意報や

警報が発せられていた。

「警報ですか……」

「そうです。実効性のある警報とするために、とりあえず、発令基準を纏めていただいで……」

久遠課長は目を輝かせる。

「警報発令基準ですか……」

佐々木はまだふに落ちない。

「たとえば、火山活動に関する噴火警報のように、警戒程度のレベル別の警報のようなものでしょうか……」

火山活動に関しては、地元自治体等で、登山者や地元住民（自治体）を対象に、噴火の危険度に応じて何段階かの「噴火警戒レベル」にわけて警報基準が定められている。たとえば、レベル1（平常）は火口付近立ち入り禁止だ。レベル2（火口周辺規制）は噴火が発生あるいはその可能性がある状態だ。レベル3（入山規制）は噴火が発生あるいはその可能性がある状態だ。レベル4（避難準備）は噴火が予想され、居住地域からの避難準備を行い、レベル5（避難）は噴火が発生し、居住地域からの避難だ。このようなレベルの応じて、たとえば注意報から入山規制や避難命令などが発せられることになる。

「たとえば、熱波ではこう、巨大台風ではこうといった具合にですか」

久遠課長が嫌な顔をしているに、執拗に食い下がる。

「まあ、個別現象ごととは別に、異常気象全般を対象に今年はどう、来年はどうといった具合にいかないかと思っっているんですが……」

「年間予報ですか」

佐々木はまだ納得いかない。

「できたら、警報に連動して国や地方自治体の対策がなされるようにもつていきたいと考えているのです。至急纏めて欲しいのです」

「具体的にどんなことを考えておられるのですか」

九鬼が口を挟む。

「具体的に……」

久遠課長の目が光る。

「個別事象ではなく、異常気象全般が対象となれば、どうしても具体性を欠くことになりかねないのではないのでしょうか」

「そうですね。たとえば、なになに地域に六月から九月にかけて熱波襲来の可能性七〇パーセントとか、九月に巨大台風上陸のおそれとか……」

久遠課長は佐々木の顔を窺う。だが教授は素知らぬ顔で口を閉ざしたまま、開こうとしない。

「それでは個別の気象予報とかわりませぬ。異常気象全般となれば、今年には異常気象の発生が多いとか少ないとかというふうになるんでしょうか。でもこれではどんな対策を講じていいのか判然としない」

「……………」

久遠課長は黙り込む。

「異常気象といってもいろいろありますが、通常、さまざまな個別事象が複合化して被害が広範囲におよぶものです。熱波のときに干ばつが重なり、山火事を起し、人間には熱中症や感染症、植物や農作物には高温障害や生産減少、都市においてはさまざまな機能障害が発生した。水不足や生鮮食料の不足も広がります。台風の巨大化が指摘されていますが、巨大台風が襲ってくれば、風や雨の被害に洪水や高潮の危険が加わる。そのとき、地

震が襲えばどうなりますか……」

「九鬼は不貞腐れたように黙り込んでいる久遠課長に、早口でまくし立てる。」

「……これらの被害は一過性のものとは限らない。可逆的なものは少なく、非可逆的な結果をもたらすものが多い。というより、殆どが非可逆的なものだろう。となれば、このような観点から対策を考える必要があるでしょう。今後、わが国においても、海面上昇や都市崩壊で住む場所を失う環境難民が大量に発生するにちがいありません。異常気象の対策を考えると、このプログラムをどう救済するか、そのプログラムをもう一度定めなければ、これらの環境難民をどう救済するか、そのプログラムをもう一度定めなければなりません。」

「大量の環境難民だつて……」

久遠課長は目を光らせ、一瞬九鬼を睨む。

「そうです。一〇〇万あるいは二〇〇万といった大量の環境難民が発生することでしょう」

「一〇〇万、二〇〇万だと、まさか……」

久遠課長は絶句する。

沈黙がつづいた。

「課長さん、ほかにご用があつたんじゃないんですか」

しばらくして、佐々木がぼつりと言う。

「ええ、まあ……」

久遠課長は顔を歪め、曖昧な笑みを浮かべた。

「警報の基準化については案ができた次第、委員会に諮ることにいたしました。そのさきのご委員会で議論の結果を見てからということにしてはどうでしょうか。なにしろ、対策はこの列島で一億二千万の日本人がどう

生きていくかにかかわる事柄ですからね。とにかく、これについては十分議論する必要がありますでしょう」

「またご相談に参ります」と言つて、久遠課長は立ち上がった。

佐々木には久遠課長がひとり訪ねてきた意図を薄々感じ取つていた。なにかあると感じていたからこそ、九鬼を同席させたのだつた。

久遠課長は熱波が襲来したときのことを委員会の席上で話題にして欲しいのだ。それは佐々木が久遠課長に対して、日本列島ヒートアイランド化の出現を告げ、熱波の応急対策を要請していたことを伏せておきたいからにちがいない。この要請に対してなんの行動もとらなかったことが明らかになることを恐れているのだろう。

だが佐々木はあえて久遠課長を追及しようとしなかった。こんなことは追及しなくとも自然と分かるものだ。それよりも今後のことが心配だつた。彼はますます厳しさを加えていく日本列島において日本人はどう生きていけばよいのか、回答のない回答を探していたのだ。

14

「先生の口を封じようとしていますよ」

突然、M新聞の佐藤が研究室を訪ねて来た。

「一体、どういうことだ」

九鬼はいつも突然現れ、決まってソファの真ん中にちよこんと座る細いメガネを掛けた小柄な男をじつと見る。

佐藤は各省庁をまわつて熱波被害の取材をしているという。そのとき、

異常気象の頻発や気候大異変の発生についての九鬼のマスコミ活動に対して、いたずらに人びとを不安に陥れる個人プレーだとする批判が寄せられ、これを抑制しようとする動きがあるという噂を小耳に挟んだのだ。

「学界のアンチ佐々木派の面々が集まって、たとえば気候変動研究連絡会のようなものをつくり、異常気象や気候異変の予測情報を一本化しよう」と話しあっているそうだ」

「そうかね……」

九鬼は気のない返事をする。噂の出所は久遠課長か。

「国に働き掛け、予算を確保して大々的に研究を進め、国の予測としてオーソライズしていかうとしているらしい」

「そんなことをしてどんな意味があるんだね。予測が的中するかどうかは直ぐ分かるだろうに……」

「だから、先生は甘いんだ。異常気象や気候異変の予測は今日明日の天気予報と違う。異常気象や気候異変の予測では数か月先か一年先とか、あるいは数年先が対象だ。それに応じてさまざまな分野でさまざまな対応策を考えることになる」

佐藤は口を尖らせ、こんなことも分からないのかという顔をする。

「われわれが警告を発した熱波には全然対応策が講じられなかったらしいがね」

九鬼は佐々木の話の思い浮かべる。

「そのことが所管をめぐってK省とS省の間で問題となっているようで、陰湿な責任のなすり合いになっているらしい」

佐藤はK省の久遠課長にも取材を試みたが、応じてくれなかったという。「へー、そんなことになっているのか」

「それはそれとして、異常気象や気候異変の対応策が予算獲得の材料や政治家の利権の対象になろうとしているのですよ。これで金儲けしようとしているやつがそこらこらにうようよ奔めいている」

そこで、異常気象や気候異変の予測情報をオーソライズする仕組みを作りだし、財源確保の用意をしておこうとして、関係省庁で縄張り争いが生じているのだという。

わが国の省庁や学界では、これに類する組織や委員会がさまざまな分野で作られてきた。たとえば、東海地震や南海地震といった巨大地震の発生が予想される地震の分野に関しては、すでに「中央防災会議」「地震調査研究推進本部」「地震防災対策強化地域判定会」「地震予知連絡会」「地震予知研究協議会」といったさまざまな組織ができている。「中央防災会議」は内閣府に設置された国の防災基本計画の策定や重要施策の決定を行なう機関で、これに必要な地震についての専門的な事柄はM省に属する「地震調査研究推進本部」が行なうのだ。このために「政策委員会」と「地震調査委員会」が設けられ、それぞれが専門の仕事を分担している。「地震防災対策強化地域判定会」と「地震予知連絡会」はそれぞれ関係省庁の私的諮問機関で、「地震予知研究協議会」は大学や研究機関の研究者の集まりである。

一方、地震対策のためのさまざまなグッズが売り出されたり、家屋や建造物の耐震基準が定められ、耐震補強工事が進められるなど、地震対策マーケットが活況を呼んでいる。なかには騙されて不要な補強対策や過重な補強工事を強いられたケースも後を絶たない。

「久遠課長が教授のところに来て、警報発令の基準化の話をしていて、そんなことだったのか」

九鬼は呆れ顔で呟く。

「え？ そんなことが……」

佐藤の目が光る。

「そんなことやっても、手遅れだ。もうすぐ巨大台風がやってくる。三つの台風が相次いで日本列島を襲うだろう。東京、名古屋、大阪が襲われ、広い範囲が水浸しになる。大洪水が大都市圏を襲うことになる。ところで、水浸しの大都市を巨大地震が襲えばどうなるか……」

「ホントですか。もうすぐそんなことになるのですか」

「危機が切羽詰まっているのに、縄張り争いをやるとは……」

「……………」

佐藤はじつと九鬼の目を覗き込む。

「きみには現代文明の象徴のような超高層ビルが林立する大都市はどんなふうに見えるかね。超高層ビルがばたばたと倒壊するようなことになったらどうする」

「そんなことはありえない……んじゃないんですか」

「もちろん、そんなことがないことを願うよ。でも残念ながら、そうなる可能性は極めて高いのだ」

九鬼は立ち上がり、窓辺に立った。激しい熱波に耐えきれなかったのか、並木の木々の葉はくすみ、生気がなかった。枯れ葉が目立ち、落葉をはじめている木もあった。

彼は「熱波のあとに、巨大台風か」と呟く。

「ヒートアイランドで熱くなった日本列島を大雨と大風で冷やそうというんですかね。先生、本当に巨大台風がやって来るんですか」

小聡く九鬼の呟きを聞き取った佐藤が身体に似合わない大きな声を出し

た。

「自然は必ず帳尻を合せるものだ。熱くなれば、つぎにそれを冷やす。どんなに時間がかかろうとそうする。それに対して、人間はどうだ。自分たちが生きるための基盤である自然（地球）を破壊しても平気である」

彼は正面から佐藤を見た。

「先生、必ず、巨大台風が来るんですね」

「そうだ」

彼は明瞭な声で応える自分に驚く。彼の脳裏にはひとつの情景が浮かんでいた。

「いつですか」

「すぐだ」

「どうなりますか」

「住居を奪われた何百万の被害者が環境難民化するだろう」

「東京ですね」

「首都圏、中部圏、近畿圏……」

「同時にですか」

「ほぼ同時だ。相前後して、三大都市のかなりの範囲が水中に沈んでいくことになるだろう」

「海面が上昇……。ホントに起こるんですか、そんなことが……」

「起こらなければいいが……」

「妄想ですか」

「ひとつの可能性だ」

九鬼には気になっていることがあった。地球規模で循環している深層大海流である熱塩大循環が衰え出ししていることだ。大気大循環の変動が地球

の自転速度に影響をおよぼし、地殻変動を呼び、巨大地震を誘発するとすれば、海洋大循環の変動はなにをもたらすのだろうか。地球上の熱分布に不均衡をもたらし、極端に暑いところと、極端に寒いところが生ずるにちがいない。燃える熱波と凍てつく寒波が襲うのだ。草木は枯れ、森林が消えていく。動物は棲息地を失い、餌を求めて彷徨するがどこにも餌はない。陸生生物生態系の崩壊ははじまる。

深層大海洋が停滞すれば、熱と栄養塩の循環が地球規模で妨げられることになる。これまで温かかったところは冷える。大気大循環にも大きな影響をおよぼす。気象異変が多発する一方、海面には貧栄養の海水域が広がり、植物性プランクトンやオキアミなどが減り、魚類は餌を失い、魚はいなくなる。こうしていたるところで海生生物生態系は崩壊していくにちがいない。

生物生態系が崩壊すれば、食糧も事欠き人類はもはや生きていけないのだ。

「もし、わが国に何百万もの大量の環境難民が発生するようなことになったら、どうなるんですか、この国は……」

「佐藤さん、そのような事態は、近い将来、必ず到来します。世界中が困難に直面することでしょう。そのとき、日本列島で一億二〇〇〇万の日本人がどうやって生きていくか。これはいまから真剣に考えておかなければならないのです。問題はこのような事態は不意に突然やって来るのです。だから、いまからこのための用意をしておかなければならないのです。地球温暖化対策を担当する官僚たちには縄張り争いに現をぬかす暇などないはずですよ」

佐藤の声が背後から微かに響く。九鬼は振り向くことはなく、窓から遠

くの空をじつと見ていた。

15

「先生、熱塩大循環には地球システムに対してどんな機能があるのでしょうか。熱や塩類の運搬のほかにはですね」

九鬼は鼻をびくびくさせて、佐々木を見つめた。

「……………」

佐々木は口を閉ざしたまま、にこにこしている。九鬼が鼻をびくびく動かしているときは新しいアイデアが浮かんだときだ。

「米国が研究戦略を大転換したと言ってきたでしょ。あれは彼らがなにかを掴んだからにちがいません」

「それで……………」

佐々木は急かす。

「大気大循環でなければ、海洋大循環でしょう」

「海洋大循環？」

「海洋大循環の変動によるポールシフトじゃないかと……………」

「ポールシフト？ どうして……………」

「一種のカンですが……………、多分、北極点が移動して、次第に北米大陸へ南下することを掴んだのじゃないかと思うんです。そしてこのことを他国には知られたくないのでしょ」

「だがそんなことはいずれ分かる」

「でもそれに備えるための十分な時間が欲しいのですよ」

「どうしてそんなことが分かったのか」

「そこですよ、問題は」

九鬼はまた鼻をびくびく動かす。

「どんなアイデアかね」

佐々木は身を乗り出す。

「ポイントとは地球規模の深層大海流である熱塩大循環じゃないかと思うんです。このまえの北極海から北大西洋までの海洋調査で熱塩大循環がかなり衰えていることが判明しました。そこでピーターソンらは過去における深層大海流の盛衰と地球システムとの関係を徹底的に分析したのでしょう。そして、地球システムの変化を掴まえたにちがいありません」

「それでポールシフトか」

「地球規模の深層大海流の変調が地球システムになんらの影響もおよぼさないとは考えられません。わたしは地球規模の三次元にわたるダイナミックな大海流（コンベヤーベルト）の動きが地球の自転軸の安定に寄与しているんじゃないかと思うんです」

海流には表層を流れるものと深層を流れるものがあるが、これらが一体となって地球規模でひとつの大きな流れを形成しているのがコンベヤーベルトと称する熱塩大循環である。これは莫大な海水が北大西洋から深層へ入り、インド洋を経て太平洋へ向かい、そこから表層に浮かび、ふたたび大西洋へ帰ってくる三次元のダイナミックな大循環で、まるで海が動いているような大海流なのである。

このコンベヤーベルトの動力となっているのが重い深層水だ。深層水は特定の箇所、たとえば北大西洋（グリーンランドの南東沖）や南極海（ウェデル海）で塩分濃度の高い海水が冷やされて形成される。冷えて密度が重

くなった塩分濃度の濃い海水が数千メートル以深へと沈み込み、深層水となる。

北大西洋で深層水となった重い海水は大西洋を南下して南極大陸へ向かい、そこで南極の深層水が加わり、南極大陸の縁を東へ流れ、北上して北太平洋東側で表層に出る。表層に出て表層水となった深層水はまわりの表層水（海流）とともに南下して、赤道太平洋を西へ向う。インド洋で湧昇した一部の深層水が加わり、さらに西へ向かい、大西洋に入って北上し、メキシコ湾流に乗ってグリーンランド沖に達する。これがブロッカーが発見した「ブロッカーのコンベヤーベルト」の現在（間氷期）のルートだ。

大まかに言って、この大海流は深層を東へ、表層を西へ流れている。この三次元大海流が回転する地球でヘリコプターのトルク用尾部回転翼のような役割を果しているのではないか。だがいまその大海流が衰えだしているのだ。そのため、自転軸の安定が阻害され、ぐらつきだそうとしているにちがいない。

「地球の自転軸がふらつき、極が移動するというわけか。だがマントル、外核、内核、コアの影響もあるだろうが……」

佐々木は唸る。

「地球全球モデルでシミュレーション出来ればいいんですが、データはないし、モデルもまだまだだし……」

「極移動のシミュレーションができていないんだな。じゃ、当面は理論モデルだけでもいいことにしよう。極移動仮説か熱塩大循環の機能仮説だ。早く纏めて、ネーチャー（英科学誌）かサイエンス（米科学誌）の電子版へ投稿しておこう。米国の連中も慌てることだろう」

佐々木はすっかり乗り気だ。

「日本列島ヒートアイランドとも関係が大いにありそうなんです。地球表面に形成されるホットスポットは極移動により将来熱帯あるいは赤道となる地点付近に形成されているらしいのです」

「ううん、そうかなあ。もしそうだとすれば、日本列島はいずれ赤道直下の熱帯となる可能性があるということか」

「まだ、はつきり言い切れませんので、この点は省きたいと思いますが……」

「赤道直下の日本列島は、温暖化の地球では灼熱の悲劇だが、寒冷化の地球では凍結が免れ、もしかしたら、われわれにとつて救いとなるかも……」

佐々木は半信半疑で呟く。

16

「電子版のペーパーを読んだぞ。どこからあんなアイデアを仕入れたんだ」

ACARのアンダーソンだった。ACARは米国の大気に関する研究機関で、かつて九鬼は共同研究プロジェクトに参加したことがあった。アンダーソンとはそのとき以来の仲だった。

「このまへの海洋調査のときかな……」

九鬼はディスプレイを覗いたまま、受話器を左手に持ちかえる。彼は海水が消えてなくなった北極海の大異変を目の辺りにして突然浮かんだイメージを思い出す。

彼はこの夏のはじめ、アンダーソンらと一緒に、ACARがチャーターした海洋調査船に乗って北極海からグリーンランド沖（北大西洋）を調査

した。これまで海表面を覆っていた白い海水が溶け、北極海には広々とした黒い海が広がっていた。海水温も例年より数度高い。北大西洋を北上してきたメキシコ湾流の暖かい海水が冷やされて深層水となることなく、暖かいまま北極海へ流れ込んでいるのだ。

北極海海水の大溶解と深層水生成不良による深層大海流（熱塩大循環）の衰退という大異変が起きていたのだ。

「あのとき、思いついたのか。ホントか。それにしてもポールシフトとはね……」

アンダーソンの間延びした声がした。

「ところで、米国が地球温暖化に関する研究戦略を転換するって、本当か」

彼はアンダーソンの惚けたような声に反発するように、単刀直入に切り込む。

「何だつて？ 誰がそんなことを言っているんだ」

「そうか。そんな話はないというんだな。やはり、あれはピーターソンの作り話だったのだな」

「なに、ピーターソンだつて。またそんなことを言っているのか」

アンダーソンは声をひそめる。

ピーターソンは軍関係の研究機関から派遣されている研究員で、軍は気象を操作する環境兵器の開発を目論んでいるらしい。それでなにかにつけて情報を独占したがるのだという。

「じゃ、ACARには研究戦略転換の方針はないんだな」

「ないね。ここは世界中の誰でもが研究に参加できるオープンな組織だよ」

「研究資金には色はついていないのか」

「それは別にしてある。ピーターソンがいうのはそつちのほうだろう」

「そうかね……」

「ところで、今回のペーパーについて聞きたい連中が大勢いる。レクチャーに来る気はないか。招待したいが……」

アンダーソンはけしかける。

「うん、考えて見る」

九鬼は迷う。レクチャーすれば共同研究を持ちかけてくるだろう。ACARのスタッフや世界最速のコンピュータとデータセットが魅力だった。だが年老いた母に預けているアキラをひとり残して長期間日本を離れるわけにはいかなかった。それでもACARへ行つて研究をしたい気がしてならないのだ。

「地球全体モデルでポールシフトを予測するのか。一体、どんなモデルなんだ。きみがこちらへ来れないなら、わたしが東京へ行こうかな」

アンダーソンはいまにも出掛けるようなことを言う。

「待つてくれ。返事は直ぐするから」

彼はどうにも出来ない自分を持って余しながら、その気持ちを断ちきるように、アンダーソンの声が聞こえてくるまえに早々に電話を切ってしまう。

17

「反響が凄いらしいね」

佐々木教授が研究室に入ってきた。机でノートパソコンのディスプレイを覗いている九鬼に近づく。

「アンダーソンからレクチャーに来ないかと言ってきました」

九鬼は机から立ち上がりながら、気のないふうにはそつとと言う。

「ACARの……。それなら、行ってきたらいい」

教授は彼に笑顔を向けた。

「研究戦略転換はピーターソンの作り話のようでした。少なくともACARはそんなことを考えていないことが分かりました」

「そうか……」

「この問題にはこれ以上深入りしないほうがいいように思います……」

彼は自分でもなぜこんなことを言い出したのか分からなかった。大気や海洋の大循環の変調からポールシフトを予想したことが自分でもあまりにも突飛すぎると頭のどこかで感じていたからだろうか。

「どうということかね」

教授は彼の目をじつと見た。

「米国の研究戦略転換ということではいろいろ考えましたが、それがなければこんなことを考えることもなかったわけですから……」

「そうかもしれないが、一度彼らと徹底的に議論してみてもいいテーマじゃないのかな。いい機会だよ。別に行つたきりになるわけでもあるまい。二、三日のことだろう」

教授はなぜか積極的だ。

「レクチャーをやれば、共同研究の話になるかもしれないし、それに……」

彼はピーターソンのことが頭にあった。共同研究に軍関係の資金が紛れ込み、軍が絡んできたらややこしくなるのだ。だがこのことはなぜか伏せておくほうがいいように思い、彼は口を噤んでしまう。

「……………」

教授は黙つて彼を見、つづきを待っている。彼はじつと教授の視線を耐

える。

「先生、こちらにいらしたのですか」

背後から大きな声がした。M新聞の佐藤だ。

「あ、そうだ。佐藤さんが話を聞きたいと言ってきたんだ。忘れていたよ」

教授は九鬼に目をやり、佐藤が立つたまま待ち構えている応接セットへ移動する。彼も教授につづく。

「大気大循環の変調で巨大地震が誘発されるのなら、海洋大循環の場合にはなにが起こるのですか」

当然のように、ソファの真ん中に腰を下ろしながら、佐藤は佐々木に、そして九鬼に視線を向けた。

「なにが起こるか、よく分からない。ただ……」

彼は教授の横顔を盗み見る。

「ただ、なんですか。巨大地震の誘発が加速するのですか。『自転軸の安定性が損われ、極が移動する……』とはどういうことですか」

佐藤はハトロン紙の大封筒から電子版のペーパーのコピーを取り出す。

「北極と南極がいまの位置から別のところへ移動するということだよ」

佐々木が口を開こうとしない彼の代わりに応える。

「そんなことが起こるんですか。いつどこへ……」

佐藤は半信半疑の面持ちで、目をしばたかせる。

「まあ、いろいろな条件が重なれば、その可能性があるということだよ」

九鬼は教授の横顔にちらりと視線を走らせながら、応える。

「極が移動すれば、一体、地球にどんなことが起こるのですか。日本はどうなるのですか」

「極の位置が変われば、それに応じて気温帯も変わる。たとえば、温帯の日本が熱帯になったり、寒帯になったりする」

「その程度なんですか」

「突然、気候帯が変われば生物生態系の崩壊をもたらし、生物にとつては生死にかかわる事態が生じる。これによって人間にも食糧危機や感染症蔓延といった大きな影響が生じ、世界は大混乱に陥ることだろう」

「そうですね。ところで、極移動の可能性はどの程度あるのですか。台風が巨大化するとか、熱波が襲うということなら想像できますが、極が急に移動するなんて……、想像できません。ウソでしょ」

佐藤には信じられないらしい。

「地球温暖化が大気大循環に変調をもたらし、海洋大循環にも変調をもたらした。その結果、気候システムの変動のみならず、地球システムをも攪乱しはじめているのだ。それがなにをもたらすか、正直言って、正確に予測することはできない。なにも起こらなければめつけものだが、いまはなにが起きても不思議ではない状態なんだ……」

九鬼は佐藤をじつと見た。

「……………」

佐藤は口を固く閉じたまま、彼を見つめ返す。

「……少々、思い付きで極移動と言ったが、大気大循環のほかに、海洋大循環も変調し出していることを考えれば、地球上に巨大地震に匹敵する出来事かそれ以上の大異変が引き起こされるかもしれない。そのとき、日本列島は、そして世界はどうなるか。いまはなにが起きてても不思議ではないのだ。このような状況のもつて、一億二〇〇〇万人の日本人が、七〇億の人類がこれにどう対処すればいいのか。ともかく、われわれ一億二〇〇

○〇万人の日本人がこの大異変をどうくぐり抜けて生きていくべきなのか、これが問題なんだ。先生、そうですね……」

彼は前方を見たまま動かない教授の横顔をじつと見た。

「でも、いつ、なにが起こるか分からなければ対応しようがないじゃないんですか」

佐藤が不平そうに大きな声を出した。

「早く、地球全体モデルを……」

佐々木がかすれた声で呟く。

「自然（地球）はそれまで待つてくれないでしょう。明日と言わず、すでに大異変の用意を始めているにちがいありません。とにかく、考えうる最悪の場合を想定して可能な対応策を講じておくべきです。これをご覧ください……」

彼は机のノートパソコンをテーブルに置くと、キーを叩いた。

眠りから覚めたディスプレイには、熱帯付近に熱帯低気圧らしい雲塊が数個、写しだされていた。しばらくすれば渦を巻き、台風へ発達していくだろう。

「これらは……」

「そうです。巨大台風の卵ですよ。北上を重ねながら、巨大台風へと成長し、高波が荒れ狂う強風や大量の水蒸気をとめない、矢継ぎ早に日本列島を襲い、狂風、豪雨、洪水、土砂崩れをもたらすことになるでしょう。でもそれで序の口で、まだまだ終わらないでしょう……」

彼の頭の中を自然の攪乱シナリオがエンドレスにつづく。

台風の高波が満潮時の高潮と重なり、防潮堤を越え、大都市を襲う。首都圏、中部圏、近畿圏のゼロメートル地帯は浸水し、洪水が広がっていく。

一メートル、二メートルと水深が増していく。ついに、防潮堤が決壊し、一挙に水嵩が増す。さらに、河川の堤防が決壊すれば、洪水は数メートルを超えるのだ。

「そのとき、巨大地震が襲ったら……」

佐藤が叫ぶ。

「被害者は何十万人、いや、何百万人におよぶにちがいない。犠牲者や行方不明者も何万人、何十万人に達することだろう。だがこれはまだほんの序の口なんだ。このようなことは何十年にもわたって起こる。さらに地球温暖化が進み、海面が上昇すれば河川や地下水が塩水化し、水はけの悪いゼロメートル地帯はさらに広がる。そしてこの地帯に住んでいる数百万人は生活の場を失うことになる」

「……………」

佐藤も佐々木も口を開こうとしない。

「このような事態は日本列島に間違いなく訪れる。異常気象や地震の予測が正確に行なわれていようといまいとにかかわらず、近い将来確実にやってくる。今日か、それとも明日かは不明だが……」

彼はものに憑かれたように話しつづける。話をつづけながら、なにか大きな間違いを仕出かしているような気がした。彼は目を大きく見開き、異常気象などの極限現象の予測を確実なものにすれば、それに応えてそのための対応策も当然進められると思ってきた自分を見つめ直した。

本当にそう考えていいのだろうか。誰もが果たしてそう考えるだろうか。

対応策を講じたくともどうしていいのかわからないひともしれば、対策をやりたくてもお金がなくてできないひともあるのではないか。いや、頭から対策をやろうとしないひともあるにちがいない。

巨大台風が襲来すれば、高波は防潮堤を越え、海面より低いゼロメートル地帯は確実に浸水するのだ。そこに何百万人ものひとが住みついている現実に、彼の考えはすつかりぐらつきだしていた。

彼はようやく、確実な予測さえあれば誰もが対応策を講じるにちがいないと頭から単純に考えていた自分に気付いた。この考えを前提にこれまで研究を進めてきたのだ。

それにしても人びとは危険をなぜ危険と感知しないのだろうか。それとも現代文明に溺れきっている現代人にはもはや危険を危険と感知する能力さえ喪失してしまっているのだろうか。

佐藤や教授がなにを問いつけても、彼は口を閉じたまま、なにも見えないうろな目で遠くを見ていた。

## 第三章

18

「先生、巨大台風が日本列島へやって来るかもしれません。東京を直撃する恐れがあります」

九鬼は机に近づいてきた佐々木ヘイスプレーを向ける。いつものように、教授はぶらりと彼の研究室に入ってきたのだ。

カロリン諸島付近やマリアナ諸島沖で相次いで数個の熱帯低気圧が発生した。しばらくして消滅するものもあれば、他に合体してさらに発達するものもある。彼は何時間もまえから気象観測衛星から送られてくる映像を丹念にチェックし、これらを追い続けていた。

三つの熱帯低気圧は大きく発達して、相次ぎ渦を巻き出す。台風となつたらしい。

一〇号、一一号、一二号の三つの台風はさらに発達しながら前後して西北へ向かった。フィリピン諸島沖で一転し、北上しはじめ、日本列島を狙い出す。

台風の卵が熱帯低気圧だ。熱帯低気圧が発達して強い風をとまなうようになると、風速を目安に、世界各地ではさまざまな呼び名を付けている。北太平洋では熱帯低気圧が最大風速一七メートル以上に発達すると台風となる。北大西洋や北東太平洋で最大風速三二・七メートルを超える熱帯低気圧はハリケーンだ。インド洋ではサイクロンと呼ぶのだ。

熱帯低気圧は海水温が二六、七度以上の高温水域で発達して台風となる。

海水温がエネルギー源なのだ。

海から蒸発した水蒸気は上昇し、凝結して雲粒と変わるときに大気中に熱を放出する。この熱が台風のエネルギー源である。海水温が高ければ高いほど、蒸発する水蒸気の量が多く、ますます暖かい軽い空気が多くなつて上昇気流が加速される。これにコリオリ力（地球の自転により生じる回転効果）が作用して渦を巻く。

地球温暖化で海水温が上昇し、水蒸気量が増え、供給されるエネルギーが増えるために台風が大型化していくのだ。

「日本列島周辺海域はまだ水温が高いままだな」

教授はガラス窓越しに遠くを見た。

日本列島を襲った熱波は去つたものの、九月半ばを過ぎても、海水温は三〇度を超えていた。台風は高温の海水域を発達しながら通り抜け、勢力を増しながら日本列島に近づいて来るのだ。

「先生、佐橋さんに超高層マンションからの転居をすすめてられてはどうですか。あそこは危険です。早く逃げ出したほうがいい……」

「……………」

教授は口を閉じたまま、じつと遠くを見ている。

「巨大台風が来襲すれば、周囲は冠水し、超高層マンションは海のなかに取り残されることになるでしょう……」

彼はさらに語気を強める。教授は黙つたまま、ヘイスプレーへ視線を移す。

前後して日本列島へ向かっていった一〇号、一一号、一二号の三つの台風の動きが止まった。三つ子の台風が合体して超巨大台風へと変身しようとしているのか。

しばらくすると、一〇号台風だけが他から離れてすると北上しだした。琉球諸島が風速二五メートル以上の暴風域に入る。

「四国から紀伊半島かな」  
教授が呟く。

「九州南部を掠め、四国方面へ向かうことでしょう。上空の偏西風に東へ流されていくかもしれません」

しばらく、沈黙がつづいた。

「きみは台風のあとに、巨大地震が関東を襲うと思うのか……」

「その可能性を否定することはできません」

「超高層マンションが倒壊すると考えているのか」

「そのおそれがあります」

「その確率は……」

教授の声が次第にかすれていく。

「分かりません。カンだけですから、当たるとは限りません」

「……………」

「一寸、気になったものですか……」

「ヒロシくんがいるからな」

教授は幾分含羞む。彼は黙ってディスプレイに目を移す。

動きを止め、停滞していた一二号、一三号が急に動き出した。

日本列島の半分を覆い尽くすような巨大な雨雲を引き連れた二つの台風は一転すると、大きなカーブを描いて東北東へ向きを変え、ぐんぐん進む。

彼は一一号、一二号の二つの台風は双児のようになってこのまま並行して進み、日本列島を襲うにちがいないと思った。ひとつは中部圏へ向い、もうひとつは首都圏を襲おうとしているのだ。それとも二つの台風は合体

し、二倍以上の超巨大台風となるのだろうか。

彼は顔を上げた。そこには教授の姿はなかった。彼が夢中になってディスプレイを覗いているうちに、教授はなにも告げずに研究室を出ていったらしい。

急に暗くなった。彼は振り返り、窓から空を見た。空には黒い雨雲が一面に広がっていた。

19

「どうしたんだ。ACARに来ないのか。こつちでしばらく仕事をやってはどうか。一緒にプロジェクトをやりたいと思ってるんだが……」

アンダーソンの太い声だった。

「うん、もう研究はやめにしようかと思ってるんだ」

九鬼は受話器を左手に持ち替え、椅子の背に寄りかかった。

「なんだって……」

「モデルの開発をいくらやっても、襲ってくる巨大台風をどうすることもできないからな」

「巨大台風か。それが襲うまえに東京を発つことはできないのか」

「なんだって……、どういう意味だ……」

「実は、こんな情報がいま入ってきたんだ。なんでも超超高感度海底地震計が現在微妙な微震動を感知しているというんだ。どうやら太平洋プレートが動いているらしい。きみの仮説である大気大循環や海洋大循環の変調のせいかわからないがね。とにかく無気味な動きだ。巨大台風が日本列島

を直撃するとなると、連動してなにが起こるか分からない。多分、なにが起こるかもしれない」

「へい、そうかい。一体、なにが起こると言うんだ」

「……………」

アンダーソンは黙ったままだ。

「もしなにかが起こるのなら、なおのこと、東京にいてそれを見極めないといけないんじゃないのか、気候変動を研究する科学者としてな」

彼はたたみかけ、息を詰めて待つ。

「東京が沈むかもしれない……………」

アンダーソンはしばらく無言のあと、ぼつりと言う。

「なんだって、どういうことだ」

「大気大循環と海洋大循環の変調で地球システムにも影響がおよんでいるらしい。それで地殻システムにも変動の兆しが現れはじめているんじゃないかというんだな……………」

「誰がそんなことを言い出しているんだ」

「ピーターソンがそう言っている」

「ピーターソンが…………、なんで彼がそんなことを言い出しているんだ」

彼はアンダーソンがピーターソンのことを軍関係の研究機関からACARへ派遣されている男だと言っていたことを思い出した。

「ずっとまえから太平洋プレートの微震動がつづいていたらしい。なぜか分からずにいたところに、きみの仮説が出た。それがヒントとなって、解析の結果がそうならしいというわけ」

「ピーターソンは詳しい情報をもっているのか」

「それは知らない。知りたかったら、彼に直接聞くほかない。入手したデー

タを送ろう。きみの解析結果を聞きたい。とにかく、一度、ACARへ来ないか」

アンダーソンはダメを押すように言うのと、電話を切った。彼は切れた受話器を持ったまま、なにも考えることができず、ただ呆然としていた。

しばらくして受話器を返すと、彼はいまの話を佐々木教授に報告してこうと立ち上がった。だが一度は研究室を出たものの、彼は引き返して机に戻り、ディスプレイを覗き、台風の動きを確かめる。

一〇号、一一号、一二号の三つの台風はゆつくりと、しかし確実に日本列島へ近づきつつあった。一〇号台風は幾分まえを進み、一一号、一二号の二つの台風は少し間隔を置いてほぼ一直線に並んで日本列島をめがけて進んでいる。

さらに北上して偏西風の影響を受けるようになれば、一両日中に日本列島に接近し、上陸するにちがいない。

彼はもう一度、アンダーソンの言っていたことを思い返した。もはや、猶予はなかった。米国へ発つなら、今日中だった。明日になれば、台風の影響が出ることだろう。

決断が迫られているのに、彼はまだ迷っていた。

20

米国へ発つべきか、九鬼は迷ったままだった。彼は耳元で繰り返されるアンダーソンの声を聞きながら、虚ろな目をディスプレイへ向け、台風の動きを追っていた。

電話が鳴った。何度目かのベルに促され、受話器へしぼしぼ手をのぼす。

「九鬼くんか……」

教授だった。

「……佐橋祐子さんが来ている。きみからも説得して欲しいんだが……」

教授の声を耳にすると、彼は反射的に席を立った。

アンダーソンの電話のことを報告しておこうと、一度、教授を訪ねたが、留守だった。いつ戻られたのかと思いつながら、彼の足はひとりでに急ぐ。

九鬼が教授室へ入っていくと、教授は執務机でディスプレイを見ていた。

顔を上げ、立ち上がるのを見届けると、彼は佐橋祐子がぼつんと座っているソファのまえの椅子に腰をおろす。

「妙な振動について、なにか分かりましたか」

彼は彼女の目を覗きながら、まえのとき交わした話題に触れる。彼女の目が一瞬光る。笑みのなかに怒っているような光が混じっている。

「あの超高層マンションが倒壊するおそれがあると言われていたそうだが……」

教授が椅子に座るのを待って、彼女は教授と九鬼の目を交互に見た。

「その可能性があるのです」

彼はできるだけ声を低くし、調子を抑える。

「想定できる範囲で十分耐震対策を施してあるのですが、それでも……」

彼女は困った表情を浮かべる。

「もちろんそうでしょう。超高層マンションですから、必要以上に神経を払ったことでしょう。一級建築士佐橋祐子は十分責任を果たしていると思いますよ。でもその想定を超える事態が発生するかもしれないのです」

「……………」

彼女は堅く口を結び、じつと九鬼を見、佐々木を見た。彼女の光る目には侵しがたい気迫があった。

彼はこれ以上彼女を説得しようとしても、かえって彼女を苦しませることになるだけだと感じた。彼女には彼女の立場があるのだ。彼女は悩みに悩んでいるにちがいない。いとも気安く、超高層マンションから早く逃げ出したほうがいいと言い、転居をすすめた自分が恥ずかしかった。ひとが精一杯生きるとはどういうことか、彼も自分のことのように考え込んでしまう。

しばらく三人の間に沈黙が支配した。なぜか誰も口を開こうとしなかった。

執務机で電話が鳴った。教授は立とうとしない。途中で一度途絶えたベルがふたたび鳴った。それでも教授は立とうとしない。

彼は佐橋祐子の目に促されて立ち上がり、受話器を取る。事務室からだつた。米国から緊急の電話が入っているという。

「今夕一七時三〇分成田発のUN航空サンフランシスコ行きの手配を手配した。それに乗ってくれ。迎えに行く。これに乗らないと間に合わない」

「アンダーソンだった。」

「行くとは言っていない」

彼は怒鳴り返した。だが電話はすでに切れていた。

彼は受話器を叩き付けるように戻すと、しばらくそのまえに佇み、息を整える。教授の視線に気付いて、彼は急いで椅子に戻る。

「どうした？」

「アンダーソンが今夕成田発の航空券を手配したと言ってきたのです」

「え？ 今日か」

教授が大きな声を発した。佐橋祐子も目を丸くしている。

「実は、ピーターソンらが太平洋プレートの大規模な長期にわたる振動を観測していたらしいのです……。解析の結果、日本列島に巨大地震が発生し、東京が沈むかもしれないというのです……。台風でもうじき飛行機が飛べなくなるから、今夕のUN航空に乗れと言ってきたのです……」

彼は自分自身どうすべきか分からず、考えながら、ぼつりぼつり区切つてゆつくり言った。さらに、彼はそのままにアンダーソンから電話があったことやそのときの話も加えた。

「きみに来て欲しいんだな、アンダーソンは。いや、ACARか、それとも……」

教授は考え込んだ。

考え込んでいる教授を見ているうちに、なぜか分からないが、彼は不意にACARへ行く気になった。

「佐橋さん、あなたは立场上超高層マンションを離れることはできないとお考えなのでしょう。それは十分理解できます。あの一带に避難命令を出すように、これから国と東京都に働き掛けます。避難命令が出たら、あなたも超高層マンションから立ち退いて下さい。ただ避難命令が間に合わないときのために、ご子息をさきに避難させておくことができませんか。是非そうして下さい」

彼は猶予がないかのように、早口で一気に言って、彼女の目を覗く。

佐橋祐子は佐々木の顔をじつと見た。多分、彼女に教授も同じようなことを言ったのだろう。しばらくして彼女の目から迷いが消えた。

「ご心配お掛けしました。ヒロシを実家に預かってもらいますわ」

彼女は笑みを浮かべ、立ち上がりながら、佐々木と九鬼に礼を言った。

彼は椅子から動く気がしなかった。彼は椅子に腰を下ろしたまま、佐橋祐子を送つていった教授が戻るのを待った。

突然、実家の母に預けてあるアキラの小さな顔が鮮明に浮かんだ。いま何をしているだろうか。母に絵本を読んでもらいながら、昼寝をしているのだろうか。

彼はアキラの寝顔を思い浮かべているうちに、いつの間にか、彼のころのなかに迷いが育ちはじめていた。いまこのときに、なんのためにACARへ行こうとしているのか。ふたたび母やアキラを置いてきぼりにして、研究のために日本を離れようというのか。自分がしようとしていることがアキラにとつてどんな意味があるのか、また、それが果たしてアキラのためになることなのだろうか。

「これからヒロシくんを実家へ連れていくと言っていた」

戻ってくるなり、教授がぼつりと言う。

しばらくあらぬ方を見ていた教授が九鬼に顔を向けた。

「ACARへ行くのは止しました」

彼は待つていたように言った。

「そうか」

教授は予期していたように頷く。

「ところで、避難命令のことですが……」

彼にいいアイデアがあったわけではなかった。佐橋祐子を納得させるにはあの手しかなかったのだ。教授にもそのことが分かっているらしく、そのことについてはなにも言わずに黙って考え込んでいる。

彼はもう一度超高層マンション倒壊のシナリオを繰り返す。

巨大台風が来襲し、猛烈な風と豪雨、それに高潮や高波が襲い、河川の堤防や防潮堤が決壊し、洪水が広がる。ゼロメートル地帯や低地は冠水する。冠水している地帯に巨大地震の地震動が襲う。超高層マンションは大きく揺れ、地盤の液化化により基礎が不等沈下を起こして傾く。猛烈な風による揺れに加え、遠くから長周期地震動もやってくる。これに超高層マンションは共振し、壁面や構造の一部が破壊する。超高層マンションはさらに傾き、やがて耐えきれなくなつて、倒壊することになるのだ。

だが問題は地震の予測だった。台風の進路予測のように、巨大地震の発生を予測できるかどうか。気象学者の佐々木教授や気候変動予測を専門としている九鬼がいくら巨大地震が発生するといつても誰も信用すまい。避難命令など論外か。

「浸水の危険が生じると分かれば、避難を呼び掛けることができるかもしれないぞ」

佐々木は考え倦ねている彼の様子を見兼ねて、机に戻り、受話器を取り上げ、電話しはじめる。

「元気か。ところで、一〇号、一一号、一二号の三つの台風が日本列島に接近しそうだね。東京の沿岸部に接近して、浸水の危険が生じた場合には事前に避難警報や避難命令を出すことになるの……」

気象関係の省庁や研究機関はもちろん、東京都など自治体の研究機関にも教え子たちがいる。教授は彼らを電話のターゲットにしているらしい。

「超高層マンションの住民たちも町内の避難の呼び掛けに応じてくれるといいのですがね……」

彼は教授を横目で見ながら、避難の呼び掛けにも応ぜず、ただひとり屋上塔屋の実験室の窓辺に佇み、台風が荒れ狂う東京湾を見つめている佐橋

祐子を思い浮かべた。

21

「アンダーソン、折角だけど、あの便には乗れない」

九鬼はアンダーソンが空港に出迎えると言っていたので、取り敢えず行けないことだけでも連絡しようとする自分の研究室に戻って電話したのだ。

「なんだって……。どうしてだ。とにかく乗るんだ。まだ間に合うだろう」アンダーソンはがなりたてる。

「ダメだ。ところで、太平洋プレートデータのことが……」

彼はアンダーソンが「データを送る」と言っていたことを思い出した。

「どうしても乗れないのか。データはACARで見てもらおうと思ひ、まだ送っていない」

「是非、見てみたい。送ってくれ。それと東京が沈下すると言っていたが、あれは本当か」

「ああ、そうだ。東京が壊滅するかもしれないのだぞ。だから、急遽、あの便を予約したのだ。九鬼はあの便に乗るべきだ」

アンダーソンが力を込めて言う。

「ムリなんだ。東京がなぜ沈下するのだ。そしてその発生確率は……」

彼は静かに応える。

「それはこうだ……」

アンダーソンは彼を説得するのを諦め、手許にある情報について話した。あらましつぎのようだった。

大分まえから大太平洋プレートの微震動をキャッチしたものの、どこが震源か、原因はなにか、ずっと分からずにいた。最近になってようやく震源をつかまえた。東京附近の一带だと判明したという。だが深さを特定できないし、原因もよく分からなかった。そのとき九鬼の論文が発表された。それがヒントとなって、地球自転速度の変動が原因であるらしいことが突き止められたという。

これが原因だとすれば、震源の範囲もかなり広く、深さもかなり深いところから比較的浅いところまで広がっているかもしれないのだ。

そこで、地球科学者の協力のもとに、シミュレーションモデルで解析したところ、日本列島近辺のプレート境界（海溝）から潜り込んでいる先端附近にこれまでよりは激しい動きが起きていることが分かったのだ。これが場合によっては、東京沈下を引き起すらしいという。

「激しい動きって、なんだ。プレート境界である海溝では海側プレートと陸側プレートとが押し合い、海側プレートが日本列島の下へ潜り込んでいるが、そのとき接触面に歪みが貯まり、元へ戻ろうと跳ね上がれば巨大地震となるんだつたな。いまここになが起きていっているのか」

「ふたつのプレートが接触する上層部ではそうだが、深いところの下層部ではまた別の動きになるらしいが……」

アンダーソンは短くはつきり応える。

「東京附近が震源ということ、日本列島近辺だけでそんなことが起きているということか。なぜなんだ」

「日本列島附近だけとはかぎらない。うちの地球科学の専門家によると、地球の回転速度の変化でマントルの流れが変わり、マントルの移動に応じて地殻が隆起したり沈降したりするらしいが、地球の緯度三五度附近が一

番複雑な影響を受けるといふんだ。そのひとつがまさに東京附近なんだ」

「それで……」

「いまは気候変動の影響で大気大循環が変動しており、これで地球の回転速度が変動しているらしい。遅くなっているのかな。自転が遅くなれば、マントルが赤道から極（軸）の方向へ移動し出すらしい。このためプレートの動きにも変化が生じているが、東京附近の動きが大きく、それで微震動が発生しているようだと言っているんだ」

地球自転速度が遅くなると、いままで赤道方向へ流れてそこに溜まっていたマントルがそれに応じて極の方向へ移動する。このマントルの動きによつて日本列島近辺の海溝（プレート境界）から潜り込んでいる海側プレートの下層部に引き摺られる力が加わり、それに応じて陸側プレートとの衝突が強まり、接触面にも新たな力が加わって圧縮する力が増していることが微震動発生の原因らしいのだ。

太平洋プレートとフィリピン海プレートは日本海溝や相模トラフ、南海トラフといった舟状海盆（浅い海溝）から日本列島下部へと潜り込んでいるが、マントルの新しい動きで、とくに相模トラフや南海トラフなど日本列島の南側のトラフから潜り込むフィリピン海プレートの圧力が強まっているという。

「すると、マントルの動きが収まるまでの間微震動がつづくが、これは一時的と考えていいのか」

「かもしれないが、そうでないかもしれない。自転速度の変動次第ということになるのだろうか」

「マントルの動きの変化でプレート境界の歪みが増します増していく方向へいつているのなら、近々日本列島を襲う恐れのある海溝性巨大地震がさ

らに接近していることになるわけか」

「さあ、そう単純じゃないかもしれない。プレートよりもマンタルの動きが急なら、固いプレートの下に空隙ができ、押しつぶされて脆くなった地層やプレートの先端が崩壊することも考えられるらしい。そうなれば、今度は海溝へ向かって大規模な地滑りを起こすかもしれないんだ。こんなことになれば、東京一帯が、いや日本列島の太平洋側が海溝へ向かって沈み込んでいくことになる……」

問題なのは、マンタルの動きとプレートの移動が一致しない場合である。すなわち両者の移動スピードが一致していない場合、ことにマンタルのスピードが速い場合（このケースが多い）が問題で、このようなケースでは潜り込む海のプレートの上層部に働く圧縮の力に比べて下層部に働く引つ張る力が大きくなってプレート下部に巨大な空隙が形成されることがあるのだ。これが日本列島を呑み込むような地殻の大地滑りの原因となるというのである。

「……………」

九鬼は大きく溜息をついた。

「といっても、プレートは相当厚みがあるので、プレートの下へ潜り込むとき、プレートの上層部と下層部とでは受ける力が異なるらしい。そのため実際はさらに複雑なことになるようだが……」

「いつ、そんなことが起こるといふんだ」

「今日かでなければ明日か、いつか分からない。とにかく、いつ起きてもおかしくない状態らしい」

「いつ起きてもおかしくないということは、当分起きないかもしれないということじゃないのか」

「いや、かなり切羽詰まっているようだ。微震動のデータを見てくれ。直ぐ送るから。こっちへ来てプロジェクトに加わってくれると嬉しいんだがなあ。とにかく、十分気を付けて、海に呑み込まれないようにしてくれ。じゃ、またな」

彼は受話器をもったまま、しばらくアンダーソンの声を反芻していた。

22

空一面が暗い灰色の雨雲に覆われ、生ぬるい湿った風が吹く。いまにも雨が降り出しそうだった。

佐橋祐子は大学のままでタクシーを拾うと、急いで超高層マンションへ戻った。彼女はそのまま、塔屋の実験室に上がり、テレビのスイッチをいれる。チャンネルを回し、台風予報を探す。

一〇号、一一号、一二号の三つの台風が日本列島へ近づいていた。

一〇号は四国と紀伊半島へ接近し、近畿圏をうかがっている。一一号、一二号の二つの台風は少し離れているが、前後して一〇号のあとを追う位置にあって、向きを北北東に変え、中部圏、首都圏をめざしていた。

「一一号と一二号は一緒になるのかしら」

彼女は呟く。もし合体してひとつの台風になれば、超巨大化するだろう。

超巨大化すれば、どのくらいの強風が吹くことになるのだろうか。風速は秒速一〇〇メートルを超すだろうか。

彼女には秒速一〇〇メートルの風を想像することができなかった。秒速一〇〇メートルの風に超高層マンションは耐えうるだろうか。

彼女は窓を見た。ガラス一面に水が流れている。雨粒の大きな水滴が激しくガラスを打っているのだ。

彼女は水滴が打ちつけるガラス越しに外を見た。東京湾がすっかり霞んでいる。濡れたガラスで歪んで見える近くの建物も激しく雨に打たれ、水しぶきを上げていた。

不意に、佐々木と九鬼の声が聞こえた。彼女は振り向き、周りを見渡した。誰もいない。テレビからの音を錯覚したらしい。

彼女はもう一度テレビの画面を覗いた。台風を取り巻く雲は相変わらず一団となつて日本列島をめざしている。

彼女はヒロシを実家へ連れていかうかいくまいか、迷っていた。一度は実家に預かつてもらおうかと思つたものの、離ればなれになることに強い抵抗感があつた。この抵抗感が無意識のうちに彼女を行事もないのに実験室へと導いていたのかもしれない。ヒロシを実家へ預けるなら、すぐ保育園へヒロシを迎えにいったはずだった。

彼女は携帯を取り出し、キーを打つ。

「あ、お母さん……」

「台風が来るそうだけど、マンションは大丈夫なの」

母には二〇〇メートルもある超高層マンションが不安でならぬらしい。

彼女に会うと、母はいつも同じことを言う。

「心配ないわよ、わたしが構造計算したんだから」

彼女は軽く受け流す。彼女は勢い余つて、自分だけで構造計算を担当したわけでもないのに、母の懸念を解くために、事務所全体で行つた仕事を自分ひとりでやったように言つてしまう。母とはヒロシの日頃の様子や保育園での出来事を話ただけで、台風避難のことには一切触れずに携帯を

切つてしまう。

やはり「母にマンションが危ないから、ヒロシだけ預かつて」と言えばよかつたか。彼女は切つてしまった携帯を握り締めたまま、しばらく考え込んでしまった。

だが本当にこのマンションに倒壊の恐れがあるのだろうか。この超高層マンションの耐震性は関東大震災級の震度にも十分耐え得るものだった。それでも倒壊することがあるのだろうか。もつとも関東大震災以上の巨大地震が来ないとはいえないけれども、佐々木や九鬼はなにを心配しているのだろうか。

長周期地震動による共振現象が生じてても、超高層マンションが倒壊してしまうとは考えられないのではないか。地震による液化化に対しても岩盤へ杭を打ち、そのうえ、四メートルもの厚みのある巨大なコンクリート基礎構造で十分な対策を施してあるのだ。あの二人の心配は一体なんだろうか。

彼女は二人の心配が杞憂に過ぎないものだと思いはじめていた。そろそろヒロシを迎えに行く時間だった。彼女はヒロシがこれまで話してくれた保育園での出来事をいろいろ思い浮かべ、今日はどんなことを話してくれるのだろうかと思ひながら、実験室のドアへ向かつて歩き出した。

一瞬身体がよろめく。不意に、妙な揺れが甦つてきた。竜巻に襲われたとき感じた揺れだった。彼女はしゃがみ込み、近くの椅子に腰を下ろした。

彼女は周りを見渡した。なにも変わったことはなかった。超高層マンションが揺れたわけでもなかった。

外では激しく雨が降っている。窓ガラスに叩きつける雨粒の水が滝のように流れていた。風に煽られるのか、時折雨水が窓ガラスをすると上つ

ていく。

彼女はしばらく椅子でじつとしていた。

なぜよろめいたのか、あれこれ考えるがなにも思い当たることはなかった。ただ不意に甦ってきた妙な揺れがあとを引く。

もしかしたら、佐々木や九鬼が心配するように、巨大台風と巨大地震の連続攻撃に、超高層マンションがあえなく倒壊するかもしれない。ヒロシだけでも避難させておくべきではないのか。幼いわが子を危険に曝させたくなかった。だが離ればなれになっていて、母親にもしものことがあれば、ヒロシはひとり残されてしまう。夫が生まれたばかりのヒロシを残して死んだあと、彼女はヒロシとずっと一緒だった。彼女にはヒロシをひとり残して逝くようなことは耐えられなかった。いや彼女自身が耐えられなかったのかもしれない。

彼女は迷った。迷いながら、彼女は実験室を出た。彼女は重い足を引き摺るようにして歩いていく。

## 23

一〇号台風が九州南端をかすめ、四国から紀伊半島へ向かう。近畿圏が暴風圏に入った。

二六、七度以上の海水から蒸発する水蒸気を含む暖かい軽い空気が上昇して雲粒にかわる。台風はそのとき放出されるエネルギーで発達する。

暖かい水蒸気は軽く、上昇気流となつて勢いよく上空へ上つていく。地球の自転効果で渦を巻きだすと、周囲の空気が集まり、気圧が低下してい

く。海水温が高ければ高いほど、台風は急速に発達するのだ。

九月の半ばを過ぎても、日本列島周辺海域、ことに太平洋沿岸の海水温は低まる気配はなかった。フィリピンの東海上を北上するとき九二〇ヘクトパスカルあつた一〇号の中心気圧は日本近海へ入つても衰えることなく、さらに発達した。

中心の南東側三三〇キロ以内、北西側二五〇キロ以内が風速二五メートルの暴風域で、台風の雨雲は一二〇〇キロを超える。九州、四国を含め、ほぼ西日本全域と東日本の一部を覆いつくすものであつた。

雨雲に南から暖かくて湿った空気が吹き込み、日本各地で大雨を降らせていた。一〇号台風が日本列島を通過するまでに予想される雨量は、東海、関東、東北南部の太平洋岸で三五〇ミリと多く、近畿南部、甲信では三〇〇ミリ、東北南部の日本海側では二五〇ミリ、四国の太平洋岸では二〇〇ミリで、瀬戸内側でも一五〇ミリだ。近畿内陸部で一五〇ミリである。

これらの大雨は一時間に三〇ミリを超える集中豪雨タイプで、河川の急な増水や山崩れなど、洪水や土砂災害を引き起すおそれがあつた。

台風一〇号は相変わらず大阪湾に向かって北上しつづけているが、上空を吹いている偏西風に流され、上陸するまえに東へ向きを変えるかもしれない。

九鬼は台風一〇号から目を一二号、一二号へ転じる。

一二号、一二号は相前後してフィリピンの東の海上を通過し、一二号は沖繩に近づく。二つの台風は未だ合体する気配はなく、ときには同じ経路を辿ることがあつても、それぞれがほぼ独自の動きを保っていた。

一二号、一二号とも、フィリピンの東海上で急速に発達し、中心気圧はともに九一〇ヘクトパスカルに達し、目をもつ渦を巻いた巨大な雲を従え

ていた。日本近海の海水温は未だ三〇度を超している。日本列島に接近するときにはさらに発達しているかもしれないのだ。

彼は一一号、一二号の動きに注目した。彼は二つの台風が合体して超巨大台風となることを恐れた。だが両者が合体するのは時間の問題だった。

一一号と一二号の巨大な渦雲が接近して一部が重なり合っている。いずれか一方の中心気圧が大きくなれば小さい方を吸い寄せてしまうだろう。

一一号と一二号はまるで手を繋いでいるように見える。だが中心の目の間はかなり離れていた。彼はそのまま日本列島に上陸することなく、近くを通過してもそのまま北東の海上へ去っていくことを願った。

だが一一号は沖繩へ向かう途中で北東へ向きを変えた。一二号も追従する。このままでは合体して首都圏を襲うことだろう。

もし一一号と一二号が合体すれば、中心気圧が九〇〇ヘクトパスカルを割るかもしれない。だがそのような超巨大台風が日本列島に来襲すればどのような被害をおよぼすことになるのか。

豪雨、強風、突風、竜巻、高潮、高波が襲い、河川の増水、山崩れ、土砂崩れ、堤防決壊、防潮堤決壊、浸水、洪水、街路樹や電柱の倒壊、建造物の損傷や倒壊、家屋の流失、電気ガスや上下水道など各種ライフラインへの被害、交通通信運送など都市機能損壊、農地や家畜の流失、それに犠牲者、行方不明者、けが人などの人的被害など……、数えきれない被害が発生することだろう。

彼はただ一一号と一二号が合体することなく、日本列島からはずれて北太平洋へ消えて行くことを願うほかなかった。

24

「やはり、一一号か一二号は首都圏に上陸しそうかな」

佐々木教授が研究室に入ってきて、あたふたと九鬼の机に近づく。

「さあ、多分……」

彼は教授を見上げる。教授の小さな目は一層窪み、いつもと違い、かなりやつれて見える。教授もディスプレイでずうと台風の動きを追っていたのかもしれない。

テレビの天気予報では一一号と一二号の予想進路範囲を円で示しているが、予報円はまだかなり大きい。教授と彼の二人はそれぞれディスプレイに送られてくる衛星からの気象データをチェックし、台風の動きをテレビの天気予報よりも先回りして進路を予想しているのだ。

「多分、どっちかが首都圏を襲うだろうな……」

教授が大きな溜息をつく。

「どうかなさったのですか」

「うむ……、実は……」

佐橋祐子がまだヒロシを実家へ避難させていないという。

「そんな……」

「これからじゃ、無理だろうね」

何度も勧めたが、彼女はどうしても踏ん切りがつかなかったらしい。そうこうしているうちに、凄まじい豪雨の影響で各地の交通機関で運休や一時運行見合わせが続出した。JRの交通事情も悪化して東北新幹線も止まっていた。

秋の台風は足が早い。一〇号は紀伊半島の西端かすめて関西空港を直撃

して大阪堺市附近に上陸したあと、中部地方を縦断して東北南部をめざしている。台風の周囲と進む方向に雨雲が広がり、いたるところで一時間一〇〇ミリを超える猛烈な集中豪雨を降らせていたのだ。

「この雨じゃ、隅田川や江戸川、荒川などはほとんど危険水位に達する。場合によつては利根川の堤防も決壊する恐れすらある。あの辺は浸水しないのですか」

彼はデイスプレーに目を据えたまま、教授の顔を見ずに言う。

「あの辺は低地だから、海面が上がれば水浸しになるところだ。台風の高波が来れば、防潮堤は役に立たないだろうし、それに……」

彼はやはり教授が地震を心配しているのだと感じた。彼は口を閉じたまま、つづきを待った。

「……さつき、若い連中への電話のついでに、太平洋プレートの微震動のことを話したら、東海地震対策で周辺海底に張り巡らしてある地震計が微震動を捉えていたらしい。解析はまだだと言っていたが、やはり、日本列島周辺がおかしな状態にあると異口同音にいつていたが……」

教授は避難命令の件で関係機関にいる教え子たちに電話したときのことを話した。概要はこうだ。

微震動は太平洋プレートの西端に接するフィリピン海プレートでも生じており、このほうが若干荒い動きをしているらしい。

日本列島の太平洋側には海溝があつて、そこから太平洋プレートとフィリピン海プレートとが日本列島の下へ潜り込んでいる。フィリピン海プレートが潜り込んでいる海溝はトラフ（舟状海盆）という浅い海溝で、相模沖から四国沖まで日本列島に接する位置にある。これが相模トラフや南海トラフと呼ばれているのだ。ここからフィリピン海プレートが日本列島の下

へ潜り込んでいる。

微震動源はこれらのプレートが潜り込んだ深いところにあるらしい。

相模トラフや南海トラフ周辺は地震危険地帯で、これまで何回も巨大地震が発生していた。巨大地震はほぼ周期的に発生するが、最後の地震からしばらく時間が経っていたので、いつ巨大地震が発生してもおかしくない状況であつた。

現在、フィリピン海プレートの微震動が巨大地震の前兆かどうか検討しているとところだという。

「浸水して動けなくなるまえに、佐橋祐子さんたちは別のところへ避難した方がいいと思いますが……」

彼は教授の背を押す。

「……」  
教授はじつと彼の顔を見た。

「一号と二号は合体して、超巨大台風となるでしょう。超高層マンションを直撃しないとも限りません」

彼はさらに背を押す。

「……」

教授は口を閉ざしたままだ。しばらくして、ふいに背を向けた。

「ここで一号と二号をチェックしておりますから、向こうへ着いたら連絡していただけませんか」

彼は教授の背に向つて言いながら、研究室から黙って出て行く教授の後ろ姿が消えるまで見送った。だがなにかしら胸騒ぎを覚えて仕方がなかった。

一瞬、彼は教授を引き止めようと思ひ、腰を浮かしたが、なぜか思いとどまってしまった。

しばらくして、廊下に出てみたが、すでに教授の姿はなかった。

25

「お客さん、あの埋立地ですか。あの辺には昔からの古い家屋も残っていて懐かしいところですが、いま降っている大雨で一部に浸水箇所があるようで、近くまでいけるかどうか……」

初老の実直そうな運転手だった。

「行けるところまで行ってください」

佐々木は大学の構内から出ると、しばらく歩道を歩き、校門から離れたところで、タクシーを拾った。まだ大学附近では雨が降ってなかったので、地下鉄にしようかと思った。だがこのまへのように途中でまた運行中止となることを恐れ、タクシーにしたのだった。

佐々木には佐橋祐子を説得できるか自信がなかった。結局黙ってそばにいたことになるかもしれない。かといって、彼女のところへ行かないでおれなかった。九鬼に背中を押されるようにして出てきたが、彼女がまだヒロシを避難させないでいると知ったときから飛んでいきたいと思っていたのだった。

倒壊の恐れのある超高層マンションからヒロシをなんとかしても避難させなかった。ヒロシだけはない。母親の祐子をも無理やりでも避難させたい。

佐々木は水のなかに取り残された超高層マンションのなかに閉じ込められ、助けを求める母と子を想像する。そのとき、巨大地震が襲えばどうなるか。

直下型巨大地震であれば、激震に襲われ、液状化で倒壊はまぬかれまい。遠く離れた遠方地震でも長周期地震動が襲う。超高層マンションは共振で大きく揺れ、屋上の塔屋にある実験室は時化の海に漂う小舟のようになるだろう。窓ガラスは砕け、壁は落ち、家具は飛びまわる。人は投げ飛ばされ、壁に打ち付けられるにちがいない。

「お客さん、もう先はムリです」

激しい雨はつづいている。前方に超高層マンションが霞んでいた。

道路が冠水し、河となっている。下水道の容量を超えて処理しきれなくなった雨水がマンホールから噴き出し、路面に広がり流れているのだ。

佐々木は迷った。靴を履いたまま水中に降りるか、それとも裸足になるか。通り過ぎていく車が水しぶきを上げていく。水深は数センチ程あるのだろうか。彼はそれを見て、靴を履いたまま、ズボンの裾だけをたくし上げ、タクシーを降りた。

大粒の雨粒が叩き付ける。傘を差そうが、ズボンの裾をたくし上げようが、なんら効果がなかった。佐々木はすぐ全身びしょ濡れになった。

靴のなかにすぐ水が入ってきた。彼はかまわず超高層マンションをめざす。数センチかと思った水深が進むほどに深まっていく。彼にもなぜタクシーの運転手がムリだと言ったのか、その訳がようやく分かった。

道路が低地に向かって下っているらしい。進めば進むほど水嵩が増していく。水深は膝に達した。靴が脱げそうになる。

佐橋祐子を避難するように説得できたとしても、この洪水ではどこへも避難させることはできない。彼は一端戻って、濡れた服を着替えて出直そうかと思った。

後ろを振り向き、乗ってきたタクシーを探した。辺りは雨に霞んでよく

見通せないが、タクシーらしい影はどこにも見当たらなかった。

雨は凄まじい勢いで降っている。水嵩が増してくる。彼は洪水のなかにひとり取り残されたまま、前へ進むことも後退することもできずにいた。につちもさつちもいかなかった。

「もしもし、大丈夫ですか。堤防が決壊しそうです。その先は危険です。早く、引き返して下さい」

スピーカーの音がするほうに点滅するハザードランプが見える。黄色のヘルメットに黄色の合羽を身にまとったふたりの男が近づいてくる。見回りをしている消防士たちだった。

「避難命令が出ているのですか」

「まだですが、もうじき出るでしょう。河川の水位が急上昇していますから。すでに、自主的な避難がはじまっていますよ」

「避難所はどこですか」

「この辺は向こうの公民館です」

「あの超高層マンションの住民も避難していますか」

「え？ あのマンションなら二階以上へ逃げれば大丈夫でしょう」

「地震が来てですか」

「地震？ いや、洪水じゃないんですか」

近づいてきた消防士が彼の手を掴んだ。水は大股に達していた。

「どうしても、あのマンションへ行きたいのです」

「危険です。歩いては行けません。水が引くまで、こちらの避難所ですしばらく待って下さい」

佐々木は消防士に手を引かれるままにまかせて数歩足を運んだ。そのとき、足になにかが絡んだ。彼は手を解き、屈み込む。

一瞬、佐橋祐子とヒロシの顔が浮かんだ。

彼はふたたび超高層マンションに向かって全力で前進をはじめた。後ろで消防士の声がした。

水が大股を濡らし、腰に達した。かまわず、彼は先へ進んで行く。

26

大阪に上陸した一〇号が急に東に向きを変えると、太平洋岸寄りを中部地方から関東地方へと進み、それから東北東へ向きを変えて東北南部を抜け、超スピードで日本列島を縦断した。

一〇号の動きに引き摺られ、一一号、二二号が日本列島に急接近する。巨大な雨雲が日本列島の上空を覆い、各地にふたたび集中豪雨をもたらす。

各地で、洪水や山崩れが起きた。一〇号のときの大雨につづいてふたたび豪雨が襲い、増水していた河川に大量の水が流れ込んだ。すでに水分をたっぷり含んで土砂崩れが起きやすくなっているところに再度の豪雨が追い討ちをかけたのだ。

都市部でも一時間一〇〇ミリを超える集中豪雨で、いたるところで浸水や崖崩れが発生した。だがこれらはいわば前哨戦に過ぎなかった。

一一号と二二号が奇妙な行動に出る。

日本列島に接近するにしたがい、一一号はあとを追いつける一二号よりも若干勢力が弱まる。中心気圧が九一〇ヘクトパスカルから九二〇ヘクトパスカルとなる。

あとを追いつけていた一二号が幾分東寄りに向きを変える。すると日本

列島を目前にしていた一一号がさらに東へ寄って行ったのだ。

一一号は一瞬、上陸を躊躇っているように動きを止める。そこへ一二号がやってきて、両者が手を取り合って進むかと思えたが、やがて合体して中心気圧九〇〇ヘクトパスカルの超巨大台風となった。それはまるで一一号が一二号を待ち伏せして、一二号へすり寄り、その懐に飛び込んでいったようだった。

超巨大台風はゆっくり北東へ移動し、日本列島へ接近していた。このまま進むと、夕方から夜にかけて伊豆半島から房総半島の間を通り抜け、首都圏を窺うことだろう。

風速二五メートルの暴風域が広大で、中心の南東側五〇〇キロ、北西側四〇〇キロにおよんでおり、直撃されなくとも各地で甚大な被害が生じる可能性があった。台風の雨雲はすでに日本列島全域を覆いつくし、各地に集中豪雨をもたらしていた。

超巨大台風が接近している日本列島太平洋岸の各地では猛烈な風が吹き出した。海は時化て、太平洋岸のいたるところに大波が打ち寄せていた。超巨大台風がどこに上陸しても被害は免かれるところはないだろう。

超巨大台風が刻々と日本列島に近づく。

九鬼はディスプレイで超巨大台風となった一二号を追った。日本列島、それも首都圏に近いところの上陸することは分かっていた。もはや超巨大台風を追い回すこともなかった。だが彼は超巨大台風から目を話すことができなかつた。目は執拗に超巨大台風を追いながら、頭のなかでは別のことを考えていた。

教授は無事超高層マンションへたどり着いただろうか。佐橋祐子を説得できただろうか。

彼は机から立ち上がると、テレビのスイッチを入れた。どのチャンネルも台風情報を流している。

彼はふと、超巨大台風が三浦半島をかすめ、東京湾に入って超高層マンションを直撃するコースをとるのではないかと思った。あるいはもしかしたら、三浦半島に上陸した超巨大台風はそのまま都心をめざし、東京のど真ん中を抜けていくかもしれない。

どんなコースを辿ろうと、超巨大台風が通過する周辺地域では猛烈な竜巻や瞬間風速一〇〇メートルを超える突風が発生するだろう。

潮位が気になった。彼はふたたび机に戻り、ディスプレイを覗く。超巨大台風の上陸と東京湾の満潮時が重なりそうだった。

海水温の高まりとともに、海水が膨張しており、潮位はいつもより高かった。そこに超巨大台風の低い気圧による吸い上げ効果が作用する。これに満潮による潮位上昇が重なる。さらに、瞬間風速一〇〇メートルの猛烈な風による数メートルから一〇数メートルを超える大波か、あるいはさらに大きな巨大大波が加わるのだ。

彼は素早く計算して、超巨大台風が上陸する前後には潮位が一〇メートルを軽く超えることを確認した。

防潮堤を越えて大量の海水が流入すれば、豪雨で危険水位を超えてようやく持ちこたえている河川堤防もひとたまりもなく決壊するにちがいない。こうなれば東京のゼロメートル地帯はおろか、首都圏一帯に洪水が広がり、関東平野の低地は冠水をまぬかれないだろう。

彼は教授からの電話を待った。だがいくら待っても連絡がなかった。

超高層マンションがしなるような感じがした。夕方の残光のなかで、突然窓ガラスがビリビリと鳴った。一面にヒビが走った。

佐橋祐子は急いでソファで寝ているヒロシを起こし、ドアへ向かった。つぎの瞬間、ビューという物凄い音とともに、突風が吹き込んだ。ガラスの小破片が飛び散った。ノブを回しかけていた外開きのドアが勢いよく開いた。

廊下の蛍光灯が消えていた。彼女はヒロシを抱え、廊下の隅にうずくまる。開放したままのドアから強風が吹き込む。

彼女はなにが起きたのか、一瞬理解できなかった。割れるはずのない窓ガラスが粉々に砕け散った。彼女はヒロシを固く抱き締め、開いているドアから洩れてくる薄暗い光に目をやり、必死に頭をめぐらす。

「ママ、苦しい……」

ヒロシが腕のなかでもがく。

廊下の非常灯が点る。彼女はエレベーターに気付き、立ち上がる。とにかく、六階の自室に戻ろうと思った。

いくらボタンを押しても反応はなく、エレベーターは動かなかった。非常階段を探した。非常階段には階ごとにドアを付け、壁のなかに隠すように設置してある。彼女はヒロシの手を引き、非常灯だけの薄明かりのなかをおさるおさる下りて行く。

薄暗い非常階段のなかには暴風の吹きすさぶ音はなく、無音の世界だった。それがまた薄気味悪い。彼女は早く下りて行きたかった。だがヒロシは階段を一步一步下りて行くことしかできない。

「ママ、まだなの。疲れた……」

夢中で階段を下りてきたが、彼女の膝がガクガクと踊りだしていた。

「ヒロシ、少し、休もうか」

かなり下りてきたかと思っていたのに、非常階段の壁の表示には四〇階とあった。これを見て、彼女はヒロシより先に階段の端に腰を下ろしてしまふ。六階の自室までにはもう何段あるのか。これまで下りてきた階段の倍以上の階段を下りなければならぬのか。彼女はうんざりしてした。

ヒロシは母親の隣に座り、小さな身体を寄せる。ヒロシを連れてきたことを後悔した。彼女は壁に寄りかかり、左腕をヒロシに回し、目を閉じた。ふたりはそのまま眠り込んでしまった。

超巨大台風一二号は広い暴風域をとめない伊豆半島から房総半島をめざして、日本列島へゆつくり近づく。瞬間風速二五メートルを超える暴風域は東海、関東、東北南部全域におよんだ。相模湾や東京湾ではすでに一〇〇メートルを超える最大瞬間風速を記録していた。

超巨大台風一二号は上陸準備が整ったらしく、巨大な渦雲を従え、三浦半島をかすめ、東京湾へ進入した。まるで満潮時に合わせるように、一端動きを止め、足踏みをはじめた。中心気圧は依然として九〇〇ヘクトパスカルの巨大勢力だ。

東京湾の海水が盛り上がり、沸き立つように飛び散る。高波が生じ、満潮時の潮位をさらに上げた。

超巨大台風一二号はのろのろと北上をはじめた。東京湾を都心めざして進む。

風がうなりを立てる。海水面から海水が吸い上げられ、飛沫を上げる。

大粒の雨粒が水平に飛ぶ。

超巨大台風は通り道にある大小さまざまな障害物を執拗に攻撃し、軒並み破壊し、餌食にして吹き抜けていくのだ。

送電鉄塔を折り曲げ、岸壁に係留してある小型船や中型船を揺らす。転覆して船腹を見せている船舶を押し流し、岸壁に打ちつける。大型コンテナを吹き飛ばし、飛散させ、クレーンをも叩き付けていく。

超高層、高層、低層のビルを揺るがし、壁面を叩く。看板やトタン、瓦、屋根を舞い上げ、家屋を飛ばす。

電柱や街路樹をドミノ倒しにする。列車やバス、トラックを横転させ、中小の自動車を吹き飛ばす。

超巨大台風の高波が防潮堤を襲った。巨大な大波が防潮堤や水門を飛び越える。防潮堤の内側にはゼロメートル地帯や低地が広がっている。大量の海水がゼロメートル地帯に侵入する。大波の攻撃に防潮堤も力つき、決壊した。海水が一気に流れ込んだ。

ゼロメートル地帯を流れている河川はゼロメートルより数メートルを超える高いところを流れている天井川だ。すでに集中豪雨で危険水位に達し、堤防の決壊の恐れがあったところに海水が流れ込んだ。河川堤防は内側からえぐられ、ひとたまりもなく決壊した。

大量の海水と河川水が低地に流れ込む。洪水は都心にも広がり、低いところ求めて流れ広がる。水は都市のさまざまな地下施設に流れ込み、一気に水没してしまふ。

大都市東京は関東平野の低地に広がる。上陸した超巨大台風は東京の隅々まで水運び、洪水都市東京をつくり出す。

超巨大台風一二号は東京に上陸すると、急速に衰えた。そして向きを東

北東へ変え、大太平洋へ抜けていった。

28

「あれは……、地鳴りか……」

九鬼は耳を澄ます。地の底から唸るような重い低音が洩れてくる。超巨大台風は去った。だがこれで終わりではなかった。

東京を襲った洪水は引く気配がなかった。満潮から干潮へ転じ、引き潮になっても、なぜか東京湾の潮位は大きく下がることがなかった。一端引いた潮がふたたび押し寄せ、海水は決壊した防潮堤を抜け、ゼロメートル地帯や低地へ侵入する。それに東京湾に注いでいる天井川の決壊した堤防からも大量の濁流が流れ込んでいくのだ。

東京の江東区、墨田区から荒川区、足立区、江戸川区などに広がるゼロメートル地帯はもちろん、中央区、大田区などの海拔二、三メートル足らずの低地一帯にも洪水が広がり、一面に満々たる水をたたえる水面がそのまま残っていた。

無気味な地鳴りが響く。

電話が鳴った。一瞬、電話のベルを地鳴りと錯覚し、彼は身を引く。錯覚に気付く、彼は受話器に手を伸ばす。

「大太平洋プレートの動きが変だ」

アンダーソンだった。微震動が急に不規則になったという。

「巨大地震の前触れか」

「分からない。フィリピン海プレートはどうか。データが欲しい」

日本では予想される巨大地震に備えて、フィリピン海プレートにある日本列島よりの相模トラフや南海トラフに数多くの海底地震計を設置している。大平洋プレートの動きを分析するために、フィリピン海プレートのデータが欲しいらしい。

「至急手配するけど、海底でなが起きているのか。大分前から地鳴りがしていたらしいが……」

「地鳴りか……」

「そうだ」

「だとすると……」

アンダーソンは口を閉ざしたのか、声が消え、しばらく無言がつづいた。

「どうした」

彼はせっつく。

「海底地震の専門家が、彼はピーターソンと同じところから派遣されている奴だが、大規模な地滑りが海底で起きているかもしれないと言っていた……」

フィリピン海プレートのデータを欲しがっているのはその海底地震の専門家だという。大平洋プレートの動きから判断すると、海底地滑りの速度は極めて緩慢であるようだが、それだけに地滑りが広範囲にわたって起きているらしいのだ。

「日本列島も巻き込まれる恐れがあるということか……」

「日本列島全域か、それともフィリピン海プレートと関係する一部の地域か、その範囲はいまのところ分からないが、可能性は否定できないらしい」「スピードは……」

「微震動のデータから計算したところ、極めて緩慢で、ゆっくり沈下して

いるらしい。年数センチメートル程度か」

「日本列島が毎年数センチづつ沈下するということか」

「……」

「それともこれは巨大地震の前触れにすぎないのか」

「フィリピン海プレートのデータが揃えば詳細が分かるかもしれない」

「データは手配するから、なにか分かったら知らせてくれ」

電話が切れても、彼は受話器を耳に付けたまま考え込む。

横須賀に基地を持ち、原子力空母を入港させている米軍が附近の海底の様子に関心を持つのは当然としても、当の日本の動きが鈍いのはどうしたことか。東海地震、東南海地震、南海地震といった海溝性巨大地震、それに関東直下地震など、いつきてもおかしくないと喧伝されているもの、日本列島が毎年数センチづつ沈下することに気付いていないとはどういうことか。それともこんなことには関係者はとっくのむかしに気付いていて、知らないのは自分だけなのか。

これまで地球温暖化ばかりに気を取られ、それも急激な気候変動の予測にころを奪われてきた。そして急激な気候変動の予測も手の届くところまできた。そう思ったのもつかの間、地球は先回りして先へ進んでいたのだ。

そしていま、そんな男をあざ笑うように、微震動を繰り返し、日本列島を沈下させはじめているのだ。

彼は自分を笑いたかった。彼は鼻先に自嘲の笑みを浮かべながら、静かに受話器をもとに戻した。

## 第四章

29

「佐々木先生はどこへ雲隠れしたんですか」

M新聞の佐藤記者が突然現れた。教授に今回首都圏を襲った超巨大台風について聞きたいことがあるという。

「そのうち、姿を現わすでしょう、先生のことだから……」

九鬼は超高層マンションを思い浮かべた。

「そうですね」

佐藤は全然疑念を持っていないらしい。

「そろそろ……現れるでしょう」

彼は教授が姿を現してもいいころだと思っていたところだった。それにして教授はなぜ連絡してこないのか。

「ところで、先生、どうして洪水が引かないんですかね。これは潮位がいつもより高いということでしょ。なぜですか」

佐藤は小作りの顔を突き出し、光る目で九鬼の顔をじつと見る。なにかを嗅ぎつけ、明解な回答を求めている目だ。

超巨大台風が去ってから、三日が過ぎていたが、まだ洪水が引いていなかった。海拔ゼロメートルより高いところでは干潮時になると水が引いて地面が露出するところもあったが、潮が満ちてくると水が滲み出るように地面が濡れだし、いつのまにか浸水しているのだ。

堤防が決壊した河川付近では洪水がつづいていた。床上浸水でいままも水

浸しの状態にある家屋は近畿圏や中部圏にも数多くあったが、首都圏は飛び抜けて多かった。東京都の足立区、葛飾区、江戸川区、墨田区、江東区などのほかに、千葉県の浦安、市川市行徳、船橋市に広がり、ゼロメートル地帯だけで数十万戸はあるという。

避難所が設けられたものの、いたるところが避難民で溢れていた。それでも避難所へ行くことができずに、マンションの二階以上の階層にはもちろん、水浸しの家の二階や三階に留まっている被災者も数多くいた。

洪水のなかに孤立した住宅に取り残された被災者の救出が消防士や自衛隊員らにボランティアが加わってつづいているが、数があまりにも多かった。首都圏だけで、犠牲者行方不明者を合わせると一万人を超え、家屋の浸水等による被災者数は二〇〇万人におよんだ。

今回の台風がもたらした洪水被害は一〇号がもたらした雨雲に加え、超巨大台風の雨雲が重なり、広い範囲にわたって襲った一時間数一〇ミリから一〇〇ミリを超える集中豪雨によるものだった。

豪雨は各地で山崩れや土砂崩れを起こして道路を破壊し、河川を押しつぶした。増水した河川では濁流が橋梁を流し、堤防を決壊させた。

「なぜか、潮位が大潮のような状態だ」

超巨大台風の最大瞬間風速が一〇〇メートルを超えた強烈な風と関係しているのだろうか。巨大台風とともに、凄まじい南風が吹き捲くり、短時間に大量の大气が南から北へ移動したのだ。大量の大气移動があとを引いているのだろうか。

それとも地球上の水床や氷河の溶解のほかに、海水温の高温化による水の膨張によって水嵩を増した海水が超巨大台風によって引き寄せられ、日本近海の海面が上昇してしまったのだろうか。

いずれにせよ、東京湾の潮位が高まっているのだ。そのため、水はけが悪くなり、河川水や洪水が海へ流れていかず、滞水してしまっているのだ。

彼はふとプレートの微震動となにか関係があるのではないかと思った。だがなにが関係していると分からなかった。

「こんな状態がいつまでつづくんですかね。決壊した河川堤防の復旧工事をやって早急に河川水の流入を止めても、潮位が高いままでは洪水を解消することができないだろうし……、防潮堤の補修も併せて進めないといつまでも洪水状態がつづくということになるのか」

決壊した河川堤防や防潮堤の復旧工事ははじまっていた。何台もポンプを設置して洪水の排水作業も進められていた。だが、復旧が思うように進捗していないのだ。

「復旧工事はエンドレスの仕事になるかもしれない」

彼は呟く。

「なんですって……、それはどういうことですか」

佐藤は大きな声を出した。

「もしかしたら、東京が沈み出しているのかもしれないからだ」

「東京が沈んでいる？ まさか『日本沈没』じゃないんでしょうね……」

「フィクションじゃない。東京だけじゃなく、首都圏、中部圏、近畿圏など、日本の中枢都市が連なる太平洋沿岸一帯が沈みはじめているかもしれない。洪水が引かないのは、もしかしたら、海面や潮位が高くなったのではなく、土地の方が沈みだしているからかもしれない」

彼は地震のことはなにも知らなかった。気候変動のことだけしか知らない。だから、微震動のことはできるだけ口にしたくなかった。だが洪水がいつまでも引かない原因を詮索しているうちに、アンダーソンが指摘して

いたことが頭に浮かび、口を滑らしてしまったのだ。

というより、彼はとつさに佐藤にこのことについて日本の専門家への調査取材を促したいと思ったのだ。

「……………」

佐藤は口を開けたまま、唾然として彼をじっと見ている。

「佐藤さん、日本列島近辺の太平洋プレートとフィリピン海プレートで微震動がつつづいているのですよ。地震の専門家がどう考えているのか、一度、徹底的に調べてみてくれませんか。専門家ははつきりメカニズムが分からないと、たとえなにかを感じ取っていても、なかなか口に出さないものですから」

彼はアンダーソンが言っていたことを詳しく話した。

「まだ、よく分かっていないというのですね」

佐藤は幾分安堵したように大きく息を吐く。

日本列島近辺のプレートで微震動が発生しているといっても、発生源すら明確に特定できていなかった。だが無気味な微震動がつつづいているのだ。

ただ日本列島太平洋岸に迫っている日本海溝や相模トラフ、南海トラフなどから海のプレート（太平洋プレートやフィリピン海プレート）が日本列島が乗っている陸のプレート（ユーラシアプレート、北アメリカプレート）の下へ奥深く潜り込んでいくのだ。海はプレートは陸のプレートを引き摺るようにして潜り込んでいくのだ。潜り込む際、プレートの上部接触面である上層部には圧縮する力が生じ、一方、プレート下部の下層部では引く張る力を受けているらしいという。これらの力が歪みを生みだし、歪みが限界に達して元へ戻ろうと跳ね上がるとき、巨大地震が発生するのだ。微震動がその前兆なのか。

彼は腰を浮かしかけている佐藤の顔を覗きながら、ふと、大気大循環の乱れから自転速度が変化すれば、それに伴い、海流の流向や流量にも影響が出るにちがいないと思った。洪水が引かないのは、自転速度が遅くなつたために、赤道付近の海水が中緯度の日本列島附近に向つて流れ込み、いつもより海面が盛り上がり、潮位が上がっているからかもしれない。でもなぜ微震動が生じるのか。

地球の自転速度が変われば、地球内部のマントルの動きに影響が出る。自転速度が遅くなれば、どろどろのマントルがいままでとは逆に向きを変え、赤道方向から極方向へ流れだし、新たな動きをはじめ。もしかしたら、このマントルの新たな動きが海と陸のプレートの下層部とマントルの接面にこれまでとは違った力をおよぼし出しているのではないか。これが微震動をもたらしているのではあるまいか。

そのとき、彼の脳裏に、急に生じたマントルの流れの逆転によって地殻の裏側の奥深いところに巨大な空隙が形成され、そこへ向かつて引きずり込まれていく日本列島が浮かんだ。

30

「佐々木先生がどこにいらつしやるか、ご存知ありませんか」

受話器の奥から、佐橋祐子の切羽詰まった声が出た。

「え？ ご一緒じゃなかったんですか」

九鬼は驚きの声で応じる。彼はいまのいままで、教授は超高層マンションにいてと思ひ込んでいたのだ。教授がいまだに姿を見せないのは超高層

マンションが洪水のなかに取り残され、出たくとも出られないからだばかり考えていた。

彼は彼女に一部始終を話した。

「あの豪雨のなかを……」

彼女は声を詰まらせ、それ以上にも言わない。

彼女が落ち着くのを待つて、ようやく避難しているという臨時の避難場所を聞きだすと、彼は研究室を飛び出した。

「佐々木先生の行方はまだ分かりませんか……」

佐橋祐子は九鬼を認めると、ヒロシの手を引いて、走り寄ってきた。

臨時の避難場所は小高い丘の公園内に設けられたテント村だった。彼女は超高層マンションから着の身着のまま救出されてから今日までテント村で過していたが、台風の被害を受けた新幹線が復旧し次第、実家へ帰るつもりでいた。

その前に、必要なものを取りに一度マンションへ戻りたいと思っていたが、水浸しになった超高層マンションにはいまだ立ち入ることができず、困つて佐々木教授に連絡したという。

九鬼はとりあえず、佐橋祐子とヒロシを自分のマンションに連れて帰つた。着の身着のままの不便を思い、新幹線が復旧するまでここに留まつてもらおうと考えたのだった。その間に、教授を探し出したり、超高層マンションへの立ち入りもできるようになるかもしれない。

彼は大学の研究室に入り浸る毎日、2LDKのマンションには母とアキラが使っていた和室が空いたままになっていた。佐橋祐子とヒロシは避難生活に疲れていたらしく、横になるとそのまま眠り込んでしまった。

彼は必要なものを整え、書き置きして、研究室に戻った。

31

「先生、どこへいらしていたんですか。何度も電話したんですが……」

九鬼が研究室のドアを開けると、電話が鳴っていた。佐々木教授からかと思いい、急いで受話器を取る。佐藤だった。受話器の向こうで口を尖らしているのが目に見えるようだった。

「教授を探しに行っていたんだが……」

彼は曖昧に応える。

「どこへですか」

「うん、ゼロメートル地帯……」

「ゼロメートル地帯ですか。ところで、先生が言っておられたプレートの特徴のことですか、連中はまえから気付いていましたよ」

「それで……」

佐藤に先を促すと、すぐには応じず、これから研究室へ何うという。

彼は受話器を戻すと、椅子に深々と腰を下ろした。頭の芯が妙に怠い。

彼はこのまま眠りたかった。

彼は目を閉じた。眠りから覚めて目を開けたとき、目の前にいつものような顔をした教授が立っていればいいのと思いつながら、深い眠りに落ちていった。

「九鬼先生……」

耳元で名を呼ばれ、彼は目を覚ます。薄目で辺りを見回す。一度開いた

目をふたたび閉じる。

「……佐々木先生らしいひとを乗せたというタクシー運転手を見付けましたよ」

佐藤は九鬼の前に身を乗り出し、大声を出した。

「……………」

何分眠っていただろうか。彼は半透明の意識のなかで、ぼんやりと目の前で口を動かしている男を眺めた。男の顔が一瞬佐々木教授の顔となった。目を大きく開けた途端に、佐藤の顔が変わる。

「その運転手が言うには、佐々木先生は冠水した道路をどんどん進んでいったらしい。先生はどこへなにをしに出掛けたのですか」

ふいに、彼の脳裏にあのときの状況が浮かんだ。彼は教授の背を押して豪雨のなかへ送り出し、佐橋祐子の住む超高層マンションへと向寄せたのだ。彼女にヒロシの避難を勧めたのに、彼女がなぜ躊躇しているのを知って、説得しに行ったのだった。

もしあのとき教授が電話しなければ、ヒロシが避難していないことを知らずいただろう。もし佐橋祐子がヒロシを連れて実家へ行っていたら、再度大雨のなかを説得に出掛けることもなかったのだ。

彼は教授を引き止めるべきではなかったのかと思った。大雨が降り、洪水の危険を予知していたのに、なぜ、逆に教授の背を押してしまったのか。

「……………」

彼は口を開くことができなかった。口を開けば、教授の行方不明が現実となり、悔いが突いて出そうと恐かった。教授はきつと戻ってくる。熱波に襲われたときのように、突然研究室に姿を現すはずだ。

小柄な佐藤は鋭い目をして、じつと九鬼の顔を覗き込んでいる。彼は目

をそむけ、いまにも荒れ狂いそうな胸の中のさざ波にじつと堪えながら、強烈な鋭い視線を耐えていた。

「先生は消防士の制止を振り切つて、腰まで達していた洪水の中を進んでいったそうです。タクシーの運転手には超高層マンションへ行きたいと言つていたらしいですが、ムリだったので途中で降りてもらつたそうです。なぜ、豪雨のなかを危険を顧みず、超高層マンションへ出掛けたのですか」

「……………」

彼は目をそむけ、佐藤の視線に耐えた。

「まあ、いいや。人違いだったかもしれない。あのとぎのように、佐々木先生はまたひよこり現れるかもしれないよね」

いつまでも口を開こうとしない九鬼に業を煮やしたのか、佐藤はぼつんと独り言のように言うと、「プレートの微震動のことだけど……………」と話題を変える。

佐藤は政府や大学などの地震に関する研究機関や関係する地震学者に片っ端しから取材したという。

日本列島には海溝型巨大地震である東海地震、これに連動するおそれのある東南海地震や南海地震の発生が間近に迫っていると指摘されているせいか、太平洋プレートやフィリピン海プレートの動きについては関心が高く、すでに微震動の観測データや情報は伝わっていた。だが解釈や見解はまちまちだった。

日本列島付近にはプレートが入り込んで、複雑な構造となっている。日本列島はほぼ中央で東日本は北アメリカプレートに、西日本はユーラシアプレートに乗っており、海から太平洋プレートとフィリピン海プレートが迫り、太平洋側にある海溝やトラフ（浅い海溝である舟状海盆）から日本

列島の下へ潜り込んでいる。

プレートは海溝から潜り込むが、東日本の太平洋側には北から千島海溝、日本海溝、伊豆小笠原海溝があつて、これに沿うように太平洋プレートの先端が日本列島からフィリピン海へ向い、ここから北アメリカプレートやフィリピン海プレートの下へ潜り込んでいるのだ。北アメリカプレートには東日本と西日本の一部を乗っており、フィリピン海プレートが潜り込んでいるユーラシアプレートには西日本が乗っている。フィリピン海プレートには東側から太平洋プレートが潜り込んでいるが、北側先端で西日本前面に連なる相模、駿河、南海の各トラフ（浅い海溝）や琉球海溝から日本列島の下へ潜り込む。フィリピン海プレートは伊豆小笠原海溝から太平洋プレートに潜り込まれながら、相模、駿河、南海の各トラフからユーラシアプレートの乗っている西日本の下へ潜り込んでいるのだ。

西日本で発生が予想されている東海地震、東南海地震、南海地震といった海溝性巨大地震は、陸のユーラシアプレートと海のフィリピン海プレートがぶつかり合っている境界部で起こる。東海地震は駿河トラフ、東南海地震と南海地震は南海トラフで発生が予想されている地震だ。

大方の意見は、フィリピン海プレートの微震動の震源はこれらの巨大地震の震源付近らしいので、もしかしたら巨大地震の前兆かもしれないが、そう言いきれぬデータが少なく、もうしばらく様子を見極めたほうがよいというものだった。

これに対して、全然別の説を唱える研究者がいたという。これは「第四のプレート」という新しい説に基づくものであつたが、関東平野が乗っているプレート構造から考えて、微震動は単なる前兆ではなく、すでに地震がはじまっている証拠だというのだ。この「第四のプレート」説とは、北

アメリカプレートに乗っている関東平野はその下に南側からフィリピン海プレートとその下に東側から太平洋プレートが潜り込むという三重構造になっていると思われるのに対して、関東平野がこれらの三つのプレートの「欠片」からできた「第四のプレート」に乗っているというものであった。

「まだ沈下の観測はされていないということか、それとも広い範囲で……」

九鬼にはよく理解できないことがあった。アンダーソンはすでに沈下が始まっているといつているのに、日本にはまだ沈下の観測データがないというし、予想される巨大地震の震源以外の太平洋プレートでも微震動が起きてるのはなぜか。太平洋プレートでも微震動があったり、沈下の観測ができないのは、地震がすではじまっているものの、日本列島の広範囲にわたって影響が広がり、全体が沈下し出しているからではないのか。もしかすると、「第四のプレート」説のように、関東平野全体の沈下がはじまっているのかもしれない。

「地殻の沈下が始まっているというのですか」

佐藤の目に不安な色が浮かぶ。

「分からない。だがなにかがはじまっていることは確かだが……」

彼はふと、フィリピン海を北上していた一一号と二二号台風がそれぞれ中部圏と首都圏に上陸すると予想していたのに、日本列島に接近して急に合体して超巨大台風となったことを思い出していた。ふたつの台風が日本列島に近づくまで合体しようとしなかったのに、なぜ上陸寸前に急に合体したのだろうか。そして上陸後急に進行方向を変えて日本（関東平野）から離れていったのはなぜか。

「……佐々木教授を乗せたタクシーとはすぐ連絡が取れますか。これから

先生を探しに行きます。ついでに洪水の状況や辺りの様子も見てきますが、一緒に行きますか。地殻の沈下が発生していれば、なんらかの現象が生じているでしょう」

彼にはゼロメートル地帯から洪水が引かないのは潮位が急上昇したとしか考えられなかった。だがすでに関東平野の沈下が始まっているのかもしれない。超巨大台風が急に方向転換したのもそれとならかの関係があるような気がした。

彼は現に沈下が始まっているのか、どうしても自分の目で確かめたいと思ったのだった。

## 32

九鬼は佐藤と連れ立って、研究室を出た。教授を探しに行くといったが、彼にはなんの当てもなかった。どんな現実が待っているのか、なんとなく恐かった。行方不明のままのほうがまだ希望もてる。彼は迷った。だが地震による沈下が始まっているのか知りたかった。

大学の正門を出たところで、タクシーが待っていた。

初老の運転手は佐々木教授のことを「窪んだ目のお客さんですね」と愛想よく言い、大雨の日のことをよく憶えていた。

「道路だけは片付けられて通れるようになったのですが、途中にまだ水が引いていないところもあるので、あの日と全く同じところを通ることはできないかもしれませんがいいですか」

運転手は日焼けした実直そうな顔に笑みを浮かべ、あの日の道順を思い

出しながら、超高層マンションの建つ埋め立て地へ向う。

九鬼は車窓に釘付けになっていた。超巨大台風に襲われた無残な街があった。

ところどころで交通止めにあつた。道路には泥が寄せられ、山になつて  
いる。その度に迂回させられ、車は低層の住宅が並ぶ通りに入る。

街路樹や電柱が倒れ、樹木の枝や葉は千切れて散つていく。破壊された  
家屋の残骸がつづく。竜巻や突風に襲われたのか、窓ガラスが破れ、屋根  
が飛ばされ、辛うじて僅かな壁だけが残つていた。床上浸水を被つた被災  
家屋から水に浸かり泥まみれになつた家具や電器製品が持ちだされ、いた  
るところに山積みになつて捨てられている。窓を開けると、一面に腐敗臭  
が漂つていた。

水は引いたものの、道路には泥が残り、水溜まりもあつた。車が通るた  
びに、土ぼこりや溜まり水を飛び散らす。

九月の半ばとはいえ、まだまだ残暑が厳しかった。

水溜まりが蚊を大量発生させる。蚊は熱帯地方の伝染病だつた Dengue 熱  
やマラリアを媒介するのだ。冠水地帯の衛生状態が極度に悪化していった。

車は住宅街を通り抜け、大小のビルが建ち並ぶ表通りに入る。

商店街はシャッターを下ろしたまま。看板が散乱し、窓のガラスが割  
れたまま。ガラスの落ちた窓からカーテンやブラインドの端が外へ飛び  
だし、風に揺られている。道路端に濡れた泥まみれの畳や家具などのゴミ  
の山が築かれている。ゴミの山はいたるところにあつた。

「お客さんが降りたのはこの辺でしたが……」

初老の運転手が振りむく。

「橋を下りて向こうへ歩いていったのです」

運転手はタクシーを降りた九鬼と佐藤に指を差して方向を示す。そして  
去つていった。

橋の向こうに埋立地が広がっている。その埋め立て地は古く、戦前から  
の家並みも一部に残っているが、いまではマンション用やオフィス用の超  
高層ビルが建ち並ぶ。

東京湾の浚渫土砂で埋め立てられた土地は周囲を防潮堤を兼ねた道路で  
囲まれているものの、いまだに水浸しのままのところがあつた。潮位が上  
昇しているのか、水はけが悪いのだ。

「佐々木教授が向つたのはあの超高層マンションですかね」

海岸辺りにひととき高い超高層マンションが建っている。二人は通行止  
めの標識を避け、乾いている道路を探して歩いていく。

住民らしい深い皺が刻まれた顔のお年寄りが道路端で濡れた衣類や水洗  
いした家具を干している。

「あの日は大きな波が堤防を越えて押し寄せ、二階まで水浸しになつたん  
だよ。亡くなつたひとでも大勢いる」

潮の香りに腐敗臭が混じつた奇妙な臭いが一面に漂つていた。

超高層マンションの周りには黄色のテープが張り巡らされ、そのまゝに  
は「<危険>立ち入り禁止」の大きな看板があつた。

「窓ガラスが……」

佐藤が指差す上層階の壁面を覆うガラスが一面に割れている。地面には  
粉々になつたガラスの破片が散らばつていた。

エントランスに近づくと、壁面一杯に張られている大きなガラスも大き  
なガラスの扉も跡形さえない。

エントランスの奥にヘルメットを被つた作業員らしい姿があつた。

「取材してみる」と言い、佐藤は黄色のテープを越え、どんどん近づいていく。

いつの間にか、佐藤はM新聞社のマークの入ったヘルメットを被っている。いつも持つて歩くリュックのなかに忍ばせていたらしい。

彼は仕方なく、頭に鞆を乗せ、あとを追う。作業員たちは仕事に熱中しているのか、二人には気付かない。

大理石張りの床に泥がこびりついている。

「危ないじゃないですか。無断で入ってきてもらっては困ります」

監督者らしい中年の体格のいい大きな男が大声を上げた。

「この管理責任者はおりませんか。M新聞の佐藤です。お話を伺いたいのですが……」

「知りませんよ。われわれは請負の仕事で来ているものですから、話を聞かれてもなにも応えられません。ところで、この管理人の誰かとアポイントメントでも取っているのですか……」

「ホントに誰もいないのですか」

佐藤はかまわず、ぐんぐん奥へ入っていく。

カウンターの奥に事務室がある。境のガラス窓に人影が映っている。

「誰かいませんか。お話をききたいのですが……」

人影が動いた。ドアが開いた。女のひとが顔を出した。

佐橋祐子だった。

「あ……」

佐藤から離れて立っている九鬼に気付いて、彼女は声を発した。

彼は口を開けたまま、しばらく彼女を見ていた。彼女は話しかける佐藤を差し置いて、九鬼に近づいてくる。

「どうしてここに……」

二人は同じことを言う。

彼女は娘と孫の身を案じて飛んできた母にヒロシを預け、佐々木教授を探しにきたという。丁度、復旧工事を始めている超高層マンションに立ち寄ったところだった。

二人の様子を奇妙な目をして見ていた佐藤が二人の間に割って入り、猛然と取材をはじめた。それを無視して、彼女は九鬼と話をつづける。

超高層マンションは超巨大台風の直撃を受けた。最大瞬間風速一〇〇メートルを超すと思われる猛烈な風をまともに受け、一瞬のうちに、窓ガラスと外壁の一部が破損したようだった。窓ガラスが破損した窓から内部へ強風が吹き込み、各戸個室内部を荒し、住人に怪我を負わせた。強風と大雨がさらに被害を拡大していったらしい。

豪雨で一面に水が溢れ出していたところに、大波と高潮が押し寄せ、一気に一階と地下とが浸水してしまった。瞬く間に、地下の四階が完全に水没してしまった。

地下に設置してある機械類が水浸しになって、エレベーターや空調、給湯等のシステム、非常用発電システムなどの超高層マンションの非常用ライフラインがダウンしてしまった。

「そのとき、わたしとヒロシは屋上にある実験室におりました。急いで自室へ戻ろうとしたのですが、エレベーターが停つてしまい、非常階段を下りていったのです。二〇〇段ほど下りたあたりでヒロシが動けなくなつて、階段に腰掛けて休んでいるうちに二人とも眠り込んでしまいました……」

彼女はそのときを思い出したのか、しばらく口を噤んでいた。

「ところで、その実験室を見せてもらおうわけにはいきませんか」

佐藤が口を挟む。

彼女は九鬼の目を見た。彼は軽く頷く。

「でもエレベーターが……」

「非常階段を上れば……いいんじゃないですか」

佐藤はその気だ。

「一〇〇〇段以上ありますよ」

「え？ かまいませんよ。ねえ、先生」

「いいですよ。上りきれるか自信はないけど……」

彼はふと、超高層マンションの屋上に上ればなにか分かるような気がした。もし地殻沈下が始まっていれば超高層マンションの傾きを屋上から確かめることができるかもしれない。

「実はこれから行ってみようと思っていたところでした」

彼女は二人の返事を待たずに事務室に戻りヘルメットを持ってくと、非常階段へ向って歩き出す。佐藤は短い足をちよこまかと動かし、彼女から遅れまいと小走りに付いていく。

彼はヘルメットを被りながら、ふたりのあとをゆつくり歩いていった。

33

「最初に、あの角の窓のガラスにひびが入ったのです。つぎの瞬間、粉々になって飛び散ってしまった……」

開いたままになっているドアから実験室に入ると、佐橋祐子は窓枠だけのガラスのない窓を指差した。

窓ガラスの小さな破片が部屋中に飛び散ったままだった。応接セットの椅子が壁際に押し寄せられ、テーブルはひっくり返っている。戸棚などの家具も倒れたり、倒れずに済んだサイドボードは壁から離れ、扉が開いたままだった。コーヒール碗やコップが絨毯の上に転がっている。

「もちろん、窓ガラスは特殊なガラスですよ。合わせガラスとか……」

「ええ、特別強化した厚いペアガラスですわ」

「どの程度の風圧に耐えるものですかね」

「ハンマーで叩いても簡単に割れないものです」

九鬼は黙って室内を見渡し、彼女と佐藤のやり取りを聞いていた。簡単に割れるはずのないガラスが割れたとなると、かなりの風速か、それとも風で飛ばされた石か金属片がぶつかったのか。一箇所でも窓ガラスが壊れて風が吹き込めば、内と外からの衝撃でつぎからつぎと窓ガラスが割れていくだろう。

実験室のせいかな、家具類は最小限の抑えられているらしい。そのため、散らかり具合もこの程度で済んでいるが、様々なものが置いてある一般の住宅では足の踏み場もないくらいにものが散乱することだろう。

「怪我人はなかったのですか」

「まだ集計ができていないので分かりませんが、軽傷者を含めるとかなりの数に達するんじゃないかと思えます。わたしたちは非常階段にいましたので、幸いなんともなく済みましたが……」

「非常階段が一番安全な場所だったわけですか」

「非常階段には窓もありませんし……」

「ところで、どんな揺れ方をしたのですか。そのときは酷く揺れたのでしょうか。なにしろガラスが割れているのですからね」

「窓ガラスが割れたときですか。特別強い揺れがあったようには感じなかった気がしますが……」

「地震計（振動計）のデータは……」

九鬼が口を挟む。

「え？ こんなんだったかしら……」

彼女は窓際に設置してある地震計から記録用紙を引き抜いた。そこには振幅の広い大きな波形が描かれていた。

「こんなに長い周期の揺れがあったのか……」

彼は彼女のそばに寄って記録用紙を受け取った。

「先生、台風のような風で生じた振動ですかね。超高層ビルは地震対策でしなりやすい柔構造にしているので揺れやすいのじゃないですか。でもこれは酷い。揺れ過ぎとちがいますか」

佐藤は二人の間に割って入って、グラフを覗きながらずけずけと言う。

「そんなに揺れを感じなかったのですが……」

彼女はむっとした顔をした。

「もしかしたら、プレート上の微震動の影響かもしれない……」

彼はプレートの微震動をてつきり短い周期のものばかりと勝手に決めつけていたことに気付いた。プレート上の微震動には長周期のものもあって、それに台風のような風による長周期振動が重なり、これらの振動が超高層マンションの固有のものと共振したのかもしれない。いや、逆に、プレートの微震動に超高層マンションが僅かに共振していたところに台風の一〇〇メートルを超える猛烈な風が吹き付けたのかもしれない。

「プレートの微震動って、なんことなのですか……」

彼女の顔に不安が過った。

「まえにお話ししませんでしたか……」

彼はプレートの微震動について知っている情報のすべてを話した。

「年数センチも沈下するのですか。不等沈下が生ずれば、このマンションは数年のうちに倒壊することになるわ」

しばらくして、遠くに視点を据えた佐橋祐子の口から呟くような声もれた。

九鬼には埋めて地に立つ超高層マンションにどのような基礎工事が施されているのか詳しくは知らなかった。一度見せられた設計図には二〇メートルほどの地下部に数メートルにおよぶ分厚いコンクリートをベタに打ったベタ基礎構造が描かれていた。だがいかなる構造の基礎基礎盤であれ、年数センチで不等沈下が進行すればいかなる建築物も倒壊を免れることはないだろう。

西南の角にある小さな窓から風が吹き込んでいた。彼は窓にガラスのなことを思い出し、窓辺に近づき、顔を突き出して見回す。

西には東京湾が何事もなかったかのように静まり返り、南には東京都心が広がっていた。眼下を覗くと、周りにはところどころに水浸しになっているところが残っている。さらに、彼は目を真下に向けていく。超高層マンションの壁面が歪んで見える。

彼はふと、日本列島がそれとも関東平野か分からないが、沈下はかなり進んでいるような気がした。

「このマンションは傾いていませんか。僅かですが、西の方へ傾いているような気がしますが……」

彼は彼女を振り返る。

佐藤が「どれどれ」と言っって、飛んできた。背伸びして顔を外へ突きだ

し、下を覗く。佐橋祐子がつづく。

彼は二人の横で、超高層マンションが倒れていく様子をスローモーションの映像を見るように想像していた。

34

「佐々木先生はどこへ行ったのかな」

佐藤がソファで頭を抱え、誰ともなしに呟く。

二人に佐橋祐子加わり、付近に設置されている身元不明の遺体安置所や行方不明者安否確認掲示板を見て歩いた。次第に範囲を広げていったものの、佐々木教授の情報は何もなかった。

教授が洪水のなかを超高層マンションへ向ったところ、上流に降った豪雨で増水した隅田川や荒川では危険水位を超え、堤防決壊の危険を迎えていたのだ。ほどなく避難警報が発せられ、住民の避難がはじまった。

豪雨のなか、道路が冠水して思うように避難が進まず、多くの住民が避難中であつた。そのとき、豪雨で増水した荒川の堤防が三箇所相次いで決壊した。そのあとに高潮が押し寄せたのだ。河川堤防の決壊も相次いだ。

洪水は足立区、葛飾区、江戸川区から北区、荒川区、そして墨田区、台東区、江東区へ、さらに中央区、大田区へ広がった。隅田川と荒川に挟まれた墨田区と江東区では、高潮も重なり、一気に軒を超える洪水が押し寄せ、多くの犠牲者がでた。葛飾区、江戸川区から千葉県沿岸部へと広がって犠牲者や行方不明者を増やしていったのだ。

犠牲者の多くは東京湾へ流された。行方不明者の多くも東京湾へ流され

ていったにちがいない。

方々に臨時の遺体収容所が設けられ、東京湾から収容された遺体がつぎに搬入されているという。

この情報をもとに、九鬼は佐藤をとめない、遺体収容所巡りをはじめた。臨時の遺体収容所には近間の住民たちのほかに、遠方からも多くの人が行方不明の親族や知人を探しに押し寄せていた。

時間の経過とともに、収容される遺体の数も減っていったが、放置されている遺体の損傷も酷くなった。引き取り手があらわれない身元不明の遺体は身体の特徴やDNAの記録を保存し、茶毘に付されていく。

行方不明の佐々木教授はまだ見付からなかった。もし、佐々木教授が亡くなっているのなら、せめて茶毘に付されるまえに探し出したかった。こんな思いで、二人は毎日のように方々の遺体収容所を訪ねて歩いた。

毎回空振りに終り、佐藤は諦めかけていた。だが九鬼には教授がいまもって見付からないということはどこかで生きている証じゃないかと思つた。彼は一縷の望みを抱いて教授探しをつづけた。

二人とも疲れ切つて研究室に戻ると、ソファの奪い合いになる。だが小柄な佐藤は小さな身体を敏捷に動かし、大概さきにソファに潜り込み横になつてしまふ。

彼は仕方なく椅子の腰をかけ、テーブルに足を伸ばして目を閉じる。

電話のベルが鳴つた。

二人とも動こうとしない。

「佐々木先生からかな」

佐藤は呟く。

「……………」

彼は目を閉じたままだ。先生なら、電話せずに突然姿を現すはずだ。彼はこう思い、ふたたび深い眠りに落ちていく。

再度電話のベルが鳴る。彼はしぶしぶ電話機のある机に近づく。

「無事だったか……」

アンダーソンだった。何度電話しても出ないので心配したという。

「ああ……」

「東京が沈みはじめているんだろ」

「まだ、大丈夫だ」

「シミュレーションをやった連中はマンツルの流動が思っていたよりも早く、沈下速度が年数センチより大きいといっている。建物は超高層ビルや高層ビルから倒れだすそうだ。そのまゑにライフライン、道路、交通システムなどが機能不全に陥ることだろう……」

「うむ、そうか……」

九鬼は突然、いままでよく分からなかった沈下のメカニズムが分かったような気がした。

地球の自転速度が遅くなれば遠心力が弱まり、いままで赤道付近を目指して流動していたマンツルが自転軸の極方向へ向きを変えるのだ。これによつて、日本列島の下へ潜り込んでいる太平洋プレートやフィリピン海プレートの先端にさらに下へ引き摺る力が加わるにちがいない。

突然、彼の頭を沈みゆく「第四のプレート」が過つた。

彼は受話器を耳から離し、アンダーソンの説明を聞いていなかった。そんな彼の態度を感じ取つたのか、アンダーソンも早々に電話を切つてしまった。

佐藤がソファに小柄な身体を伸ばし、気持ち良さそうに寝息を立ててい

る。彼はふたたび眠ろうと椅子に腰を下ろし、テーブルに足を載せて目を閉じた。だが閉じた瞼に倒れかけた超高層マンションの窓から盛んに手を振る佐橋祐子が現れ、眠ることができなかった。

彼は机に戻り、パソコンを開いた。ディスプレイに目を向けるが、極へ向つて流れるマンツルの奔流しか見えなかった。

### 35

佐橋祐子は二人と別れてからも行方不明の佐々木教授の手掛かりを求めて彷徨っていた。なんの当てもなかった。だがじつとしていることができなかった。

あのときなぜ、ヒロシと一緒に実家へ避難しなかったのだろうか。母とのやり取りで急に心変わりしたのでろうか。いや、彼女には最初から避難する気はなかったのだ。現代文明の粋を凝らした超高層マンションが崩壊するとは考えられなかった。佐々木や九鬼がなんと言おうと、彼女はどんな自然の脅威にも立ち向かつていくのだとどこかに決めていたのだ。

こんな思いがこころならずも母とのあのようやり取りを招いたのだ。

彼女はいまになって、あのとき素直に避難しておればよかったと何度も思った。素直に避難しておれば、佐々木教授が行方不明になることはなかったのだ。

この思いが彼女を苦しめ、さいなみつづける。彼女は身の置き所がなかった。彼女には佐々木を探してひたすら歩きつづけるほかなかった。

佐々木の面影が浮かぶ。奇妙なほど眼窩深く窪んでいる小さな目をはじ

めて見たとき、彼女は気味悪さを覚えた。だが黒目がちの目は知らずのうちにはひとを引き付けてしまう。ヒロシを連れていた彼女は二人掛けの通路側の座席から、通路を隔てた同列の隣にいる佐々木を何度も盗み見していた。別に意識してそうしている訳でもないのに、いつの間にか目が吸い寄せられているのだった。その度ごとに、彼女は彼が気付きはしないかと慌てて視線を外した。

日中はさほどでもないが、夕方になるとどこからともなく蚊の大群が押し寄せる。方々に残っている水溜まりがマラリアやデング熱などの感染症を媒介する蚊を大量発生させているのだ。

避難している住民のなかにマラリアやデング熱の患者がでていた。避難者を収容しているテント村の周囲では消毒薬や殺虫剤が日に何度も散布された。ゼロメートル地帯一帯には散布用に無人ヘリが使用されていた。

彼女はハンカチで口を抑え、ヘリをやり過す。彼女は殺虫剤を頭から浴びながら、一日中歩き回る。あくる日も朝から日が暮れるまで歩いた。

その日は電車のなかでついうとうととしてしまい、気が付いたときには車窓にいままで見たことのない海の風景が広がっていた。

電車を降りてホームに立つと、海から心地よい風が吹いていた。

彼女は白い日傘を広げ、誘われるように海へ向った。

干潮なのか、砂浜が沖へ延び、干潟が広がっている。

日傘をかざし、彼女はしばらく砂浜に立っていた。

人影はなかった。いや、点々と人影はあった。だが彼女の目には入らなかった。

遠くで、彼女を呼んでいる。じつと耳を済まして、彼女は声を聞いた。

佐々木の声だった。

彼女は声に向って歩き出す。サンダルが砂に埋まり、足の裏に砂が入る。留め金はずれ、サンダルが右足から脱げた。彼女はかまわず歩きつづける。もう一方のサンダルも脱げる。

彼女は海に向って、砂浜をさらに歩いていく。

砂浜の先に、海が光っている。

足を止めて、彼女は海を見た。盛り上がった海が急に沈んでいった。

彼女は誘われるように歩き出す。

彼女は海のさきに佐々木が小さな目に微笑みを湛えて待っているような気がした。

彼女は小走りに砂浜を急ぐ。彼が背を向けて去る前に追いつこうと走り出す。

いつの間にか、足元が濡れていた。

海が忍び寄り、彼女の足首を掴まえる。

彼女は足元に大きな口を開けた海が迫っていることに気付かず、さらに前へ進む。

彼女を呼ぶ声が次第に大きくなった。

海水が膝を濡らし、腰を濡らした。

彼女はかまわず前へ進む。

声が彼女を包み込む。

声のカプセルに閉じ込められた彼女は、ゆらりゆらりと光る海面を漂い、沖へ流されていく。

「なにをもたもたしているんですかね」

佐藤が研究室に入ってくるなり、大声でばやく。

「なにが……」

九鬼はまたはじまったと思いがながら、机に座ったまま顔を上げる。

「もう一週間もなるのに、電気がつかない。それで、水も出ない。先生のマンションはどうですか」

佐藤はマンションで一人暮らしをつづけていた。一二階建てのマンションで、停電で屋上のタンクに水を汲み上げることができないのだという。

超巨大台風が去ると同時に、政府は災害対策本部を設置し、本格的な被災対策がはじまった。首都東京には大量の自衛隊を投入し、迅速な復旧を目指したが、被害が甚大過ぎたのか、復旧工事はなかなか思うように進まなかった。

洪水が引かないのだ。河川の決壊した堤防を補修し、破壊された防潮堤や水門も修復した。だが何度も溜まっている水をポンプで汲み出してもどこからともなく水がしみ出てくるのだ。そのたびに、堤防補修や防潮堤の工事が繰り返された。

洪水が完全に引かないのに、台風が去ると被災者たちはわれさきに浸水したわが家へ戻っていった後片づけをはじめた。水浸しになった畳みや家具が運び出し、ところかわまず積もっている泥を洗い流す。道路端には泥が捨てられ、汚れた畳や家具、濡れた本や雑誌など、ゴミの山が築かれた。

電気や水道が復旧していないところも多かった。一度補修してもすぐ壊れてしまうのだ。電気や水道が使えないと、ボランティアの若者さえ一日

で手を上げてしまう。被災者たちは疲れ果て、電気や水道の一日も早い復旧を願う。

強風でなぎ倒された地上の電柱や送電用鉄塔の復旧は早かった。だが水浸しになった変電所や地下ケーブルなどの地下施設の復旧に手間がかかる。地下施設本体のコンクリート壁が破損していてそこから地下水がしみ出てくるらしい。ここでもポンプで水を汲み出しているが、なかなか減らないのだ。

浄水場の地下施設も同様だった。

電気や水道だけではない。ガスや交通システムにも同じような浸水被害が継続していて、復旧に手間取っていた。

浸水被害のあった駅の地下ホーム、地下鉄、高速道路、機械室などを収容する地下施設の復旧が遅れ、交通システムは半身不随の状態にあった。

これだけではない。浸水のあったビル地階や都心の地下に広がる地下街が壊滅状態にあった。

「まだライフラインを確保できないわけかね、東京のど真ん中で……」

彼は佐藤のまへの椅子に移る。

「やはりエンドレスなんですかね」

「エンドレス？」

「まえにおっしゃっていたでしょう、復旧工事はエンドレスにつづく……」

「あ、そのことね」

彼は東京が沈下するといったアンダーソンを思い浮かべる。

「いくらポンピングアップしても追いつかないところもあるそうですよ。地下水位もかなり上がってきているようですね」

浸水してきた水をポンプで汲み出してもどこからともなく水が浸入してくるのだ。それに浸水被害を受けていなかったところでも、地下施設に同じように水がしみ出てきて、いつの間にか水浸しになっているという。

「うむ、やはり沈下がはじまっているうえに、地下水位が急激に高まっているせいなのか……」

地盤が不等沈下すれば、マンションのようなコンクリート建造物ではまずコンクリート壁にヒビ割れが入り、さらに進めば、倒壊する。一方、地下水位が上がれば、地下水位より低いところに設置された地中の建造物には押し上げる力が働く。JR東京駅などの深い地下にある地下ホームでは浮き上がらないように重しを載せたり、岩盤に何本ものボルトで止めたりしているという。

「地下水位が急速に高まっているのですか」

「東京湾の潮位が異常に高い。これに応じてこの辺の地下水位も急激に高まっているかもしれない」

「そうですかね。やはり、地盤沈下のはうが大きいんじゃないんですか」

「でも、年数センチ程度の沈下でそんな被害がでるかな」

「じゃ、両方が重なって大きくなっているのでしょうか」

「なるほど……」

彼は持ち上げる。佐藤は鼻をピクピクさせている。

彼にはひとつの企てがあった。佐藤にそろそろ沈下がはじまっていることを取り上げて報道してほしいと思っていたのだ。地震の専門家でもない彼が言ったところで誰も信じないだろうし、ヘタをするとパニックとなり、対策どころか大騒ぎを引き起こすことになりかねない。

彼は地震の専門家でもなければ、ひとを信用させる沈下のデータもなかつ

た。それに沈下が一様に広がっているかどうかとも問題だった。どこをどう計測すれば正確なデータをうることができるか分からないのだ。

彼は内心、沈下速度が予想より早いのではないかと感じていた。もしそうなら、このことを早く周知させ、対策を講じるべきではないのか。

沈下が進んでいるのなら、いま実施している復旧工事は全く意味がなかった。エンドレスの復旧工事で仕事にありつくものもいるだろうが、こんなことをやつても全くムダだ。この復旧工事は「賽の河原の石積み」なのだ、皆に知らせたかった。

だが現代文明はまさにムダの効用を追い求めた「賽の河原の石積み」文明だったのじゃないのか。成長信仰の大量生産大量消費大量廃棄のフロー経済、自らつくりあげてきたものを壊すための破壊力の巨大化高度化大量化、人類を破滅に導く究極の大量殺戮兵器の開発……。造っては壊し、壊しては造る、これが現代文明だった。

壊し役が超巨大台風となり、巨大地震となつて、かえって手間が省けたとでもいうのか。

「……これから、教授を探しに出かけるとするか……」

彼は考えあぐね、呟く。

37

九鬼が立ち上がりかけたとき、机の電話がけたたましく鳴った。

一瞬、彼は机を振り返るが、振り切つてそのままドアのほうへ歩き出す。もうどうでもよかつた。

彼はドアの外へ足を踏み出す。追いつくように、ベルが執拗に鳴り響く。先に出た小柄な佐藤が身を翻し、「佐々木先生かも……」と言いながら彼の横をくぐり抜け、机に向って走った。

「え？　そうですが……」

佐藤は受話器を耳にし、何度も頷きながら、九鬼を手招きする。

彼はしぶしぶ引き返さず。

だが佐藤は彼の目のまえで、「分かりました。先生に伝えます」と言つて、受話器を戻してしまふ。

「佐藤祐子さんがA病院に収容されているそうです」

佐藤が一息つくと、九鬼をじつと見て言った。佐々木教授宛に警察から連絡があったが、不在だったので事務局が受けて知らせてきたという。

「病院に……」

彼の脳裏を不吉な思いが過る。彼は彼女に部屋を提供して以来、自分のマンションには一度も帰っていなかったし、彼女とも超高層マンションを訪ねて一緒に教授探しをしたときから顔を合わせていなかった。ヒロシを実家の母に預け、ひとりとなった彼女がどう過しているか知らなかったが、毎日勤務先の建築事務所に出勤しているものと思っていた。

「先生、行ってみましょう。先に警察に寄つて事情を聞いてから、病院へ行くことにしましょうか……」

佐藤はなにかを感じ取っているらしく、光る目で彼を促す。

九鬼は佐藤に彼女との関係を知られては教授が困るかもしれないと思い、一瞬躊躇した。だが佐藤の助力が必要かもしれないと思ひ直し、彼は口を閉ざしたまま、佐藤とともに歩きます。

「行方不明者の捜索を手伝っている漁船が見付けたんですよ。最初はつきり溺死体かと思つたらしいが、引き揚げてみると生きていた女性だった。意識がなかったもので、急いで病院へ運び込んだそうです」

警察署は繁華街から少し離れたところにあつた。中年係官は書類を捲りながら、連絡を受けてやってきた二人連れの男に好奇の視線を投げながら、ぼそぼそという。

「大丈夫だったのですね」

「すぐ意識を取り戻したようです。連絡先も本人の口から聞き出したものです」

「そうですか……」

九鬼には佐藤祐子がなぜ行方不明の教授の名を言ったのか気になった。すぐにも病院へ行きたかつた。だが佐藤は悠然と構えている。

「ところで、いまも犠牲者の遺体が揚がるんですか」

「毎日何体か見付かるようです」

「それは……」

「この近くに仮の安置所があります。そこへ……。そうそう、あの日も女性と一緒に体を引き揚げたと言っていたが……」

「まだ安置所に……」

「多分、まだ置いてあるかもしれない」

佐藤は安置所の場所を聞くと、すぐ立ち上がって、九鬼を促す。

安置所はすぐ見付かつた。冷凍設備のある倉庫だつた。

入口に大きなボードがあつて、身元不明の遺体の推定年齢、性別、特徴、所持品、発見場所などを書いたリストが張り出してあつた。身元が判明したのか、ところどころに黒のマジックペンで太い線が引いてある。

二人は口をきかず、教授に該当する身元不明の遺体がないか、リストをチェックしていく。だがそれらしい記載は見当たらなかった。

38

エレベーターを六階で降りると、目のまえにナースステーションのカウンターがあった。廊下の中央に面会時間の標識が立ててある。

九鬼は恐る恐るカウンターの近づき、尋ねる。

「佐橋祐子さんですか、急患の……」

目がねを掛けた三〇代の女性看護師が色白の顔を上げ、九鬼の問い掛けに応えながら、二人をじろつと一瞥する。

集中治療室から個室に移っているという。それを耳にすると、佐藤はすぐ壁の病室配置図のまえに立ち、個室を探す。

「面会時間は三時からです。しばらくお待ち下さい」

ちよこまかと動く佐藤を牽制するように、看護師が言う。

「個室だからかまわんでしよう」

佐藤は口を尖らす。

「患者さんの安静も必要なんです」

「そんなに悪いんですか。どこが悪いんですか。もう意識は快復しているんでしょう。すぐ退院できるんじゃないんですか」

佐藤は早口でまくし立てる。

恐れをなしたのか、看護師はそそくさと奥に姿を消す。

「先生、行きましょう」

佐藤は唾然としてカウンターのまえに立ったまま見守っていた九鬼を促す。彼は佐藤のあとを付いていく。

個室病室は廊下の突き当たりであった。

小さな細長い部屋で中央にベッドが置いてある。佐橋祐子はベッドに仰向けに寝ていた。ノックの音に目を覚めたのか、それとも眠れずにいたのか、開いた目を天井に向け、血の気のない白い顔をしてじっとしている。

「あ、先生、すみません」

佐橋祐子は九鬼に気付いて上半身を起そうとして身体を持ち上げたが、佐藤を見てふたたび横になってしまう。

彼女のそんな様子に、佐藤は「外で待っている」と言って、出ていった。

九鬼が覗き込むと、彼女は身を起こした。両目から涙が零れた。

しばらくタオルで両目を押さえていたが、やがて口を開いた。

彼女が話した内容はつぎのようであった。

その日も朝から佐々木先生を探しに出掛けたという。砂浜の立って海の見ていると、先生の声が聞こえてきた。ひとりで海へ向って歩き出し、気が付いたら、海のなかにいた。目の前を黒い鞆のようなものが浮いていた。手を伸ばして取ろうとすると沖のほうへ流れていく。鞆から先生の声がかかるような気がして追いかけて身体を伸ばして鞆を掴まえたと思つたとき、海底から足が離れてしまう。

気が付いたとき、病院のベッドにいたが、意識が戻るまで、そばに佐々木先生がいて話していた。意識がもどつたとき佐々木先生が見えなかったので、呼んでもらおうと電話してもらつたという。

「鞆はどうしましたか」

九鬼は穏やかに尋ねる。

「右手で確かに掴んだと思ったのですが……」

彼女は自信なげに呟く。

ふたりはしばらく黙ったまま、互いに顔を見合わせていた。

ドアのノックにつづいて、佐藤が大きな紙袋を二つもって入ってきた。

「支払いを済ませれば、いつ退院してもいいそうだ。これは着ていた衣類と持ち物で、こっちは着替え用に調達してもらったものだ」

こう言つて、紙袋を差し出した。

佐橋祐子が用意するというので、二人は廊下に出た。九鬼は佐藤に彼女から聞いたことを掻摘んで話した。

「すると、助けられたときにはすでに意識がなかったんだな」

佐藤は窓の外へ視線をそらした。

「そうらしい。で、そのときどんな状態だったか知りたいた言っていた。

教授の鞆のことも尋ねたいらしく、助けてくれたひとに会ってお礼を言いたがっている」

九鬼は彼女もやはり教授が亡くなったものと思っていると感じた。そして自分だけが生き残っていることにやり切れなさを感じているにちがいないと思つた。というより、彼自身がそうだった。

「帰りにもう一度警察に寄つて、助けてくれたひとのことを聞くことにしますか」

「そうね。もう一度安置所で調べて見るかな……」

九鬼はふとあのリストのなかに教授の遺体が載っていたような気がした。彼は時間がないと早く打ちきつてしまったのも、無意識のうちに教授の遺体を見たくないという思いが働いていたからにちがいない。

彼は自分が恥ずかしかつた。教授の背を押して大雨が降る危険の中へ追いやりながら、いつまでも教授がどこかで生きていると信じようとしている自分が無性に腹立たしかつた。

それにしても、妻亜耶子を死なし、今度は義兄で師の佐々木俊太郎を死に追いやつてしまったのだ。死ぬべきは佐橋祐子ではなく、九鬼陽一郎ではなかつたのか。彼は耐えられなかつた。

「お待たせいたしました。本当にありがとうございます」

佐橋祐子だつた。髪には櫛を入れ、うつつすらと化粧さえしている。病室のあと片付けもすっかり終わつたらしく、二人のままで深々と頭を下げる。

いまさら逃げ出すこともできず、彼はじつと耐えるほかなかつた。いや、耐えることだけがいまの自分にできることであつた。佐藤と佐橋祐子は言葉を交わしていたが、彼は黙つてふたりのあとを歩いていく。

### 39

白木の棺の上に黒い鞆がぼつんとあつた。

九鬼は並べてある棺の間を縫つて、鞆が載っている白木の棺に近づく。

佐橋祐子と佐藤がつづく。

佐橋祐子を救つてくれた初老の漁師は鞆とともに男性の遺体を引き揚げた。鞆は多分男のものだと思ひ、漁師は遺体の持ち物として届けていたのだつた。

頭髮は抜け落ち、遺体はかなり傷んでいた。だが佐々木教授に間違いなかつた。

遺体の損傷が激しいので、お別れ会は後日開くこととして、近くの斎場で通夜、葬儀を密葬で済ませ、明日に荼毘に付すことになった。密葬は義弟である九鬼が喪主となつて行い、佐橋祐子と佐藤の二人だけが加わつた。教授には家族がなかつた。佐々木俊太郎は幼少のころ母が病死し、その後、継母に育てられたが、大学生のころ、父と継母が相次いで亡くなり、妹亜耶子と二人きりになった。俊太郎はずっと独身だったので、亜耶子が亡くなると、完全にひとりになつてしまつていた。

翌朝、棺の遺体は九鬼と佐橋祐子を供にして、火葬場へ運ばれていった。火葬場は早朝だというのに混雑していた。五基ある焼却炉はフル稼働しており、中年の制服を着た係員は機械的にてきぱきと進めていく。

炉のまえに運ばれた棺に遺族の最後の別れが済むと、係員は軽く両手を合わせて黙礼し、白い手袋の両手で棺を炉の中へ押し込む。長い鉄の火棒を取りだし、棺をさらに炉の奥の方へ押し込んでいく。炉の扉を閉ざす。

炉のまえで棺を見送ると、二人は控室で遺骨を待った。

40

白布に包まれた骨箱をリビングルームのテーブルの中央に置くと、九鬼と佐橋祐子は向かい合つて椅子に腰を下ろす。そのままの姿勢で、二人は長い間、口を閉ざしたままだった。

九鬼は血の気のない蒼白な顔に気が付き、彼女に休むように何度も進める。だが彼女は頑なに拒みつけ、椅子から立ち上がるうとしない。

彼は目を閉じる。

教授を送り出した日が蘇つてきた。彼は台風の動きが気になつて、朝から研究室の机でディスプレイを覗いていた。

あの日も教授はいつものようにぶらりと研究室に入つてきて机に近づいてきた。佐橋祐子がヒロシを避難させないでいるという。

教授は彼女に会つてもう一度説得しようか迷つておられた。彼にはそう見えた。彼は前後を考へることなしに、単純に彼女への説得を再度試みることをすすめた。そして大雨のなかへ教授を押し出したのだ。彼は真剣に超高層マンションが危険に曝されていると感じていたからだつた。

その結果、教授を死に追いやつてしまつたのだ。

「教授を殺してしまつた……」

九鬼はこのころの底から声を絞りだす。

佐橋祐子ははつとして目を大きく見開き、彼を見た。彼の目は閉じたまままだ。

「わたしのせいです。わたしがヒロシを避難させようとしなかつた。わたしがいけなかつたのです」

彼は甲高い声に驚いて目を開く。彼女を見た。両眼に涙が溢れていた。

「いや、教授を殺したのはこのわたしです、あなたのせいなんかじゃありません」

「……………」

彼女は顔を一層蒼白にして、頭を横に振っている。

「もう直き台風がやってくるのを知りながら、わたしが教授を大雨のなかへ押し出したのです。上流の山岳地帯での豪雨で河川が増水しており、洪水の危険を感じていた教授を無理やり送り出したのです」

「違います。超高層マンションに倒壊の危険があつたからでしょう。わた

しがヒロシを避難させないでいたからです……」

「あなたは自分を責めるのは止しなさい。一度死のうとしたあなたを先生は追い返してよこしたのです……」

彼女は恨めしそうな目を彼に向けている。彼はそのままつづける。

「……わたしは間違っていました。わたしは研究を止めます。ずっと気候変動の研究をつづけましたが、もう止めます……」

彼は大きな溜息を吐いた。

「……いま地球を襲っている異常気象などの気候変動は巨大化高度化大量化した人間活動が招いたものです。根本的に必要なことはこんな人間活動を抑制し、止めることです。そうできなければ気候変動を抑えることはできません。そのためには、気候変動から生じる異常気象を事前に的確に予測し、社会に対し危険の重大性を知らせることが第一だと思っていたのです。こう考え、これまでこれに関する研究を実施してきました。でもいま、それが間違っていたことに気付きました。こんな研究はもう止めます。止めます……」

佐橋祐子をまえにしながら、それは彼自身の自分に対するいままでの自分との訣別の宣言だった。妻亜耶子を失い、恩師で義兄である佐々木教授を亡くして、彼は自分の行っている研究の無力さ無意味さによりやく気付いたのだった。

彼は地球温暖化や異常気象の予測を通して気候変動のもたらす被害の甚大さを明らかにすることによって、いき過ぎた人間活動の巨大化高度化大量化が是正されることを期待した。被害の甚大さが分かれば、自ずから対策を講じるはずと思った。社会はそのように動き、人間活動は巨大化高度化大量化是正へと向うものと思っていたのだ。そう思い、彼は気候変動予

測の研究にのめり込んでいった。

だが地球温暖化が急速に進み、異常気象が頻発するようになってもなんら根本的な対策はなされず、いき過ぎた人間活動は是正されるどころか、逆にますます巨大化高度化大量化していくありさまなのだ。

それでも彼はまだ気候変動モデルの精度が悪く、予測が不十分だからだと考え、さらに精度向上を目指すとともに、モデルの全体性を高め、地球全体モデルの構築を目指そうとしたのだ。

こんなことまでして精緻な予測ができたとしても、人間はこれを利用して、さらに自然征服のための活動の巨大化高度化大量化を目指すのだ。彼はいままでこのことに気付かなかったのだった。

「わたしはこれまで巨大化高度化大量化し過ぎた人間活動の是正を夢見ながら、それが単なる幻想であることに気付かず、妻亜耶子の生命と引き換えにしてまで、研究を一心に進めてきた。教授が亡くなつたいま、ようやく、わたしが見ていた夢が幻想であることに気付いたのです。わたしの研究が人間活動を是正するどころか、かえって一層の巨大化高度化大量化に貢献したばかりでなく、被害の巨大化高度化大量化をも招いていたことに気付いたのです。わたしは迂闊にも、われわれ人間が自然（地球）に育まれたものであること忘れていたのです。自然の力を侮り、自然を征服しようとするれば、自然が倍加して仕返すものであることを決して忘れてはならないのです……」

「……………」

彼女は黙って、じつと彼を見つめていた。

「こんなことをわたしと言うのは笑止千万なことですが……。なにしろ、わたしのこれまでの研究はまさに自然征服のひとつの試みだったわけですから……」

からね」

彼は口を歪め、寂しく笑った。それは自分自身に対する嘲笑だった。

「超高層のビルやマンションもそうだったのですか……」

彼は彼女の呟きを木箱の中で教授が耳を澄まして聞いているように思った。

# エピソード

人間の飽くなき巨大化高度化大量化活動に抗するように、超巨大台風やゲリラ豪雨が大都市を何度も襲った。日本列島は微震動に曝され、首都圏、中部圏、近畿圏の沈下もつづいた。

超高層ビルがゆっくり傾き出す。その都度倒壊防止対策の工事がなされていたが、エンドレスの対策工事もつづかず、やがて放置されていくことだろう。こうしてやがて超高層ビルやマンションは倒壊を迎えることになるのだ。

地上の建造物には倒壊の危険があったが、それだけではなかった。地下部分の壁にはヒビが走り、地下水がしみ出ていた。水浸しになった地下街ではポンプによる排水がつづけられた。だがカビが生え、異臭を放ち出し、次第に客足が遠のき、放置されるものも出てきていた。

鉄道の地下ホームや地下鉄ではメンテナンスが一生懸命につづけられたものの、危険の多い箇所では運行停止になっていく。もっぱらバスの利用がすすめられたが、高速自動車道は利用できず、渋滞が常態となっていた。

ゼロメートル地帯では台風や豪雨のたびに床下床上浸水が繰り返された。河川の堤防や防潮堤からの浸水も後を絶たず、台風や豪雨での洪水があとあとまで尾を引く。

水溜まりには感染症予防対策のために無人ヘリで大量の殺虫剤がたびたび散布される。消毒剤の散布もたびたびなされるものの、日増しに衛生状態が悪化していく。

住民のなかには見切りをつけ、他へ移住するものも出たが、へばり付い

て頑張っているものや、どこへも行けずにいるものも多く、被害が出るたびに復旧工事が繰り返されていた。

(第三部 完)

(この物語はフィクションであり、登場する人物および団体名は実存するものと一切関係がありません。)

地球温暖化の果てに第三部―狂風雨震列島

生野以久男

二〇〇八年九月二十五日第一版発行

(c) Ikno Ikuno 2008

発行所 [kinokopress.com](http://kinokopress.com)

代表 森岡正博

所在地 大阪府堺市学園町一―一 大阪府立大学人間社会学部

倫理学研究室内

連絡先 [www.kinokopress.com](http://www.kinokopress.com) 内の連絡先に問い合わせ

本文レイアウト+デザイン 森岡正博

本書およびPDFファイルの無断複写は、著作権法上の例外を除き、禁  
じられています。

ISBN なし